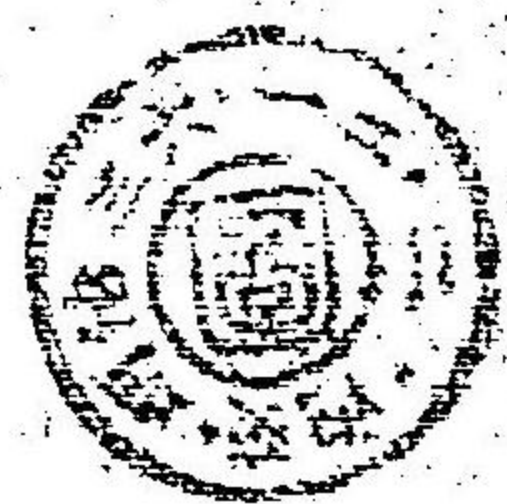


正教新報記者 山田豐彥著

宗教的批評的論文集



明治卅六年十二月 東京教要社發行

81-1002

Его Пресвященству Пресвященнейшему

ЕПИСКОПУ НИКОЛАЮ

съ Глубоким Почтением Посвящаю

своей Недостойной Труд.

Авторъ Павелъ Тоёхиро Петровичъ Намаса

г. Токио, 1903 Года, Ноябрь 28. Числа.

自序

丈夫處世以意氣爲貴意氣相投則死不足言也況遭高德俊才端誠篤義者誰不奉心身以從之乎哉予之始見正教會主教尼闊賴師也實在年少氣銳之時今也既過人生之半嗚呼回顧往事茫乎如夢雖然予也幸夙免乎世累登高賦詩臨流屬文悠悠自適以至于今日莫非尼師之賜予之見師也始則以爲豪邁不羈之士也既而又以爲仁愛平等者蓋其性也然

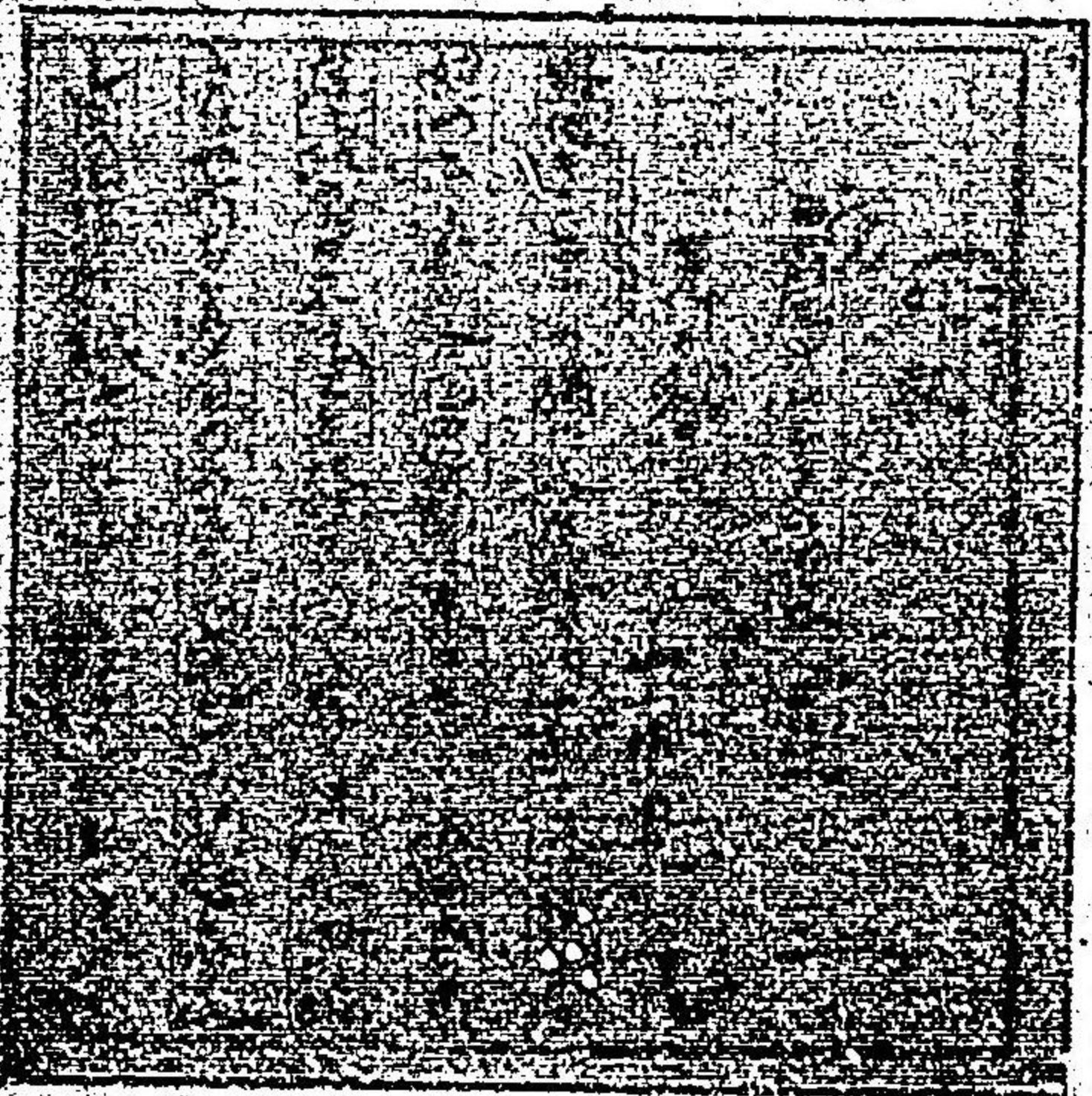
是其一端而已其以爲豪邁不羈者則大義之發也以爲仁愛平等者則至情之動也師事神恭虔接人慈和高德圓滿罕見其比予之奉心身以從之蓋有以也予非才操觚從師託生於鉛槧一十年于茲今集收正教新報所載拙著數篇付諸剞劂以謀公行聊以爲吾生之記念所載說論辭理薄陋恐不免遼東白豕之譏大方諸君子尙勿咎焉明治卅六年十一月枯柳居士山田豐彥書於籬菊花稀處

例言

- 一 本書を出版するに際し全文校閲の勞を取られ且つ助言を辱ふしたるは岩澤瀨沼の二學士なり殊に卷頭に書してその厚意を深謝す
- 一 本書は最初『正教新報』の論説のみを採收する筈なりしが印刷半にして思ふ所あり更に『心海』及び予が主幹たりし『夏錦』より二三の文を執りて附加したり
- 一 本書卷首に漢文の自序を載せたるは或は讀者の奇とする所ならん然れども予は自序中にも云へるが如く聊か記念の爲めに本書を出版する者なれば予が平常爲さるる所を爲して以て趣を異にせるのみ讀者幸に告むる勿れ



編輯局經執筆中の枯柳
予及び彼の原稿(原稿は
キヤネフ事件につきて
英米諸新聞の虚報を辯
したる文の冒頭なり)



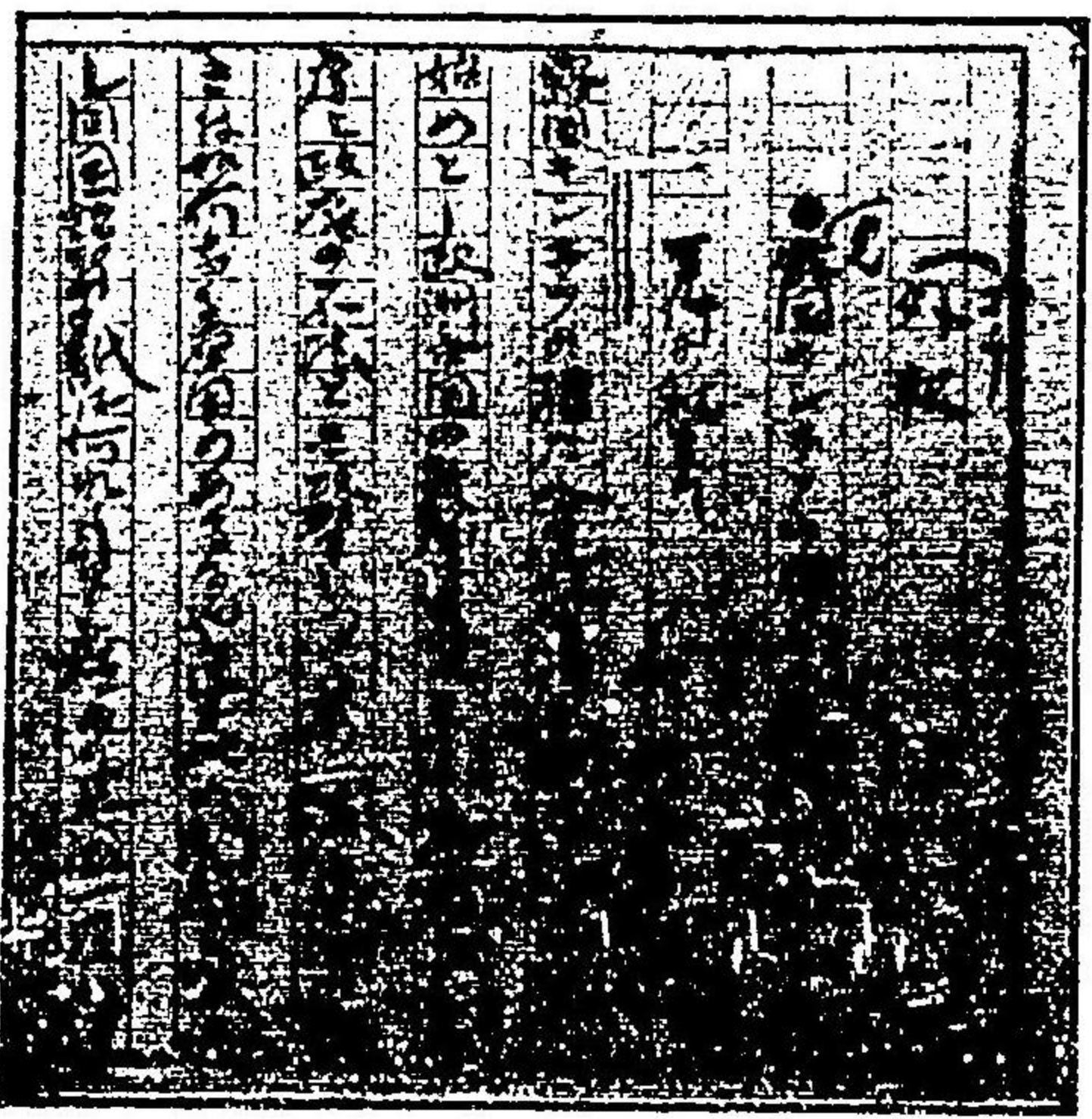
前 言

本書を出版するに際し余は校閲の勞を取らねばならぬ旨を告げられたるは
君澤誠治の「學士なり殊に危險に當りてその原稿を校閲す
」本書は最初「新報新聞」の論議のみを採録する旨なりしが編輯者にして
思ふ所ありては心海及び予が主筆たりし「新報」より二三の文を採り
て附加したり

本書發售に漢文の原序を載せたるは或は讀者の奇とする所なり然れ
ども予は原序中に「云へるが如く細い紙の爲めに本書を出版する所
なれば悉く不審處あり」と言ふを以て其の語を異にせしめのみ讀者幸に許
すべし



編輯局裡執筆中の枯柳
子及び彼の原稿(原稿は
キシネフ事件につきて
英米諸新聞の虚報を辯
したる文の冒頭なり)



宗教的批評的論文集目次

一	ニーチエ及びトウストイの倫理思想	一頁
二	『無神無靈魂』を讀みて	四一
三	マルテンセン師の愛動物論	四九
四	人格的神に就て	五九
五	生命の秘義と愛の本源	七三
六	排基督教の諸説	八二
七	靈魂の起原に關する諸説	九五
八	死及び未來	一〇六
九	柳文を讀む	一一七
十	施約瑟師の新清譯聖書に就て	一三〇
十一	舊新約聖書と徳義	一四二
十二	異教の哲人セネカと聖使徒パウロ	一五一



宗教的批評的論文集

山田 枯柳 著

ニーチェ及びトウストイの倫理思想

第一

ニーチェ及トウストイは現今歐洲に於ける二大思想家なり然るに今やニーチェ既に易簀し、トウストイまた病危からんとす、泰山頽れ、梁木壞れ、哲人萎む、これ蓋し連命の常にして、敢て怪むに足らずと雖、久しく歐洲の思想界を動かしたる二大家が死の中に永く眠らんとするを想起しては、吾人感慨の禁する能はざる者あり、茲に聊か二氏の倫理に對する思想の一斑を叙し、且つ之に吾人が評論を附せんとす。讀者幸に一讀の勞を吝む勿れ。

夫れ思想の運動は、常に一定の所に滞在して活動する者に非ず、必ずや一の極端より他の極端に移り、

寸時も止む時なきものなり。是れ古今東西の思想史に於て見る所の現象にして、人の皆認る所なり。翻りて十八世紀に於ける歐洲の思想界を見るに、偶々流離顛沛に生涯を送りし哲人ルッソの如き大感情家ありて、大に世を動かしたるありと雖、斯の如きは寧ろ異數に屬する者にして、十八世紀の思想界は、要するにカントの『純理批判』の最も勢力を有し、多數の思想家を支配したる時代にして、感情なき理論最もさかんにして、冷々たる思索これ勉めたり。然れども斯の如き學風は、長く人心に滿足を與ふる者にあらず。これが反對たる感情に富める哲學を要求するに至るは、必然の勢なりとす。かくの如く人心漸く冷靜なる唯理の岩窟中にあるを厭ひ、詩美感情にみちたる青山綠水の間に遊ばんとする傾向ある時に際して、一代の天才シヨペンハウエルは現はれたり、シ氏は幼より多感多情の人にして、その厭世哲學の如きは、實に少年の時に心中に根本を置きし者なりと云ふ、彼嘗て十五歳の時、佛國に遊び、山野を跋渉して、天然の佳景に興感し、造化の精妙を樂みしが、偶然破屋の哀れむ可き状態を觀、心中に湧きし興も一時に消散し去り、胸中の琴線轉た悲音を發してやまざりしといふ。既にしてツローロンに舟こぐ奴隸の非運を悲み、リオンに市民が前年同胞の摧殘被害せられし所に熙々相戯るゝを見ては、人生の黒漫々たるに悲嗟の聲を禁する能はざりき、それ十有五とし云へば、偉大なる支那人孔子が學に志したる年頃にして、我が日本の青年諸君が中學にありて不規則なる英語を

あやつり、體操運動に餘念なき時代なり。嗚呼誰かまだシヨペンハウエルの如き志を有せんや。天才は幼より天才なり。彼が後年厭世哲學を組織し、『優波尼沙陀』を贊稱して置かざりしはまた故なきにあらざる也。

シヨペンハウエルは、哲學者といはんよりも寧ろ、詩人、美術家といふを適當とする程なり。彼の著書は、理論の精確を以て名あるに非ずして、奇警の觀察、優美の觀念に富み、その文また流麗にして、碧水噴野を流るゝの感あり、しかも奇語警句に富むは、恰も奇岩怪石のその間に横りて、水流をして尙一層その狀を麗妙にするが如し。唯、論敵を痛罵するに於て、聊か野卑の語あるは、是れ實に彼の瑕瑾のみ。

シ氏は情に富める人にして、その哲學亦感情に富めり、殊にその倫理思想は、その根底を理の上に置かずして情の上に置けり。是れ殊に注意すべき點なりとす。

獨のフレイドリヒ、ニーチエ (Friedrich Nietzsche) と露のレオ、トウストノイ (Leo Tolstoy) との二大思想家が倫理に對する意見は、敢てシヨペンハウエルの思想を踏襲したるには非ずと雖、また之を傳次啓發したる者にして、その相關する所決して淺少に非ず。故に吾人は記述の順序として、簡短にシ氏の所説の概略を述べ、而して後に歐洲の二大思想家の倫理思想を觀察せん。

シ氏が哲學の如何なる者なるかを見んとせばその大著、『意志及び觀念としての世界』(Die Welt als Wille und Vorstellung)に若くはなし。本書はシ氏がドレムデンにありし時起稿したる者にして、千八百十九年を以て始めて世に公にせられたる者なり。固より大著にして、その梗概を述ぶるすら容易の事にあらずれば、茲には唯その倫理説に關する點即ち所謂『盲目意志』の原理を一言すべし。

シ氏は固よりカントの流を汲む者なり。カントは、事物の現象は之を知るとを得れども、その實體即ち彼の所謂『事物の本體』(Ding an sich)は、唯之を考察すべくして、之を知る可らずと説きたり。抑もこの事物の本體なる者は、果して如何なるものぞ、カント以後、フキヒテ、セーリンク、ヘーゲルの徒専心研究して、之を發見せんとしたり。シ氏も亦哲學者として自家獨得の一議論を立て、之が解明を試みたり。氏の哲學は即ちこれなり。然らば、氏は、その本體に如何なる名を附せしぞ、曰く、意志、Wille、是なり。

シ氏に従へば、宇宙の本體は『意志』にして、この意志は、種々の事物にあらはるゝなり、即ち下は無機物より上は意識を有する人間にまで及ぶなり、然れども意志は決して復數の存在物にあらずして、唯一のものなり。唯現象界に於ては、その發顯種々なるのみ。その本體はたゞ一なり。而してその意志たるや、敢て意識考慮の力あるにあらず、何の目的をも有せず、盲動する者あり、即ち盲目的意志なり。

現象界の事々物々は、相對的のものにして、彼我の別ありと雖、その本體たる意志はこの別なきものなれば、現象界の事物は所謂『差別の理法』(Principio individuationis)の界内にありと雖、意志は則ち然らず平等一如たり。

シ氏の所謂『意志』なる者は、大略以上の如し、然らば氏は倫理に對して如何なる觀念を有せしかといふに、氏の倫理説は、固より氏の形而上學の原理より來る者なり。

シ氏が倫理説は、『道德の根本問題』と題する書に於てよく之を見るところを得べし。本書は、一千八百三十八年ノルウエー科學協會の懸賞論文『人間意志の自由』と、その翌年に於てデンマルク學士會院の懸賞論文に應せし『道德の基礎』とを合綴したる者なるが、その所説を略述すれば、左の如し。

人は元來利己的の動物にして、その欲望を満たすを以て目的とする者なり、我に利あれば之に従ひ、我に利なければ去る、のみならず我が利益の爲に往々人の利益を害して顧みず、遂に殘忍の行爲を爲すに至る、シ氏の自言にいふ『天然の個人(即ち人の本性)は、自個の滅亡と、全世界の滅亡との二者いづれを擇らんかとの場合に際せば、寧ろその大海の一滴の如き彼自身を暫時生き長らへんが爲に、全世界の滅亡をも辭せざる者なり。』と。然く人の本性は利己的なるを以て、他を尊敬し、或は之に服従するは、全く利害の自個に關する者あるが爲にして、若し利害の相關係する者なくば、勿論他人を

眼中に置かざるなり、他人は塵芥に等しきのみ。故に利害の相関より来る所の尊敬、服従の如きは、決して道徳を以て目すべからず、是れたゞ偽善より出でたるお世辭に過ぎず、唯だ利己心の上を粧飾せる衣服に過ぎざるなり。

然らば真正の徳義の動機は何ぞやといふに、シ氏は善とは他人の苦痛を考察すること (erkenntniss des fremden Lieden) にして、眞の愛は同情に外ならずとなせり。シ氏いふ「凡ての愛は同情なり」と (All Liebe ist Mitleid)

シ氏は同情を以て道徳の基本となせり。今少しくこの同情なる者は如何にして生ずるか、換言すれば人は如何にして善に到達すべきかにつきて一言すべし。シ氏に依れば、惡にうち勝つには、諸惡の源因たる差別観(即ち所謂 Principio individuationis) を脱却して萬物は皆これ唯一の『意志』の發顯なることを知るにありとなせり。この現象界に於ては、萬般の差別、特殊ありて彼我の別は顯然として存すれども、これ皆假有にして、その本體の於ては、畢竟するに唯一絶體の『意志』たるに過ぎず。人若し如何に利己の念にかられ、個人の欲望に溺惑するも、その意識の根本に於て、特殊は假有に過ぎず、本體に於ては一なりとの感なくんばあらず。而して斯の如く感知すれば、茲に他を害するは自己を害するも同一なるを知り、又他の苦痛を見ては、自個も苦痛を感ぜざるを得ず。これ即ち同情にして同

情は徳義の動機なり。

シヨールペンハウエルは梵文學を追慕したりしが、殊に『優婆尼沙陀』(此云塵性以觀塵性空而得道故「翻譯名義集」)を愛誦して置かず、死後その床下に本書を發見したりといふ。氏が讀みたる『優婆尼沙陀』は、梵文より波斯語に譯せられたるをラテン語に重譯せられたる者にして、題して „Opusculum hat“ といふ。その書は文體至りて晦澁にして往々梵語を交雜したるものなるに、シ氏はドレンスデンに在りて前後四年を費して研究、玩味、讚稱したるは、梵學大家マックス、ミュルレルも大に感嘆したる所なり。氏は斯の如く『優婆尼沙陀』を愛讀したるを以て、その思想また是に感化せらるゝ所ありしや必せり。氏はその『道徳の根本問題』に於て、『優婆尼沙陀』にある有名なる悟道の妙句「彼則爾」(tat tvam asi, 文字通りにいへば是は即ち汝なり)にて彼我同一體の義なり)を引用し、その義を讚稱して置かず、彼が倫理に關する根本義も亦これに外らずといへり。(因に云、シ氏の『道徳の根本問題』は兆民中江篤介氏、佛文より重譯し、『道徳學大原論』(?)と題して世に刊行せらるゝ、外語に通せざる人は同書に就て見る方利益あるべし)

以上は、甚だしき概梗ながらシヨールペンハウエルの所論の大略なり。就中吾人の殊に注意すべきは、氏が道徳の理論を『理』の上に置かずして、『情』の上に置きし一事なりとす。是れ前時代の純理のみの議論

に漸く倦怠の生せしに際して、世人が慰藉を他の方面より求むる要求を満足せしむる者なり。シ氏にありては、結論の然ありしは、正に然る可き理ありて然るものなるべしと雖、是れ一時世人に尊崇せられし所以の故なる可き歟。

吾人がまさに是より述べんとするニーチェ及びトウストイは各自獨特の天才なりと雖、前二家は、其所説シヨペンハウエルに淵源する所の者あり。是れ吾人が特に本篇の首に於てシ氏につきて一言する所ある所以なり。ニ、ト二家の倫理思想に就ては、順次述ぶる所あるべし。

第二

言行相一致せざるとあるは、古來より往々にして之ある學者の弊風なり。シヨペンハウエルは、その倫理論に於ては、同情を以て徳義の根本なりと主唱し、衷心また斯の如き聖賢の士を欽仰崇敬したりと雖、惜い哉、彼はその性怯懦にして苛察、素行また修まらざりし者あり。しかも彼自ら曰く、倫理を説く者、必ずしも之を實行するを要せずと。而して彼や自ら標榜すること頗る高く、所謂俗人を見ると黷鯨鼠の屬も管ならず、且つ人を好憎すると甚だしく、恰も貴公子の如く然りしなり。さればシヨペンハウエルは哲學者としては、その組織したる哲學系統は矛盾百出して、拾收すべからざる者あるにもせよ、兎に角一大天才なりしも、その實行の方面に於ては蓋し缺如したりといふべし。

然るにこの實行の方面に於て多少心を盡したる一奇才あり。それを誰とかなす。トウストイこれなり。トウストイの名は歐、米に於ては久しく喧傳せられ、其著作は、獨、佛、英、を重なるものとして、其他各國の國語に翻譯せられ、大家の批評にまた各種の論議あり。然れども我國に於ては、その名を耳にするも近年の事にして、著作の邦譯せられたる者も、片々たる冊子數部に過ぎず、吾が文界の幼稚思ふ可き也。

レフ、ニコライウイチ、トウストイ伯は、千八百二十八年を以てヤスナヤ、ボラナの村莊に生る。この村はツーラを去ると一里有半にして、モスクワを距るまた遠しとせず。母は二歳の時に世を逝り、父は九歳の時に永眠したり。是を以てトウストイはカザンに在る所の伯母の許に養はれ、茲に大學に入り、後或は軍人となり、地主となり、文學者となり、またヤスナヤ、ボラナに在る際には、好んで交をモスクワ青年の嫖蕩兒に結び、或は盃盤狼籍のうちに低唱し、或は折柳弄花の樂に耽り、後、英、佛、獨、白、以等の諸國を漫遊し、世態人情に通曉する所少なからず。嗚呼彼にして若し無爲無心にして傀儡と擇と所なき貴族ならしめば、彼は即ち一生豪奢淫蕩の日を送りて、その臭骸を地に委せんのみ。然れどもト伯は一の天才なり。遂に之にて満足する者に非ず。

彼は身生活に不自由なき貴族として生れ、上流社會に出入して、その生活の状態を知悉し、またあらゆる

る豪奢を盡して、自己の心を満足せしめんとしたるも、人生肉慾の快樂は遂に彼の精神を満足せしめず身はますます倦厭の奴たりしのみ是に於てか彼は一日飄然として悟る所あり、在來の生活を脱して、質素なる農夫の生活を爲すに至れり。その所謂『改悛録』なる書は、千八百七十九年の著作にして、伯の著作は是の書よりその思潮を一變したり。是より以前の伯の著作は、『戦争と平和』『おひたちの記』『地主の朝』『夫婦の幸福』『コナーク兵』(この二書は邦語譯あり前者は『めをと』と題し不知庵譯、後者は花袋の譯、共に英語より重譯して博文館より出版す。)'アンナ、カレニナ』等あり、これより以後には『我が宗教』『何を爲す可きか』『人生』『闇黒の勢力』『クレゼン、ソナタ』(神學士小西増太郎氏の譯あり、『國民の友』に連載し後ち冊子となして民友社より刊行す。)'基督教々説』等あり殊に『基督教々説』は氏が沈思熟考の餘になりし者にして、氏が倫理に對する意見も多く本書に於て見る事を得るなり。該書は、氏がその死後に於て刊行すべき筈なりしが、さる友人が強ひて氏の生前に於て刊行せしめし者にして恰も兆民先生の『一年有半』に於けるが如し。

トウストイは自ら欺かざるの士なり。その『改悛録』に於て述べて曰く、『予が生活は、唯情慾に耽りしに過ぎず、何の意味もなくたゞ罪惡のみなりし』と。トウストイは自己が今までの生活の不安なるに關らず、下級貧窮の民が天命を信じ天分に安じ、幸福と満足とに充たされ安らかに日を送るを見て

人生の眞意義も亦こゝにあるべしとなせり。一日貧窮なる農夫と會す、そもこの農夫は、無學の一天才にしてシヨペンハウエルの世界觀に等しき結論を心中に藏し、且つ之を實行せる人なりき、トウストイ茲に於てか大に悟る所あり則ち地位、名譽を擲うち、前にも記したる如く自ら鋤犁を手にして清貧の生活をなすに至りしなり、ト伯はシヨペンハウエルの爲さんとして爲す能はざる所を自ら爲さんとし、精進甚だ勉めたり。予嘗て米國刊行の文學雜誌『アリーナ』: "Arena" に於てト伯の肖像を見し事ありしが容貌甚だ秀麗ならず、額は高く、眼骨は直線をなし、眼は小なりと雖、一種の光ありて流石に天才なるを顯はせり、鼻はやゝ平にして卷き上がり、かつ身には粗末なる農夫の服をつけたり。若しその下にレフ、トウストイなる署名なくんば、人皆之れを露國の一農夫なりとなすべし。昨は貴公子として交際場裡に歡を貪りし身も、今や農となりて安靜に日を送らんとす、ト伯奇人にして實は奇人にあらず。是れ皆ト伯に於ては理由あり、意味あることなり、無學の俗人何ぞ奇偉なるトウストイを知る可けんや。

トウストイの倫理に關する意見を大畧して一言せば、人間なるものは動物性と靈性との二性を有する者にして、若し動物性の慾のみを満足せば、人は平和を得ざるのみならず、悲痛に沈溺するに至るべし抑も是れ何が故に然るかといふに、單に自己を個人として存在せしむるが故なり。人間の存するは單に

個人として存するものに非ず、則ち一般の爲めに神の爲めに存するものなり、故に自己を捨て、一般の爲め、神の爲めにする生活は眞の生活にして、平和安心は唯之によりてのみ得らるべしとなせり。今より數年前の事なりき。予ト伯の著作を涉獵したるとありしが英譯にて、"Walk while ye have the light"と題する小説あり、當時予は本書を以てト伯が人生觀の一端を見るに足る者なりとして、邦譯して某雜誌に連載したる事ありき。今やその原書は予が座右になしと雖も、予が自ら譯述したる草稿中より二三節を抜萃して本文に加入するも、強ち蛇足にあらざるべし。

本書は基督教の理想的生活をのべし者にして、時代を主基督降生後一百年、即ち羅馬のツラジャン皇帝の御世に取れる者なり。本書は第十回にある『神に屬する労働は、神彼自身の如くである、即ち限りもないければ終りもないのである。神に屬する労働は、汝のうちにある………神の前には大小はない、人の生活には大小はないが、唯正と不正とある計りだ』とあるは本書の主眼とする所にして、またト伯の意見なり。本書の緒言に人生に關する一場の談話を載す、その中に大にト伯の意見を見るに足る者あり。曰く、

『或時、さる富人のもとに數人の客があつた。或日の事であつたが彼等の話は、端なく「人生」といふとに及んでいろ／＼議論が出た。

彼等は、その席にをる人や、又は居ぬ人々について考へたが、彼等の知己の中の一人すらも、その生活に満足したといふ者を見出さなかつた。彼等の中で、誰も財産について不平をいふやうな人はなかつたが、併し誰一人も、我は基督の信者たる價ある生活をしてをると詐るとが出来なかつた。彼等は皆自分たちは世俗の風にとまつて、自分と自分の家族の事のみを考へて、隣を顧るとなく、况して神の事は考へる暇もなく、その生涯を送つてをるとを自白した。これが彼等の議論の主旨であつた。さうして彼等は皆一樣に自分たちの信仰のない、基督信者らしくない生活をしてをるのを罪なことだと思つて、この事に同意した。

『そんなら何故そんな不幸な方法で生活してをるのですか。』と此の議論の中へはいつてをつた一青年がいつた。『何故自分でいけないと思ひ乍らそれを續けますか。吾々は生活の主人ではありまじか、自分の考へ通りにきめるなり變へるなり、出來るでありませんか。一つ二つを言へば吾々が奢つたり、優柔であつたり、富有であつたりするのは、いけないのはありまじか。併し之より尙いけないのは、自負したり高慢したりして、その爲に同胞の兄弟より孤立するやうなことです。これは回復しがたいです、吾々はえらくなつたり、富有になつたりする爲に、人生の快樂を組み立てる所の凡ての者を奪ひ去られるです。吾々は都會の塵の中に住むです、それだから柔弱になり、氣力もう

せ、健康は破れ、遊樂をするにも關らず、倦厭 (ennui) と覺悶とで死ぬです。それは、人生といふ者は、思ふたやうではありませぬ。扱てそんなら、なせ吾々はそんな生活をしますか、何故無慈悲にも吾々の全生涯をそんな風に害しますか——これは神様の貴い賜物を踏みにじるのでありませんか。私一個は最早以前のやうな生活は致しませんまい。私は私のまた途中である所の學問を放棄しませう。何故ならば、學問などは貴方が今いはる、その苦しい切ない生活を導くの外、何にもなりません。私は私の財産を放棄しませう、そして田舎へ行きます、そこで貧困なる者と共に生活して一生を送ります。私は彼等の中へはいつて働き、彼等の作すやうな手業になれます。さうして私の智識上の耕作は彼等に必要であるから之を分配します。但し學校や書籍の中立するのでなく、彼等を兄弟として共に生活し、共に労働してをつて、その中にするのです。然だ。』

この言は是れ青年の論に假託してトウストイの意見をのべし者たるや明なり。然るに書中のその青年の父及び老人等は、この意見に反對したりしに、一人『中年にして既に結婚したる者』はこの青年の論を賛成したり。曰く、

『……………今日こゝで御話しになつた御議論を聞きまして、私にも同様な事を思ひ起さしました。實の所、私は私が行つてをる所の生活は、良心に何の幸福も平和も與へないといふとは、一點の疑ひもないとです。理論も實際も二つながら之を證據してをります。それでは私は何を待つてをるでせうか。朝から晩まで自分の事や家族の事で苦しんだり疲れたりし、又神の律法から遠ざかつて、罪の淵に日々深くおちいるのです。貴方は家族の爲に役々とお働さなざるが、畢竟これは徒勞です。何故なれば、貴方の労働は家族の爲に眞の利益にはならないです。それですから、私は屢々思ひます、私の生活を一變して、さきにお若いお方が明にいれたやうに、その理想とする所を實行するのが遙かよいではないか、私の妻や子供のことは心にかけないで、唯専ら靈魂の事を慮る方が遙かよいではないかと。聖使徒パウロが、婚姻せし者は、如何にして妻を悦ばせんと、世の事を思ひ煩ふなり、……………嫁入せざる者は、身も靈も潔からんため、主の事を思ひ煩ふといつたのは、大に理由のあるとではありませんか。』

以上所記の如きは是れ皆ト伯の意見なり。氏の意見にして單に斯の如きに止まらしめば何ぞ悪しからんや。以上の如きは、皆これ基督教の理想とする所にして、吾人も固より大抵賛成する所なり。然れども氏の意見たるや單に斯の如きに非ず。氏は理想に偏するの餘り、あらゆる現實の組織を排撃するなり。その所論果して如何なる者なるか。乞ふ吾人順次之を論せん。

天才は常に悒鬱なり、不平なり。俗人凡骨の徒は、その賦性固より薄弱にして、事物を観るに單に皮相に於てし、その希願慾望する所また淺少にして下等なり。即ち身貧賤の者ならば多少の資産を作りて、米鹽の資に窮せざるやうになれば、以て我が願ひ足れりとし、若し家、富豪の身ならば、車馬に駕して肉慾に耽るの外他に望みなく、或は大學を卒業したるを以て畢生の能事となし、學問も大成したるが如く考へ、鼻下に八字髯を貯はへ以て得々たるが如き、甚だしきに至りては中學校の教員たるを以て一世の面目とするが如きあり。是等子子の徒は固より學術鹵莽、品性劣等にして魑魅魍魎たることすら能はざる蜈蚣蚰蜒の屬のみ。然れども俗人凡骨も固より社會の爲めに必要なり。恰も肉類は人の滋養の爲めに必用なりと雖、大根野菜の如き線維多きものを伴食して腸を機械的に摩擦せざる可らざるが如し。俗人凡骨は即ち社會の大根野菜なり。唯たそれその賦性劣等なるが故に、往々野卑の状をなし敢て耻とせざるを陋とするのみ。之に反し天才の士に至りては、天の之に賦するに偉大なる品性を以てするが故に、境彼に利ならざるに非ず、名彼に高からざるに非ず、而も心中常に平かならず、眞理を尋ね平和を求めて常にやまざるなり。唯往々天賦の利器を誤用するとあるを以て、遂に大にその道を誤るのみ。これ眞に嘆すべき也。

トウストイ固よりその賦性凡骨の比にあらず、彼は心中常に平ならず、眞理を得んとするに急なるの士なり。彼は平和の尋求者なり。人道の保護者なり。然りと雖、彼亦利器を誤用し、少しく道を逸するに至れり。是れ天才に往々ある所の通患にして社會人道の爲に惜む可きの極なりとす。蓋し彼にして常軌を逸するとなき、大に救世濟民の道、博愛人道の業に盡力するあらば、その功偉大なる者ある可ければなり。

吾人が前に掲載せし所の氏の論旨は、皆是れ基督教の理想とする所にして、吾人固より之を排する者にあらず。然りと雖も、ト伯の所説は單に斯くの如きに止るにあらず。その論旨大に極端に走れり。氏は現今の如き生活は眞の生活に非ずとなし、之を脱せざれば不可なりと論せり。

トウストイは兵制を攻撃して弭兵を主張せり、財産の私有を非難して之を罪惡とせり、結婚を無用とせり、文藝美術を排撃せり、音楽を非難せり。その他彼は舞踏、遊戯、體操、肉食、繪畫、飲酒喫煙、美服、壯屋甚だしきに至りて實行の具たる自轉車までをも之を排せり。凡そ是等のものは、彼が所謂『沈溺』なるものにして、心神肉體を喜ばすものなるを以て非なりと爲すにあり。凡て是等の者にして脱却するを得ば、淫慾を始めとして、凡ての罪惡より自由なるを得べしと云へり。

トウストイが弭兵主義を寓したる一小説、嘗て小西増太郎氏の譯筆によりて、今は廢刊したる『國民

の友』誌上にあらはれたるにあり、當時予も之を一讀したるが、數年前の事とて詳しく之を記憶せずと雖、その要は兵となりて人を殺すは、基督教の主義に反するを以てたとへ國法に反して刑罰を被るといへども斷じて兵たらずと決心せる（或は決行したる）人物を描けるやに記憶せり。そもく非戦弭兵の事たる、古くはトーマス、ムールの『エトローピヤ』杯にもありて、人間の理想として固より間然すべきものにあらざと雖、現今の如き不完全なる人類社會にありて直に之を決行する能はざるのみならず、若し強て之を決行するに於ては、その名義は如何にも立派なりと雖、その實際に於て結果はたして如何なるべきや、常識ある者誰かその危険なるを思はざる者あらんや。夫れ社會の組織及びその發達、行程にはそれく順序次第あるなり、一足飛びに理想境に至らんとす、それ詩人の夢にあらざんば則ち愚者の妄想に過ぎず。現今の社會に於て直に非戦弭兵の境に出でんとするは、則ち一足飛びに理想境に至らんとするなり、亦至難なる哉。

トウストイは財産の私有を非難して、之を罪惡のうちに數へり、基督教の主義に反せりとせり。『使徒行傳』の記する事實によれば初代の基督教徒は財産を共有したるとありしに相違なしと雖、斯の如きは元始の基督教徒が取りし一方法にして、萬世必ずしかせざる可らずといへる理由は更になきなり。主基督が富者に汝の産を置りて貧者に與へよと云はれしは、必ずしも財産の私有を禁せしにはあらず

然るにト伯はその意見極端に走りて、財産私有を罪惡とし、財産共有の社會を夢想せり。前記小説『Walk while ye have the light』中にもジュリアス及びパンピリアスなる二人の青年の會話をかりて左の一事を記述せり。曰く、

『ジュリアスはパンピリアスに別れてから後は何處に如何して暮らして居たかを問うた。パンピリアスはやはり彼の母と一齊に同じ處に住んでをることを話した。

『私共は一人で暮してをるのではありませぬ。』と彼はつけ加へた私共は澤山の友をもつて、共に楽しんでをります。

『共々とは何いふ意味ですか。』とジュリアスは問うた。

『何人も自分の財産として物を持たぬ事です。』

『何故そんなことをするので、どういふ譯ですか。』

『私共は基督教徒ですから……』とパンピリアスは答へた。

『エ、それは眞實ですか。』とジュリアスは叫んだ。(中畧)

『基督信者は赤子を屠つて食ふといひますが、あなたも矢張そんな殘忍などをなさるのですか。』

『來て御覽なさい。』パンピリアスは答へた。『私共は平等生活するより外何事もいたしません。私

共は唯單純な方法で生活してをるので、何にも悪いとはいたしません。」

「併し實に自分の財産として何物も持たずにどうして暮して行きますか。」

「私共は互に暮すのです。自分は人の爲に働きや、人も亦自分の爲めに盡してくれます。」

「それはさうとしたところで、人があなたの世話になりながら、何にも報いてくれなかつたら如何でせう」と。ジュリアスは拒論した。「私共のうち、そのやうな人はありません。」とバンピリアスは答へた。「そんなことをする人は贅澤をしようなど、思ふ人です。私共の暮し方を見て之に加はる人々は、そんな事はありませぬ。私共の暮しは至極簡短です。奢侈もしなければ、安樂もしないです。」云々

然りと雖斯の如き至りて簡短に共々に暮す生活は、この複雑多端なる世界に再現する中々難き也。また現今に於ては、斯の如き組織は必ずしも善良なるにあらざるなり。彼の陳腐なる思想を有する漢學者なる者を見ずや、彼等は菲茨不剪士階三等の堯舜時代を二十世紀に至りても三十世紀に至りても之を再現せんとせり、ト伯亦愚を之と共にするに非らざる乎。

第四

トウストイは結婚に對しても極端の意見を有せり。前記小説「Walk While ye have the light」中にも

ジュリアスとバンピリアスとの問答に於てその意見の見るべきものあり。蓋しジュリアスとバンピリアスは同年輩の朋友なるが、ジは異教徒にして既に結婚し、バは基督教徒にして未だ結婚せざるものなり。

「私は旅人の助言を實行しまして、今では有妻者でムいます。」(ジュリアスの言)

「して貴方は今幸福でムいますか。」とバンピリアスは問うた。「結婚に於て、貴方はその旅人のいつてゐたやうな幸福を見出しましたか。」(旅人前きに結婚の利益と幸福とを説けるなり。)

「幸福？」ジュリアスは答へた。「幸福といふ言葉をどんな意味に取るのですか。若し幸福といふことを人の志望の完全なる實現とすれば、私は幸福ではありません。私は日々急がしい事務をやつて居ります。そして日々成効に近づいてをる。そして又私は人々に尊敬せられるやうになつてをる。此の二つの事は私によく満足せしめます。尤も私は、日々私よりも富み、且つ人に敬せられる多くの市民に接遇しますが、私は此の人々を飛び超え、もつとえらくなる時があることを疑ひませぬ。私の生活の此の状態は、大に私に満足です。私の結婚の事については、貴方はよく知つておいでなされるから、くどくどしくは言ひますまい。私は一步をすゝめて説きませう。私に喜悅と幸福とを與へた所の結合は遂に私を失望せしめました。始めに得た所の愉快は次第に衰へて、今では結婚したる幸福の代りに、

不幸を以て相對してをる。私の妻は美人である、才智もある、善き性質のものでムいます。一人前の女でムいます。初めの中は。彼女は私に非常な幸福を感せしめました。併し今では、互に不機嫌などが度々起ります——貴方は結婚しませぬから此事はお解りになりますまい——今では私は彼女に冷淡で無頓着なものですから彼女は私の寵愛を要求します。今では役割（role）が異つて、私の無頓着な性質は、彼女にまで及びました。それに愛情といふものは、之を養ふに新らしい愛嬌を要します。私の妻よりも愛嬌のない婦人は、始めに彼女が爲たよりも、もつと多くの媚を献じ、そして後には彼女よりも尙つまらぬものとなります。私はこの事を度々感じました。否、實の所、私はいひます、結婚に於て私は望んで居た所のものを得ませんでした、君、人生に於ては決して靈魂が望んでをる所のものを満足せしめぬといふ哲學者の論は正當です。私はこの眞理を結婚に於て確定しました。併し人生に於て得るとの出來ない靈魂の熱望する幸福は貴方の信する欺騙の教に由て得られるといふとは、何の證據もないことです。』と彼は笑を以て論を結んだ。『なせ欺騙ですか。』とパンピリアスは問うた。『何に由つてあなたは欺騙の證據を見出しましたか。』

『それは斯ういふ譯です。貴方は、人生に於ける萬事を別つことが出來ない所の困苦より人間を救ひ出さうとして、萬事を棄てます。否、人生其物を棄てます。不幻像の苦痛より人を救はうとして、

凡ての幻像を棄てしめる。貴方は棄てます——結婚をさへも。』

『私共はそんなとは致しませぬ。』とパンピリアスは反對した。

『よし、あなたの棄つる所のものは、結婚でないとするれば、それでは愛情を棄つるのです。』

『愛情！』パンピリアスは叫んだ。『何故、私共は愛するの外何事もいたしませぬ。愛情は、我々の爲に全建築物の礎石です。』

『それでは、貴方の仰るとは私に解りません。他の人々のいふ所を聞き、又貴方の例に由つて見るも何故ならば私と貴方とは同年であるが、貴方は未だ結婚しませぬ——私は基督教徒は夫婦の結合を持たぬを斷言することが出來ます、貴方は既に許嫁した結婚上の關係を絶たうとはなされぬ、併し更に新らしい者を取らうとはしませぬ。あなたは人種の永存といふことについて聊も考へませぬ。』

（トウストイの結婚論に對してこの種の疑問は起らざるを得ず、而してト伯の解答は後にあり）若し地球上に基督信者の外に人がなかつたならば、人類は直ちに絶滅するでせう。』と、ジュリアスは叫んだ。これは彼が屢々耳にして居た所の議論の反響である。

『それは正しい御議論とは思はれませぬ。と、パンピリアスは答へた。』尤も我々は敢て人類の繁殖を以て目的とは致しませぬ。猶ほまた其事は貴方がたの論せらるゝやうな大切なことも存じてをり

ませぬ。我々の心は、人類をお守りなさる、天の父は、人類が必要なものは何であるかを皆御存であるといふ確い信仰の上に安じてをります。父の意志に従つて生活するのは私共の目的であります。若し天の父が人類の永存をお望みなさるならば、之を永存せしむる方法をお立てなさるだらうし、若し又之をお望みなさらないならば、人類は絶えます。併て此んな事は私共の氣にすることでありませぬ。……』云々

トウストイはまたその著『クレゼル、ソナタ』に於ても、夫婦の道は、單に情慾の爲に存し、至りて卑穢なる者にして、これより嫉妬、怨嗟、厭嫌、凶刃等の惡徳を生ずる者なりとの意を寓したり。氏はまたある雑誌の上にて結婚に關する自己の意見を述べたる事あり。以爲らく相愛の情たるや、如何に世の文士が詩文に於て之を美化せんと欲すと雖、是れ決して人として價ある目的に適合する者に非ず、否この目的を害する所爲たりと。また以爲らく、ハリステアニンの理想たるや、神を愛し、隣を愛するにあり、然るに結婚即ち男女肉慾の愛は、専ら自己に利せんとするなり。これ故に結婚なる者は、基督教の見解より見れば、罪惡なり、墮落なりと。夫れ斯の如きは、最も極端の意見たるに相違なし。固より世には異教徒のうちにも、基督教徒のうちにも、結婚の眞の意味を解せず、單に肉慾の奴隷として結婚する者少しとせず、殊に多少の文字的教育（文字的教育とは眞の教育に非ず、單に文字を知

れるの意なり）ある女子が平生高慢にも、童貞、徳義、節操などしかつめらしく唱へながら、少日月の空闊に堪へかね、肉慾の爲めに結婚を急ぎ、或は内に顧みて疚しき行爲を敢てするが如き者あるは、實に醜陋下等の極點にしてかくの如き結婚は、禽獸の交尾と擇ぶ所なきものなれば、固より予は斯の如き結婚を排するに吝ならず、然れども例へ世に斯の如き結婚多く之ありと雖、以て結婚その者を排斥すべきに非るなり。結婚も正當に之を行へば、以て人生の花たり、榮たるべし。即ち有爲方正の君子と温良、貞潔、美にして且つ清きと野花の露に露はへるが如き佳人と清き交りを神前に誓ふが如きは、豈にこれ人類のほまれに非ずや、人生の花たるに非ずや。況んや眞の結婚は男女の心を和合一致せしめ、人情の美をして層一層佳麗ならしめ、『如何に人類を愛す可き乎』を『結婚の愛』によりて人に教ふる者なり。結婚は私利の爲にする者にあらず、人の教育、及び訓練の爲に必要な者なり。人の性は結婚によりてますます完全に發達し、人類を愛するに適する者たらしむるにあり。人は靈妙高逸にして混濁不靈の物質の上に超然卓立する靈性を有すると雖、人は天使の如く單に靈のみの者に非ず、靈は肉のうちに宿る者なり、肉によりて外より作用を受け、また肉によりて内より作用を外界に發顯する者なり。これ故に人をして單に靈物視したる意見は、一見甚だ高尚なるが如くにして、實は無用の空想にして人生と相渉る所なき者なり。結婚單に肉の満足を求むる爲に行ふに非ず、肉體を通じて

靈を教育する者なり。これ神がアダムを作りまた之に配するにエツを以てしたる所以なり。醜態の肉情を陋として直に結婚を排するは、吾人の賛成する能はざる所なり。

舊約聖書中にある『雅歌』なる一書は、夫婦の愛に例へて、神が如何に人類を愛するかを表出したる者なり。この書たるや、金玉の名句に富み、世界の大文學の一たり。一度これを播けば、習々たる東風の吹き來りて、我が冷靜なる胸も亦愛の和きに化せられ、胸中の琴線轉た美音を發して止まず。ア、何たる靈妙の文字ぞや。曰く、

『わか愛する者は我にとりては、わが胸のあひだにおきたる没藥の袋の如し。』

わが愛する者は、われにとりてはエンゲデの園にあるコペルの英華の如し。』

吾人も亦結婚によりて『如何に人類を愛す可き乎』を學ばざる可らずト伯の極端論は其理なき者なり。

第五

前にも記せる如く、トウストイは文藝美術をも排斥せり。同一思想の潮流は、ルッソーに於て之れを見ることを得べし。ルッソーは "Discours sur les Sciences et les Arts" と題する論文に於て文藝美術は人心を墮落せしむる者なることを極力論究せり。トウストイの文藝美術を攻撃するは必ずしもルッソーの如く然るにあらず、彼の論の主點とする所は文藝美術も『耽溺』の一にして人心を喜ばしむる者なるを

以て非なりとするにあり。然れども斯の如く消極的の議論は今日の文明世界に於て唱道すべき者に非るのみならず、その實行も亦期す可らず。それ現今の歐洲に於ける文藝美術の多少の弊害を人心に及ぼす者あるは、吾人も亦信する所なりと雖、單にその弊害を見て直にその全體を撤回せんとする性急にして極端なる意見に誰か賛するものあらんや。抑も前記ルッソーの論文は、ある學會の懸賞論文にして、その賞にあたらんが爲め、彼は殊更に奇矯の筆致を弄したる者のみ、今日公正なる眼光を以てこの論を見は、何人もその偏癖なる奇論たるに驚かんのみ。トウストイの藝術論も亦この種の愚論たりその他彼が音樂、舞蹈、遊戲、體操、肉食、美服、壯屋等を排斥するは、彼がシヨベンハウエル、ルッソー、佛教等より得たる平等主義、自然主義、厭世隱退主義等をトウストイの胸中に加合し以て一九として世に出したるものなり。そのうちに多少の眞理なきにしも非ずと雖、甚だしき偏癖の議論にして、人類が多年の困苦を以て造生作出したる文明の利器の一朝にして破壊し去らんとする大膽無鐵砲の議論なり。

彼はその所説の基督教に基くことを確信し、是を以て眞の基督教なりとなせりと雖、彼の如き説は眞の基督教に非ざるなり。茲に最も明白なる事實の之を證明する者あり。乞ふ少しく之を述べんか。

それ主基督はわれ等基督教徒の模範とする所なり。トウストイは國家を排斥し、兵制を非難せり。然

るに主基督は如何にし玉ひしぞケザリの物はケザリに與へよと言はれしに非ずや。またカベルナウムの百夫の長に兵役を辭退するをすゝめ玉はざりしに非ずや。トウストイは結婚を排斥して墮落なり、罪惡なりといへり。然れども主基督はカナの婚宴に自ら臨みて之を祝し玉ひしに非ずや。トウストイは美服を攻撃すと雖ども、主基督はトウストイ伯の如く農夫の服を身に着け玉ひしにはあらざりき。また主はベタニヤの婦人が膏を首にそゞくを禁じ玉はざりしは如何。トウストイは絶對的に惡に拒する勿れといふと雖も、主基督は聖殿に、兩替する者を追放し玉ひしは如何。あゝトウストイは、自ら眞の基督教を説く者なりと言ふと雖も、實は主基督の心を解する者にあらざる也。

歐洲の學者、批評家にしてトウストイを生理的狂人なりとなす者あり、一二をいはい、マクス、ノルダウの如き、ロムプロゾーの如き即ち是なり。またヘルリンに於ける醫學社會にてこの種の議論を爲す者その數尠からず。然れども斯の如きは、恐らくは酷評に失する者なるべし。吾人はその所説の如何を批評すれば足れり。その人物の狂不狂は深く詮議するを要せず。若し彼にして眞に生理的狂人なりしならんには、吾人はたゞ彼の爲に之を悲むのみ。

トウストイは其倫理處世の議論に於て極端に走り、空想に馳するのみならず、人類救贖の定理に於ても我が正教會と相反したる意見を有せり。然れども今トウストイの宗教論とわが正教會の定理とにつ

きて論究するが如きは、吾に本文の範圍外なるのみならず、また無用の事たり。何となればトウストイの如き不信仰は、古代にも往々之ある議論にして、敢て之を事奇らしく論説するに及ばざれば也。然れども曩に露國の正教會が彼を破門せし時我國の論者にして之を非難せし者少なからず、之に附き聊か辨せざる可らず。然れども吾人にとりてはその非難は要領を得ざる者なりき。要するにその多くは、トウストイの果して如何を論者なる乎。また露國正教會の眞の意志は如何なる乎を知らず、兎に角有名なるトウストイの事なれば、之に同情を表するも世間の物笑ひとはならざる可しぐらひの見解にて喇叭的雷同をなしたる者多きが如し。抑も露國の正教會が彼を破門せしは、決して彼を窘迫するの意に出でしに非ず、實は一日も早く正道にたち歸り、教會の子たり、天國の嗣たらんとを切望するに出づる者にして彼が多年論文に小説にその所説を公にし、僧侶を罵り、教會を排し、基督の神人を斥け、マリヤの童貞を否認し、教會の機密を冷罵し教會に對して、全然敵意を表し、斷然教會を去りしにも係らず、尙ほ教會は籍すに彼に改悔の時を以てしたり。然れども彼は遂に之れを改めざるのみならず、ますます極端の意見を公にし、世の無學の徒を迷はすこと少なからず。是に於てか教會は、一は更に彼の注意を惹かんが爲め、一は教會の信者のこの茶毒に犯かされざらんが爲に、彼の教會員に非ることを公にしたり、抑も事實に於て彼は多年教會に屬せざる者なりき。教會が公にせる破門狀な

の身死すと共に、その名また久しからざる可し、されば彼の崇拜者は、今のうちによく崇拜せざる可らざるなり。要するに彼は偉人にして社會の大根野菜たる(前文参照)俗人凡骨にあらずと雖、亦決して常食とすべき肉類にあらず、之を例へは酒なり、煙草なり即ち興奮劑なり。一時の嗜好品なり。之に溺るゝ者亦危いかな。

第六

思想は常に一定の場所に停滯して不動なるものにあらざる事は本篇の首章に既に之を言へり。現今の歐洲思想界がニトチエを出したるは、思想運動の原則に適合する者にして、ニトチエはこの意味に於ては、時勢の子なり、反動の所作なり。ニトチエの出づる亦止むを得ざるのみ。

之を哲學史に徴するに、一流の哲學を完成するの曉に至れば、こゝに懷疑論を生じ、在來の哲學に於ける缺點、不合理を剔抉露出し、學者をして更に新方面に向はしめ、以前よりも更に精緻なる系統を作るに至らしむ。ソクラテスをして新なる問題を研究し、哲學史上一新學期を開かしめたるは、ソプラトの懷疑ありたるを以てなり。またカントをして一の新時代を作らしめたるは、ヒュームの懷疑ありしを以てなり。斯の如く懷疑は哲學に新方向を與ふる者也。

それ獨逸の哲學は、世界の粹を萃つめたる者にして、今やハルトマンに至りて殆ど完成せり。是れ即ち更に一新時期な促がす兆候にして、此の際にニトチエの懷疑説の出づるは、命數の然らしむるのみ豈に敢て怪むに足らんや。思想は彼よりしてまた一新す可きなり。

ニトチエは形而上學に關して、萬物の輪廻轉化説を取れり。以爲らく、萬物は無始無終より輪廻轉化して窮りなきものなり。人の如きは、たゞこの轉化中の一たるのみ。然るに在來の哲學者が自己の認識を確固なる者の如く思考し、或は絶對を立て、本體を論じ、不變を説くと雖、何ぞ知らん、是等は皆人といふ萬物轉化中の一物の所産たるに過ぎず、人類の意識明確になりてより僅々四千有餘年に過ぎず、四千年の年月は、吾人の一生より見れば長時間なるが如きも、宇宙の長大より見れば管に大海の一粟のみの比にあらざる也。斯る人類の薄弱なる意識に基ける見解により、或は現象以外に本體を立て、或は變化以外に不變を求むるが如きは、笑ふ可き痴態に過ぎずと。その言、實に雄大なり、然れども是れ懷疑論にあらずして何ぞや。

斯の如き懷疑論は、更に哲學界の一新時期を促すものたるや明なり。吾人はニトチエの哲學上の見解につきて、尙多くを言ふ可きも、こゝは本篇の主旨にあらざるを以て、更にその道德上の意見を見るに切なり。

ニトチエが德義に關する見解も、亦世論の反動に外ならず。人は國家々々と叫び、窮屈なる服従を強ひ

形式主義の熾にして、死道德論の横行する時、忽然として一陣の黒風の、砂石を卷いて來襲せる者は、即ちニーチェの思想なりとす。

我日本に於ては高山博士一度『太陽』に『美的生活論』を公にしてより、反響四方に起り、甲論乙駁また盛なりといふ可し。恐らくは是れ在來の平板なる思想界に人々倦怠の念を生せし際なるを以て、斯く風は早く全面に吹き渡りたるなべし。併し乍ら是れ寧ろ慶す可きなり、何となれば不活潑なりし文壇も是れよりや、活氣を生し、論戰は遂に文壇の進歩を來す可ければなり。

フリードリッヒ、ニーチェは、西曆一千八百四十四年ザクセンのロックケン村に呱呱の聲をあげしが、その父母は共に教會牧者の家に出でし者なり。彼自らの言ふ所によれば、其の祖はポーランド人にしてプロテスタントの信仰の爲に國を追放せられし者なりといふ。父は五歳の時に世を逝り、後ち十四歳に至るまで専ら婦人の手に教育せられたり。ポンの大學にて言語學を修め、後ち轉じてライプツヒヒに至り、第三學期に於て言語學に關する懸賞論文に於て名を得たり、以てその天成の才想を見るべし。年二十四歳にして未だ學位を得ず、且つ論文をも提出せざりしに、パーゼルの教授に任せられしが如きは、あまり例のなき事なりとす。

ニーチェは、その思想種々の徑路を経て以て今日に至りたるものなり、彼は天資溫和にして同情心の厚

つかりし人にして、深くシヨーベンハウエルの思想に感化せらるゝ所あり。佛獨戰爭の起るや、自ら進みて野戰病院の一員となり、親しく病兵の介抱看護に任せしが、之が爲にいたく生來の健康を損じたり。抑もこの一事や、彼の思想に一大影響を與へたる者なり。即ち彼は同情なる者は、外觀美なるが如しと雖、自身に至りて危険なる者なることを悟り、思想を一變せり。是に於てかニーチェは最早以前のニーチェに非ずなりぬ。世人乞ふ唯その人の結論のみを觀る勿れ、その思想の徑行に注意せよ。ニーチェの倫理思想を觀るには、その著『超善惡論』『道德系』等に若くはなし。彼は道德を解するに生理の方面よりし、道德なる者は畢竟するに獨立する者にあらず、生理の作用によりて左右せらるゝ者なりとし、道德を以て生理的現象に歸したり。故に曰く、

『各物の善とは本能なり、これ故に平靜なり、自然なり、自由なり。』
と、又曰く、

『高尚にして幸福なる人は、或る行爲を成し、またある行爲を避くると必然たるべし。即ち彼は生理的に受けたる性質を人物及び事物に及ぼすなり。彼の徳義は、その身體に於ける健全の結果なり。』
と、言簡なりと雖、以て彼が生理的徳義の如何なる者なるかを見るに足るべし。

ニーチェは道德の發達を三時代に區分したり。即ち、

- (1) 先道德時代 Pre-moral period
 (2) 道德時代 Moral period
 (3) 超道德時代 Supra-moral period

の三時期是なり。ニーチェの意によれば、第一期先道德時代とは、人間行爲の善惡を、その結果の善惡（即ち利害）によりて判定する時代にして、至りて單純なる者なり。第二期の道德時代とは、之よりも一段進みたる時代にして、人間の行爲の善惡を人の意志の如何によりて是非曲直の判断を下す時なり即ち當代是れなり。

然るに吾人は斯る境遇に長く満足する者にあらず。これより進みて將に第三期に入らんとする者なり。第三期の超道德時代とは、人間行爲の善惡を人の健全、不健全の徴候と認定するにあり、ニーチェは斯の如く道德の發達に三時期あるを説きしが、その現代を攻撃するや、また言を極めたりといふべし。

第七

ニーチェ現代を攻撃す、その要に曰く、凡そ惡なる者は、個人をして宗教道德の桎梏を負はしむるより生ずる者なり。現今の宗教といひ、道德といふ者は、個人の自由を壓する者にして、却りて眞の發達を害す。よろしく人をしてこの壓制を脱せしめ、健全自由なる發達を爲さしむるを人生の主旨とす。

かの同情といふが如きは、奴隸の道德のみ、健全にして有爲の人民のこる可きは、健全にして美を愛する、威力、勇氣、自尊の道にして、是れ眞に君主道德なりと。

抑もニーチェが現今の道德のみだりに人の自由を壓し、人性固有の力を完全に發達せしむるに能はざるを痛撃し言を極めて先哲の輩に嘲笑冷罵を加ふる者は、彼は前途に一の理想を有し、此理想に達せんとするには、勢ひ個人の自由發達を要し、而して在來の宗教道德は、この自由發達を害する者となすを以てなり然らば彼の所謂理想とは何ぞやといふに超人（Übermensch ≡ Beyond-man）の説これなり。超人とは何ぞや。ニーチェはその形而上の思想に於ては、萬物輪回の説を取り、人生の賤陋不安なる状態が永遠に再來また再來して限りなからんには、如何に人生の望なきかを嘆じたりしが、後萬物進化の説を研究するに及びて、こゝに一道の光明に接するを得たり。後以爲らく、人は目的物にあらずして橋梁なりと。即ち永く人たるにあらずして、更に高尚優美なる種族に至る可きなりと。この種族即ち超人なりニーチェこの理想的超人を散文詩「ザラトシュトラ」『Zarathustra』中に描きて曰く、

『吾は諸子に超人を語らん、人類は超越さる可き者なり。人を超越する爲に子は何を爲したる乎。

萬物は今日に至るまで常に彼等自身を超越して他物を造りつゝあり、獨り人にして、之に反し、人を超越するなく、寧ろ動物に退歩せんか。人にして猿たらんか。是れ笑ふべきに非ずして、耻づ可き也。』

ニーチェ以爲らく、超人なる者は、強壯、健全、勇敢にして、自主自尊の念強く、他の弱者を排して、堂々として自ら進み艱難辛苦も甘じて之を受け、如何なる戦争にも勇進して敢て辭せざる者なりと。彼は斯の如き説を有して、その思想ますます極端に走り、遂に威力の一方に偏するに至りたり、彼が近時の著『非基督教徒』中に曰く、

『善とは何ぞや。凡て権力の感情、権力の意志を人に増加せしむる者はなり、権力自身はなり。』

『悪とは何ぞや。孱弱より出づる者はなり。』

『幸福とは何ぞや。権力の増加したる感、抵抗に打ち勝ちたるの感はなり。』

『満足するなかれ。尙多くの権力を要す。如何にしても平和を得んとするなかれ、唯だ争闘あるのみ。徳たらずして力たれ。』

『孱弱にして非境に處する者は亡ぶ可し、是れ我等の慈善の第一義なり。而して人々は我等を然かせしむるやう助くべし。』

『何の罪よりも尙害多き者は何ぞや。悲境にある者の爲に同情を身に行ふとは是なり、即ち基督教は害最も多き者なり。』

超人はニーチェが個人主義の理想にして、**権力意志説**はその花なり。而して個人主義も茲に至りて極まれりといふ可し。日本に於ける某々の學士がニーチェズムを以て無道德を鼓吹する者なりと痛憤するもまた故なしとせず。然れども吾人思ふに、ニーチェを以て直に無道德を鼓吹する者なりといふは當らざるの言なり。ニーチェにはニーチェの道德あるなり、唯その道德たるや在來吾人が道德とする所と相反するのみ。故に吾人は、彼の所謂道德なる者を信せず、否之に反對にし之を非とする者也。彼は無道德を鼓吹する不徳漢にはあらざるなり。その議論の結果のみを見て、その議論の徑行に注意せざるは、職者の取らざる所なり。吾人は固よりニーチェの主義を排する者なりと雖、この點に於ては、彼の爲に一言の辭なかるを得ざるなり。

第八

吾人つらくトウストイとニーチェとの所説を考ふるに、二氏は其意見の内容に於て正反對なるにも、關らず共に現今の社會の狀態に嫌きたらずして、一方の理想に直進し、遂に極端の海角より深淵に墜落せるは、全くその軌を一にせり。即ちトウストイは極端の平等主義を唱へ、ニーチェは極端の個人主義を説けり。前者は人の靈性のみを見て肉體の事を顧みず、後者は人の肉性にのみ注意して、その靈性の如何なる者なるかを忘れたり。二者全く正反對にして、その人生をあやまるとは一なり。語に曰く、『兩端一に歸す』と。

抑も人の所説は、その性格に關する所多し。トウストイや年少客氣の時は、白馬金鞍の貴公子にして酒色の慾に耽りしが、老來元氣の衰ふるや、専ら菜食克己の論を唱道せり。之に反してニーチエは濃厚にして同情に富める人なりしが、一度その『同情の道德』より病を得て、孱弱の身となるや、専ら權力意志の説となれり。以て此二先生の議論が、其身、其境の感化を蒙れるとの大なるを見るに足るべし。二氏の所説は、社會の或る状態の反動として生起したるは明確疑ふ可らざる事なり。吾人は二氏の説を以て、一の奇警なる議論として多くの注意を拂ふに吝ならず、またその所説よりある種の教訓を得ることを疑はず。然れどもこの二學説は、眞に社會の闇黒境を救助する者にあらざるなり。今日より實行して差しつかひなき健全なる思想にあらざる也。紙上の論としては、或は面白きふしなきにしもあらずと雖、實益は莫き者なり。畢竟するに學者の空想なり。詩人の夢なり。而して吾人の人生は、夢よりも更に尊からざるべからず。

吾人は章を重ねて、二先生の倫理思想の一斑を述べ來りしが、是れ眞に九牛の一毛にして、よく讀者を満足せしむると能はざりしは、予が大に遺憾とする所なり。殊に予深くニーチエを識らず、他日更に研究して稿を新にし、世に公にするべく、こゝに一先づ擲筆す。

二

『無神無靈魂』を讀みて

兆民中江篤介先生は、一代の奇士なり。予は年少の時、その著『三醉人經綸問答』を讀み、先生の理想の高遠なるに感じ、敬重の念禁する能はざりき。以後予は先生の著譯に係る美學、哲學、倫理の書、大抵一讀したり。然れども予は是等の著譯に於ける先生にはあまり感心せざりしなり。何となれば先生の文巧妙にして雄偉ならざるに非ずと雖、或は、Philosophie を殊更に理學と稱し、或は、Metaphysique を庶物原理の學と譯するが如き、凡て譯字を普通のものとは異にするは勿論、筆路筋に過ぎ、達意を主とする學術の論文には適せざるを以てなり。然れども自由、平民、平等を主義とする政論家としての氏が、哲學、美學、倫理の諸學にその思想を馳せ、筆を多方面に執るは、徹して單調なる我が國中人には、奇らしき人なりといはざる可らず。少しく學問の性質を異にすと雖、氏はこの點に於て醫學博士森鷗外氏に仿たりといふ可し。而して鷗外が『審美綱領』『審美新説』等の書を作りて鷗外一流の難譯字を流布せんとする所も相似たるは、更に奇なりと云ふ可く、その譯字に於て兆民は漢學の風

を帯び、鵲外は梵の臭味を有せり。これ更に又一奇なり。そはとにかく、予は哲學、美學、倫理學のうちに予が敬重する兆民先生を見ずして、一部の經綸問答に於て偉大なる兆民先生の風采を想望したりき。經綸問答の書たるや、敢て組織的のものに非すと雖、その文雄偉にして輕妙、その想高遠にして至純、當時年少にして客氣未だ失せざる予をして恍然惚然として夢境に徊ふが如き想あらしめたり。予は疑もなく兆民先生より多くの感化を受けたる者の一人なり。之を以て見るも、書を著す者の責任は重大なることを知るべし。即ち善き書は善感化を多數に與へ、惡き書も亦その感化大なるべければなり。

予は近者、日本に於ける近刊の雜書を多く讀ます、これその多くは思潮低く、趣味陋劣にして曾に求智の慾を満足せしめざるのみならず、又感情を美にすると少なければなり。然れども兆民先生の生前遺稿たる『一年有半』の廣告、新聞紙上にあらはるゝや、予は之を看過すると能はざりき。蓋し先生これより前き文壇を退き、奇利を博せんと欲して南船北馬し、有爲の才筆も空しく牙籌の間に埋れしを以て、世は久しく先生の文に接すると能はざりしなり。然るに今や則ち病んで客寓にあり、自ら起たざるを知り、書を著はして志を述べ、類を歐洲に取れば、殆もハイチの晩年の如し、その心事また哀しからずや。乃ち予は直に一讀したりしに、片々たる隨筆に過ぎずと雖、また一代の奇士、稀世の才

人の風采を見るにあまりあり。即ち之を珍として諸友にすゝめて閱讀せしめき。後數句を経て先生更に一の書を著はし『續一年有半』といふ。

『無神無靈魂』とは又の名なり。即ちその論旨は、有神の説を排して宗教家の迷説となし、靈魂の存在を斥けて、人は物質の集合體にして精神は物質抱合の結果なりといふ陳腐なる唯物論たるのみ。予が本書を讀みしは數日前にして今茲に該書を有せざれば書中より語句を引用する能はず、然れども未だ本書を讀まざる讀者の爲めに本書は如何なる内容を有する者なるかを他の書によりて示すことを得るなり。

十八世紀の佛國は唯物論の最も盛なりし時代にして、有名なる "Système de la Nature" 或は "Encyclopédie ou Dictionnaire Universel" の刊行せられしもの時なり。予は嘗て前書の主旨を正教新報概に記していふ、

『人は唯た物質たるのみ、思想及び意志は頭腦の所産なり。神の信仰、靈魂存在を許容するは、物質と精神との二個の假相を誤認して二者異なれりとなすに過ぎず。人の自由は、死の止む可らざるが如くしかく小なる者なり。自愛及び利益は、行爲の唯一原理にして、人間社會は相互の利益を基礎として形成せらるゝ者なり。』云々

兆民先生の『無神無靈魂』は即ちこれと同一なる論旨を述べしものなり、唯徳義論のみは缺如せり。然れども前述の如き論旨を以てすれば、その徳義論も亦知る可きのみ。中江氏はその著書中よりナカエニズムの組織的に出で来らんとを希望せりと雖、實はナカエニズムは第十八世紀の遺物たるに過ぎずして、この種の議論は宇宙を見るにあまり皮相に過ぎたる者なり。

兆民先生はルッソーに私淑する者なりと聞けり。されば氏か今日かくの如き淺薄なる哲學上の意見を公にしたるも亦故あるなり。思ふに兆民居士の思想は全然十八世紀のものに屬す。抑も十八世紀の佛國に於ては、唯物主義の哲學者としては、ヘルヴェチウス (Helvetius) コンチラック (Condillac) 等諸々として論壇にあり、ダレンバルト、テイテローの輩はこの主義を社會、政事上の事に應用し、ソール、ルッソーの徒は或は政事に文學に於てこの主義を潤飾して主唱したる者なり。即ち前者は根本にして後者は末葉なり、兆民先生は末葉のルッソーに私淑す、又何ぞ根本のヘルヴェチウス一流の哲學者を崇拜するを妨げんや。世若し兆民居士の唯物論を聞いて驚くものあらば、是れ驚く者の不明のみ。

『無神無靈魂』は哲學上の議論なりと雖、敢て組織的のものに非ず、是れ固より類死の病者として止むを得ざるならん、予は實にその不幸を悲む也。然れども予をしていはしめば、此書は哲學の何たるを

知らざる愚人、或は淺學陋見の俗人を外にしては、他に多くの崇拜者を見出さざる可し、固より哲學専門の人は之を参考書のうちに加へざる可し、またその價值あらざる可し、奇士兆民が類死の際に筆を呵して草したるこの且世に告別の文なるを以て、世は之に多くの價值を附し、人の注意を引くと雖、兆民の名をこの書より除かば、嗚呼その書の眞價果して幾何ぞや。

兆民先生博學多聞にして能筆達文なり、然りと雖、氏は未だ神學の初歩だにも學ばざりしにや、書中往々奇妙の説を見る。たとへば基督教徒が人は神の像によりて造られたりといふを以て、然らば神も人の如く形なかる可らずといふが如き是なり。神も人の如く形あり情慾ありとするは、希臘の神話などにはめづらしからずと雖、基督教に於て、斯の如く説くは只近時渡來したるモルモン宗 (若し基督教といふを得可くんば) あるのみ。先生の高論はモルモン宗に對しての説法にもあらざる可き歟。歐州の哲學、倫理學等を研究するものは、并せて基督教神學をも研究せざる可からざるものなり。然るに我國の學者これを等閑に附する者多きは惜む可きなり。

専門家は固より、多少學識ある者は、兆民居士の『無神無靈魂』に對して心を動かさず、また之を尊重する者なかる可しと雖、予は多くの無學淺識の徒、或は思想の未だ定まらざる青年の輩のこの淺薄なる唯物論に動かさるゝなきかを恐るゝ者なり、若し夫れこの思想にして青年の間に傳播し、彼等の精神

を支配せば、その結果果して如何なる可きか。書籍の感化力は至りて廣大なる者なり。現にこの文を草する者は、嘗て兆民居士の『三醉人經綸問答』なる冊子に感化せられたる一人なるを知らば、善書善感化、悪書悪感化の力豈大ならざらんや。先輩にして書を著はすに際して、少しく後進の者を顧るとは、全く必要なにあらざるなり。滿腔の大不平を嘲世罵俗の文にもものするのみが才人の業にあらざるべし。記して聊か先達諸君に呈する者なり。

今月五日發行の萬朝報に内村鑑三氏は、『無神無靈魂』と題して兆民居士の文を選したる一篇を載せたり、そのうちにいふ、

『神無し。靈魂無し。然り靈魂は胃の腑なり。神は伊藤侯なり。古河市兵衛氏なり。行て跪て彼等を拜せよ。インスピレーションは是をブランドーに得よ。不死とは多くの妻を著へて多くの子孫を遺す事なり。何故に來世を望むぞ。是れプラトロー、ダンテ、ミルトンの在る所。今日の日本人の行くべき又は行き得べき所に非ず。天國は泰宿昂宿の輝く天の彼方にあるにあらず。天國は新橋に在り柳橋にあり。天使とは翼を以て面を掩ふケルビム、セルムの類にあらず。天使とは淫賣婦なり。飲めよ。食へよ。欺けよ。而して亡びよ。そは世に汝等に生命を供する神あるなく。汝等を迎ふる天國なければなり』。

蓋し無神無靈魂の結果は實に斯の如きのみ、その他を望む可らざるなり。中江氏は前の『一年有半』に於て日本人は考(即ち思想)すくなし、國家を盛大にするには哲學に由らざる可らずとの主旨を述べられたりと覺ゆ吾人も亦この主旨に賛する者なり。然りと雖、今氏の述ぶるが如き唯物哲學ならば、事ろ之なきにしかざるなり。佛國に於ける十八世紀の無神哲學は果して何を産出したるぞや。闇黒なる革命、名のみ美なる自由平等を出したるに過ぎざるに非ずや。歴史は教訓なり、上帝の聲なり、世人少しく顧る所なかる可らず。

佛人アウグスト、ニコラスの『無神國家論』なる著書中に言へるあり、是れ吾人の戒めとなすに足る言なるを以て茲に抄出す、曰く、『實に甚深莊高なる一大事ありて宇宙の歴史を貫通す、その廣大なる世界を抱有するが如き觀あり、何ぞや、曰く人の性はその社會に於てもまた國家に於ても宗教なくしては一日も存在する能はずといふと是なり。……國民の一盛一衰は、神を敬すると然らざるとにありて生ずる者なりと云ふ可し。古昔唯物論を主唱したるエドキュラスの門徒なるホーレスも亦歌ひて左の如く云ひしに非ずや。曰く、

„ Di multa neglecti dederunt

Hesperiae mala Iuvenose. “

神を敬せざるにより、
災禍にヘスベリアは悩むなり。」と

往年米國に於てインガルゾルなる者淺薄なる書を著はして基督教を攻撃したりしに、多數の讀者を有し、我が國にも其書を譯述したる者ありき。兆民居士の著は、その淺薄の度に於てインガルゾルの上にあり。然れどもなほ多數の讀者を有す可き歟。

以上は予が兆民先生の『無神無靈魂』を讀みて感得したる所にして頃日客あり、談偶ま該書に及びしかば、之れを客に語りしなり、客去りて後、自ら筆を執りて其の旨を記す。敢て批評したるに非ず、單に所感に過ぎず。故にその論精しからざるなり。

聞くならず、博學にして聰明なる高橋五郎氏は、近日『無神無靈魂』につきて一篇の文を草し世に公にすべしと。氏は嘗て博士井上某に誨へたるとありき、今また中江氏に告げんとす。かくの如きはこれ學者の本分なり、吾人は一日も早くその著の世に出でんとを鶴首して待つ者なり。

三

マルテンセン師の愛動物論

動物はその價値に於ても、又その權利に於ても吾人々類と同等なる者にあらずと雖、之を虐待酷使するは人道に反す。讀者も既に知れる如く、日本在來の宗教なる佛教に於ては、固く殺生を戒めたり。勿論現今の佛教信者は必ずしもこの戒を守らず、また今日の事情は之を守る能はずと雖、その僧侶たる者が管に殺生戒を犯すのみならず妻妾を畜へて邪淫戒を犯し、其他あらゆる戒律を犯して平然たるは驚かざるを得ざる次第なり。然れども釋迦牟尼の戒律をさづくるや、至りて嚴格なる者ありき。今殺生の事に關して一二の例を示さば、『梵網菩薩戒經』に、

『若佛子、不得畜一切刀杖、弓箭鉞斧、鬪戰之具、及惡網羅罟殺生之器、一切不得畜、』
といへり。また、

『……乃至餓虎狼師子、一切餓鬼、悉應捨身肉手足、而供養之、』云々

といへるは、必ずしも文字的の意義にはあらざる可しと雖、佛子は、動物に對してすらも正當防衛の

權なき者なりといふ可し。また曰く、

『若佛子、以慈心故、行放生業、應作是念、一切男子是我父、一切女人是我母、我生生、無不從之受身故六道衆生、皆是我父母、而殺而食者即殺我父母、』

と、茲に於てかビフテキ、フライの屬は口にのぼす可らざる事となるなり。人間は皆豆腐、コンニャクの類を以て満足せざるべからざる事となるなり。然れども今日の佛子之を行ふ者果して幾人ぞ。

我が基督教に於ては動物に對して斯の如き見解を有する者にあらず、日用の必要物として肉食するは罪とする所にあらざるなり。然れども基督教は動物に對して無慈悲なる教理を有する者なりと思ふは大なる謬論なりとす。基督教はその立場より至りて健全なる思想を動物(及び一切の自然)に對して有するなり。

聞く所によれば、過般廣井辰太郎氏等の發起によりて『動物虐待防止會』なるものを設けられたりといふ。是れ實に慶賀すべき舉にして、東京に於ける「ジャパンタイムス」、萬朝、國民、時事等の諸新聞紙は皆之に賛成の意を表したり。而して政府も近頃大に注意を之に拂ふ者の如し。吾人は斯の如く諸方面に於てこの會の歓迎せらるゝを喜ぶと同時に、動物虐待の市中往々にして之あるを悲む者なり。斯の如きは實に日本の文明を汚す者たるのみならず、實に人道に背反せる行爲なりとす。

吾人はこの際、我が基督教が動物に對して如何なる見解を有する者なるかを明にせんが爲めに、マルテンセン師の『基督教倫理學』中なる動物に對する愛を述ぶる一節を引用して、讀者の一覽に供すべし抑もマルテンセン師の意見は至りて健全にして温雅なる者なり、吾人は敢て師と意見を殊にせざるを以て茲に之を引用譯述して讀者に示す者なり。

マルテンセン師は、その昔『個人倫理篇』の第二節『ハリストスに従ふ生活』のうちに、非人格造物に對する愛と題する章を設け、その始めに於て基督教徒が非人格造物(即ち動物、植物等)に對して有する立脚地を論じて曰く、

『吾人は固より人間に對すると同様なる意味を以て非人格造物を愛せよと説く者にあらずと雖、若しそれ創造者よりも被造物を更に尊敬するが如きとなくして、唯自然を愛し、同情を以て自然と交通し且つ之を悦ぶべきことを論ずるを誰か拒まんや。基督教徒が自然に對するの思慮は、自然を尊敬せず且つ之を卑微とし、自然界に於ける一切の破壊すべき者を惡とし、自然の一切の美を以て魔的誘惑と視做す制欲的厭世徒の論に反す。然れども、自然界に濶く可らざる所の妨礙(權利妨害)を見ざる所の異教の樂天觀、即ち自然は虚飾(可死物)を以て飾られ、之に屈服し、而して絶えずその組織及び物體を滅ぼす者なるを、(例へば蟲は花の爲に效ある者なれども病と死との蟲は人間生命の根を蝕するが如

き) 或は動物界に於て明に見ることを得る弱肉強食の『生存競争』の如き一切に對する一切の者の恐る可き争闘、或は害惡を播布する昆蟲群の如き有機物、或は又一切の有害小動物の如き者すらも、自然界に於て尊敬す可き完全に屬する者なりとの論にも等しく反對する者なり。樂天觀は之に關しては左の理由を以て吾人を慰むるなり、曰く、吾人の不平は、身を全體の立脚點に置く時には、直ちに消失する者なり、如何となれば、若し然がせば上述の如き不完全や狼藉は、全體の完全を致さしむる者なるを以てなり。詩人の所謂、

「愛も好も、彼等は全體を助くる者ぞや——全體を。」

„Die Flöhe und Wanzen,

Wie sie alle beitragen — zum Ganzen.“

と、いへるこれなり。然れども何人か之によりて一切の物が、この完全自身が證するが如く、至りて僅少なる寄與を完全に致さざる可らずといへる思想を有し得んや。且つ夫れ他の諸關係に於て、他の諸問題に於て寄與の法は認む可らざる者あり、全體に於けるの一事は、その寄與の法によれば、完全と呼はざる可らず、然るに無數の不完全と惡とを含有する者あるなり。」と。

我等基督教徒が自然に對する見解は斯くの如き性質の者なり。即ち自然を排斥して惡と爲すにもあらず、又絶體的に之を善と爲すにも非ず、マルティンセン師は更に論歩を進めて曰く、「基督教徒の自然に對する見解は、自然の壊滅す可き一切の物のうちに、永遠の能と神性を察するにあり。(ロマ書一の廿)而して自然と交通するに於て(自然に最も親む者は之と共にするを得)、吾人は神靈世界の好比喻を得るなり、即ち自然に惡あるが如くに(神靈世界の)善を想像し、自然に撞着あるが如くに平和を想像す基督教徒の心は、之を公平寛大且純潔に開封し、心情と生命とは、諸の印象を以て之を新にせざる可らず、即ち一は創造物の崇高偉大なるを見、一は美麗にして且つ愛惜すべきを思ひ、而して又幽雅なる自然の力の前に屈すべし、斯くの如くすれば即ち同一の自然も人をして自然以外に導かしめ、未だ啓示せられざる尙一層高き自然の象を示すなり。」と

その自然に對する人間の義務を論するや則ち曰く、
 『吾人が自然に對するの義務を論するに際しては、之を造物主の意志に對するの義務として、適當にして、又深淵なる意義に於て考へざる可らず。造物主の意志たるや、人をして自然の主たらしめたり、これ故に人は、一は道德上の問題の方法として、一は自己の目的物として、創造者の思想と相一致調和して自然を待たざる可らざる者なり、されば自然を待つもの道に於ける一切の虐待、一切の無必要なる惡戯、一切の放恣なる破壊は惡として禁せらる可きなり。一言を以て之をいへば、人は、自然に對

するに人道を以て之を待たざる可らず、即ち人の品位に適する方法に於て自然を待たざる可らざるなり、人の品位とは人性の品位をいふなり。然らば則ち人は、自然の單純なる産出物、各種の創造物に對しては、そが創造者によりて賦與せられたる自然の構造及び運命に従ひて之を待たざら可らず。而して又人がその目的物として自然物を使用するや、一切の生命も亦その目的ある者なることを忘る可らず。地上に於ける神の像たる人間は、必ずしも神の正義の唯一の鑑にはあらず、創造の全區域に秩序法則、制限はあり、之と同時に神の善も亦これあるなり、神は「一切の者に善く、その深き憐憫は彼の業の上にあまねき者なり。」(詩篇、百四十五の九)蓋し神は、生命ある者の死及滅亡を喜び玉はず、されど萬物の生命の短からんとを、然り快濶喜悅の故を以て生命の短からんとを切に顧み玉ふなり。然れども萬物の死し去り死し來り、且つ相互に酷待し、破滅するは、地に對する呪あるを以てなり。この呪や、神の國の完成し、神の子の光榮ある自由の來るまで之を移すと能はざる者なり。(ロマ書八の十八以下)』

と、師は更に動物に論及して曰く、
『獸類に對する我等の關係に於てこの事は殊別の應用を見出すなり、獸類に對しては我等は天然の同情心を有せざる可らず、彼等はたとへ自覺を有せざるなりと雖、尙感覺を有して快と苦とを感ずる者

なるを以ての故なり。人は一は自己を防衛する爲め、一はその必要を満足せしむる爲めに獸類を殺すも不正にあらず、否必要なり。然りと雖、一切の不必要なる慘酷は之を避けざる可らず、思慮なく獸類を慘害酷遇してその苦痛を見て樂むが如きは實に非行なり。唯單に利益を得んが爲に過重の荷物を獸類に課するが如きは、不正にして且つ野蠻なる暴力なりといふ可き也。』

と、最後の一語、實にこれ今日吾人が市中に於て往々之を實驗する所にあらずや。動物の虐待は實に文明の耻辱なり。吾人はこの事の一日も早く跡を絶たんとを望まざるを得ず、マ師は更にモイセイの法に獸類を溫和に取扱ふ可き事を教へあると、この精神は舊約書中に一貫せると等を説き(ソロモン王のイナナ書四の十二等)人間が動物を待つ溫和寛大は下級の動物にまで及ばざる可らざるを論じ、哲學者ライブニツが嘗て一昆蟲を久しく顯微鏡下に於て驗視し、後之を再び元の葉上にうつせる事を記し、これを人間の高尚なる美德となせり。師は更に遊獵に關して曰く、

『吾人の快樂の方法として獸類を使用するとは敢て不正にあらずと雖、之を慘酷に且つ不人情なる方法に使用するは固より論外なり、而して世人は之を顧みざるもの多し。たとへば彼の獵の如きは、有害なる野獸を剿滅せんが爲め、或は人間の必要を満さんが爲めにするは、全く許容すべきなれども、單に人間の快樂の爲め或は獵場を設けて遊獵し、或は急走獵と稱する遊獵の如きは、いづれもよく注意

顧慮すべき者なり。

「サ、ウォルタ、スコットは其の晩年に於て記して曰く、「余は以前は射撃の名手なりと雖、今や獵を爲さざるべし。然れども如何に考ふるも、余は獵に於て全く幸福なりしといふ可からず。余が憐れむべき小鳥を捕へし際に小鳥はその死を以て余を責むるが如き最後の眼を余に向つて投ずる時、余は常に不愉快を感じたりき。余は敢て他人よりも仁慈心ふかき者なりと自ら傲る者にあらずと雖、何物もこの余を責むる酷なりとの感情より脱せしむる事なかりき。今や余は自ら我身を嘲笑するとなく、我が心の傾向に従ふを得るを明にいふなり、我等の上の空中に自由に鳥の遊ぶを見るは尙更に愉快なりと。」彼は又附加して曰く、「然れどもこの感情は、我が子をして遊獵家たらしむるを禁するほど深きにはあらず」と。社會の習慣を以て大に必要なることとしたるスコットは、疑ひもなく若し彼がその子をしてこの高尚なる感情を成し遂げしめなば、彼の子は貴族的批評の目的物とならんとを恐れしなり。」この一節はまた我國の現状に適する言なるを覺ふ。近年遊獵はますます盛んならんとする傾向あり、且つ世の僅かなる名譽の爲に德義を實行せざる者あるは、世人のよく知る所なり。師は又小鳥を籠中に養ふ事につき曰く、

「小鳥(殊に我らに害のなき)を一籠中におしこめその天性に全く反する生活法を強ゆるは許るすべき

や否やは、未だ疑ふ可き餘地あるなり、彼の人を嫌ひて却りて、獸類を愛したるシヨペンハウエルが彼の佛教徒はその祭日、或は祝す可きことありたる時は、市に行きて小鳥を買ひ、市門に於てその籠を開き天上に飛び去らしむる故を以て、多數の基督教徒よりも一層高き立場にありと論じたるは或は正しきにあらずや。」これ亦將來我國に於て一問題となる可きなり。マルタンセン師は、最後に試験の爲に爲す所の生體解剖(犬、兎、等の)につきて、此の如き事は眞理の爲め必ずしもあしき事にはあらずと雖、之を爲す者は全く學術の爲め高貴なる心を以てせざる可らずして、單に好奇心を以て亂りに生體解剖を爲すは、慘酷なることにして非行なりと論じたり。

以上は師の意見の一斑なり。過日一新聞紙の報する所によれば、英國の一商人は金魚を虐待したりとの事を以て過料に處せられたり。その所謂虐待とは、該商人は數日間旅行して宅にあらざりしかば、金魚に手あてをすると能はず金魚は爲に死したるなり、思ふに我國人にして斯の如き話を聞かば、唯之を一笑に附するならん。然れども動物に對する愛情は、此くまで發達してこそ人情の美も顯はるゝ也。彼の市中に牛馬の屬を虐使し、酷遇し、使ふ者、見る者共に之を怪ますして當然の事の如く思ふと果していづれぞや。キョーテの「フワウスト」中のメフィストレスは、人間なる者は、悟性(Vernunft)を有すれども、これ他の動物よりも更に動物的たらんが爲のみと罵倒せり。「凡そ獸類を虐待する者は、

この罵倒を蒙るも之を辨解するに辭なかる可きなり。ア、悟性を有する人類よ、爾は果して動物を虐待するの権利ありや、若し権利ありとせば、その権利は何處より來しぞ。爾は地の一物をも造りし事なきに非ずや。

四

人格的神に就て「演説の草稿」

世に神を尋求するよりも高尚なる問題は非ず。是れ凡ての問題中の根本問題にして、他の諸問題は、この一問題の如何に由りて決せらるゝなり。この世界は如何なる者なりや、その目的は如何、又その來歴は如何等は根本的問題即ち有神無神の問題によりて解釋を得る者なり。殊に人生問題、即ち人は如何にして生ぜしや、その目的は如何、この理想は如何等の問題に至りては、全くその基礎を之に置く者なり。さればこの問題は、學者や哲學者の専攻問題に非ずして、普通一般何人に關らず之を尋求すべき性質の者なり。

世の學者或は哲學者がこの問題を論ずるを見るに、あまりに一方に偏するの弊あり、即ち他ならず、智識に偏するなり。然れども吾人の見る所に由れば、この問題は單純なる智識の問題に非ずして全人心に關する問題たるを信ず。單に頭腦によりて之を論せんとするは不可なり。この問題は切に心情と良心に關する者なり。神の存在は、形而上の諸原理や、形而下の諸現象を結合修成して始めて之を證

明し得る者に非ず。有神の信仰は人心の奥底に固有なる者にして、有神的の諸議論は、この固有の觀念を尙一層明に認識せしむるにあるなり。換言すれば、有神の觀念は人の本性にして、有神論はこの本性を明にする者なり。更に語を換へて言へば、有神論は注入的に非ずして、開發的の性質を有する者たるなり。神の觀念は人心に固有なる者にして、直覺的信仰なり。されば人類はこの觀念より自由に脱却する事能はず。吾人は世界の存在を意識し、又自己の存在を意識するが如く、是非とも神有ることを意識せざるを得ざる者なり。吾人の思想は、有限の者より無限の者に、見るべき者より見る可らざる者に進み、その目的所に達せざれば止まず。換言すれば、神を思想せではかなはざるなり。神を信ずるとは、人間の心の本質的要素なり、内部の必要なり。異教の哲學者エピクテタスの言にも、「若し我れナイチンゲル鳥(鶯の類)ならば、その歌をうたひて其職を全うすべし。若し我れ鶴ならば又その歌をうたひて職を全うべし。されど我れは理性ある動物なるを以て、神を讚揚せざるを得ず。これ我れの號呼なり、我れは之を全うすべし。」とあり。然り、人間の最高なる思想は神の事なり、この思想は人間が是非とも到達せざる可らざる必然的思想なり。吾人は神を思想するは、之を存在する者なりとして思想するとの外能はず、これ我等の理性の必然法なり。固より神に就ての意識は漸々發達したる者に相違なしと雖、この觀念は我々の心中にある直覺的真理にして又信仰なり。夫れ吾人の意識

即ち自覺も漸々發達したる者なるに非ずや、漸々發達したる者なるを以て固有の者ならずとせば、吾人の意識も固有の者に非ずと爲す乎。神を意識するに於ても、その理は一たるなり。

これを以て神の觀念は普遍的なり。羅馬の哲人シセロは「De Deo」^{Dei}と云ふ書中に「嘗へ神の性質をよく知らざるにもせよ、未だ一神を信せざるが如き野蠻未開の民は一もあるとなし。」と記したるが、この古文は實に拒む可らざる眞理、あやまらざる事實を表明する者なり。今日はシセロの時代よりも多くの國民はありと雖、この言は決して誤まらざるなり。いづれの國民と雖、神を知らざる國民は非ず、宗教は至る所にあるなり。無神論者は、宗教を有せざる國民を發見する事に大に勉めたりと雖、遂にその勞は無効に歸したりき。アフリカの黒奴も、新ホランド人も、アメリカにある印度土人も、皆その開化のひくきに係らず、一の高貴なる存在者を信ず。何處にても人類のある所に宗教の有らざるはなきなり。たとへその儀式や信仰に愚蒙迷信はありと雖、神を信ずるといふ一點に至りては、皆同一なり。基督教會の古代の師父等(例へばテルトリアンの如き)が「我等は自己の靈魂に於て神ある事の證を發見す、我等は神を知り、その存在をさとらざるを得ざるなり。」との言を常にくりかへしたるはこの所以なり。

既に有神の信仰は人心に固有なる者なれば、何人も之を拒むと能はざるなり。然るに世に無神論を唱

ふる者あるは何ぞやといふに、是れ固より世の偽智妄辨に迷はされ靈魂の本性を失ひし者のいふ所には相違なしと雖、又一には無神論は眞に人間の理性の要求する所に非ずしてその墮落せる行爲の要求する所なりとす。十八世紀に於ける佛蘭西の有様の如きは是が好個の標本なり、されば神の信仰は、唯單に一の學問に非ずして、同時に一の徳義たる者なり。徳義は決して獨立せる者に非ず、神の觀念に附屬せる者なり。

神の存在の論證は、歴史上よほど古くより有る者にして、基督教以前の諸哲學に於て、プラトン、アリストートル、シセロ等も之を論じたり。基督教神學は、之を採用して完成したる者なり。古代の諸哲學者等は固より吾人の知らざる新らしき事をいひしに非ず、然れども英傑なる觀察を以て宇宙の諸方面を研究して論結せる者なれば、よく吾人の心に適合する者あり。詩篇に、「もろくの天は、神の榮光をあらはし、穹蒼はその手のわざを示す、この日ことばをかの日につたへ、この夜知識をかの夜におくる、語らずいはすその聲のきこえざるに、そのひびき全地にあまねく、そのことば地のはてにまでおよぶ。」(十九の一乃至四)とあり、又聖書には之に類する語句諸所にあり、是れ深く吾人の心に反響する語に非ずや。宇宙は神を論證する記録なり。

先づ有神論につきて大體を述べんに、第一世界の存在するは是れ直に神の存在を證明する者なり。茲

に世界あり即ち是が創造者なかる可らず、是れあまりに明白なる理由にして、人或は之を以て淺見なる非科學的議論なりとなさん。然れども結果を見て原因にさかのぼるは、論理の必然なり。聖使徒パウロは、「それ人の見るとを得ざる神の永能と其神性とは造られたる者により、創世より以來さとり得て明かに見るべし。」(羅馬書一の十九)と言へり。されば希臘、羅馬の哲學者等も既に宇宙を見て有神の論證をなしたり。これ決して淺見に非ず。茲に世界あり、乃ち是れ何に起原したる者なりや、世界の原因は世界自身にありや。世界の外に世界よりも高き者あることを知らざる人々は、原因を世界自身に求む。即ち世界を以て世界の原因となすなり。然れども世界は如何にして原因になりしか。創造的勢力は何處にありや。世界にある處の諸勢力は、皆これ有限の勢力なり、されば茲に一の創造的勢力ありと云ふ可らず。然らば諸勢力の結合したる結果なるか、されど有限の勢力が集合したりとて依然として有限にして一の無限勢力を産出する者に非らざるなり。即ち世界を創造するが如き一の無限勢力は世界のうちに存在せざるなり。世界にある所の諸勢力は、即ち第二の原因にして、第一の原因に非ず。第二の原因が夥多集合したりとて、第一の原因を生ずる者には非らざるなり。故に吾人は、究極的最高の、元始的の原因を世界以外に求めざるを得ざるなり。他ならず、神は世界の第一原因なり。世界の存在を以て神を證明する議論は、種々の形式を以て言ひ顯はされたり。世界に顯はれたる運動

は、一の最高のなる發動勢力を要す、この發動勢力は即ち神なりとは、基督教以前の哲學に於て既に之ありたり。而してこの議論は現今に至るまで繼續せられてます、發達進歩せり。即ち現今に於ては生命の現象を見て、その起原なる一大生命なる可らずと云ひ、又物質と精神との二元を結合せる所の一神なる可らずと云ふは皆この種の議論なり。物質の起原を混沌に求むるは或は可なりとするも生命の起原を物質に求む可らざるは、當然の事なるを以て、是非ともこれを一大生命即ち神に歸せざるを得ず。又物質と精神とは全然性質を異にせる實在にして、一は原因となると能はざるのみならず如何にして性質相異なる二者を結合すべきや。是に於てか二者の起原たる可き一大實在なる可らず、無限絶對の神即ち是なり要するに是れ皆世界の存在を見て神を論證する法なりとす。

又世界の現象が秩序整然として目的の應合あるを以て神の存在の證となす。希臘語にて世界の事を「*コスモス*」といふ、是れ「美觀」の義にして、世界の相調合して混亂せざるを表せるなり。斯の如き秩序及び意匠は何處より來りたる乎。偶然よりなるか或は又神よりなるか。前者は甚だ奇怪なる議論にして吾人の信する能はざる所なり。

次に又歴史上の事實を見て神の存在を證するを得。即ち古來歴史上に於ては種々雜多の事件紛然として繼續せるが如きも詳にその現象を見る時は、常にその現象中に正義の觀念の活動するを見る。世

界の歴史は、常に正邪の戦争にして、正は遂に邪に勝つなり。斯の如き現象を單にこれ偶然の結果なりと爲す者あれども、吾人はこれを神の偉大なる攝理となす者なり。乃ち吾人は歴史上の現象を見ても神の在ますと知り得るなり。彼のレツシングの如きすら歴史を以て人類の教育なりとなしたり又他の諸學者にして、基督の降生を以て時代の一大移轉にして、世界の歴史の謎を多く健なりとする者多し。殊にヨハン、ミューレル (Johann v. Müller) の如きは、この觀念を以て歴史解釋の第一義となせり。人格的神を排斥せし哲學者ヒフテの如き、排基督教に熱心なりしストラウスの如きすら、皆世界の徳義的攝理を信じたり。如何となれば世界の現象はこれなくしては到底解釋する事能はざるを以てなり。

以上は即ち世界の存在、その意匠と調和及び歴史上より有神を論證したる者にして、之を要するに客觀的論證なり。外部の證據なり。更に之を主觀的即ち内部より論證する事を得るなり。内部とは他ならず、吾人の心即ちこれなり。

吾人はわが内心に神の觀念を發見す、尙他の究極眞理と同一なり。吾人は眞、善、美等の觀念は、人類が自己の力にて産出したる者に非ず、これ人類に固有なる觀念にして、唯しか考ふるのみ。神の觀念も然り、これ究極の觀念にして、眞理中の眞理なり、人間が有する最高觀念なり。吾人は神に就て

考ふ、これ取りも直さず存在の證據なり。吾人が神に就て直覺的觀念を有する事實は、即ち神の存在を證明する者なり。これカント・フエの論證なり、而して吾人は之に同意せざるを得ず。

この事實(即ち心中に神の觀念を有する)の性質は、事實その者よりも更に多く有神を證明するものなり。如何となれば、吾人の思想は單に神なる一觀念によりて占めらるゝのみならず、活動せる神によりて占めらるゝなり、吾人は神を思想せざるを得ざるなり、これを思想するは吾人の理性の必然法なり。神を責任の者として思想するより外に適當なる思想法は非ず、神は責任の者なりと思想せざれば遂に思想する能はず。神といふ事と實在といふ事とは相繼關結合せる者なり、是れアンセルムの有名な實證學的論證なり。

カントは之を論駁して、思想あるが故に實在ありとする論法は成立せず、思想と實在との間を結合する橋梁あるとなし、されば神の觀念あるを以て神は實在する者なりとするは、不當なりと云へり。然れども吾人はこの論に服する能はず、固より一般の思想は、思想あるが故に其實在ありとする事能はずと雖、神の觀念の如き理性の必然的に要求する思想は、其思想あると共に實在あらざるべからず。必然的觀念は實在の證據なり。吾人の理性が必然的に要求する者は、果して吾人を欺く者なりや。若し然りとせば凡ての蓋然的證據を有する真理は信するに足らざるのみならず、算數の原理の如き人心

に固有せる究極的真理をも疑はざる可らざるに非ずや。故に吾人は必然的觀念と眞の實在との間は相繼關結合せる者なる事を信す。

カントはアンセルムの實證學的論證を排斥したりと雖、良心よりの證據を許容せざるを得ざりき。即ち人に良心あるは有神の證據なり。神は道義的感觸即ち良心の一要求の「假定」(證據なしに認むる者)なりと。實に良心は無上の權力を有する者にして、吾人の心に斯の如き必然的要求のあるは、その根柢なかる可らず、根柢は即ち神なり。

カントは又賞罰の點より神の有あるを信じたり。徳義と報酬との調和の爲に神のあらざる可らざるを論ぜり。

之を要するに有神の信仰を排するは、人類固有の觀念を強いて排斥し、我々の理性及び良心の必然法を蹂躪し、その結果は世界や人類の目的理想を消散せしめ、凡ての點に於て活動せる世界を枯死せしむる者なり。

現今哲學界の最高調を示せるは凡神論(Pantheism)なり。これ哲學上の一大問題にして、之を詳論するとは到底この一小論文のよくなる所にあらずと雖、該論は吾人の本篇の主唱に密切なる關係を有するを以てその概畧を論じて本篇の結論とせん。

凡神論の形式は種々ありと雖、之を要するに、左の一觀念に基礎を置く者なり。即ち世界には種々なる有限の變化個々の現象ありと雖、これ單に有限の變化、個々の現象たるに過ぎずして、そのうちに調和、一致を保つ所の原理なかるべからず、この原理は即ち神なり。然れどもその神たるや意識的、人格的の者に非ず、唯普通の生命にして萬物の生命のうち任る者なり、即ち萬物の理性なり。これを稱して神といふのみ、神は決して獨立的に存在するに非ず、彼は唯世界の中にあり、世界は彼の實體なり、彼は唯その真理たるのみと云ふ論これなり。凡神論は古代よりこれある者なり。かの佛教の如きは、この論に基礎を置きし宗教にしてこの世を夢幻と觀じその實體たる真如に歸するを以て論旨となす。又單に哲學としては希臘のエレア哲學の如きはこれに屬す。彼のアリストートル、プラトンの如き大哲學者は、凡神論を信せずして一の人格的神を教へたりき。スピノザは基督教時代に於ける一大凡神論者なり。然れどもその主唱する所長く世人に忘れられたりしが、レッツィングによりて再び世人の注意を引くこととなり、セーリングによりて復活し、ヘーゲルによりて大に世に表顯せられ、現今の哲學界に勢力を得るやうになりたり。

スピノザ曰く、『凡ての存在の基礎は、一の永遠の實體なり、その實體は、思想と物質との二世界に活現す。個々の形式は、永遠に衰へざる實體の胎より發出し、又再び生命の流のうちに入りて消失す。』

彼の海波の起伏するが如く、個々の生命は、普通の一生命より生じ又滅する者なり。』と、セーリング曰く、『永遠絶對の存在者は、絶えず心意と自然との二世界に分たる者なり、自然界に顯はる者も、人間に顯はる者も同一生命なり。自然界に於ては勢力となり、人間に於ては思想となる、共に同一生命なり。』と、ヘーゲル曰く、『絶對は普遍的理性にして、初め自然界に自己を葬りて消失し、人間界に於て自覺識の影にて自己を回復したり。絶對は斯くして進歩の終結に於て、再び自己に歸りて一致を完成す。この覺識の進歩は即ち神なり、神は決して獨立的の活物に非ず、又存在者に非ず、彼はたゞ我等の中にあるのみ。神は彼自身を知る者に非ず却て吾人は彼を知るなり。人間が神に就て思想し神を知るは、即ち神が彼自身を思想するなり。神は人の真理なり而して人は神の實在なり。』と。凡神論の結果人は遂に神となりたり、豈に驚くべきに非ずや。

凡神論は一大觀念の上に立てる議論たるに相違なし。吾人の生命と普遍的生命と結合せる者なりとするは事實なり。然れどもこの二者を同一の者なりとするは、誤謬の見解たるを免れず。吾人が凡神論を排するは左の二條件よりなり。(1)實際上より、(2)理論上より。

(1)凡神論は宗教を滅ぼす者なり。如何となれば凡神論の所謂「神」とは吾人が人格的關係を有し、彼を愛し、彼を信し、彼に祈る事を得る人格的神に非ず。即ちその所謂「神」とは、只吾人が之の前に膝を

屈せざる可らざる必然的勢力なり、只吾人が之に没入せざる可らざる普遍的生命なり。斯の如き神より如何して宗教を生せんや。それ宗教心は人間に固有せる性情にして到底之を奪ふ可らず。されば凡神論は、人間の心が必然的に請求する實際上の者を拒む者たり。又凡神論は道德を滅却するものなり。如何となれば凡神論の「神」は萬物自身の實體なれば世に眞に善惡の區別ある可らず、即ち善惡とは單に一の絶對原理が異なりたる發顯を爲したる者に過ぎず。さればこの教義にして廣く世に行はるゝに至らば義務の觀念は滅亡し善惡相混合すべし。又凡神論は人間の希望を滅却さする者なり。それ晩春或は暮秋の際に花一度凋落すれば再び本に復するとなし、人の花を悲む者唯一朝の枯衰の故に非ず、その永遠歸らざるを以てなり。凡神論に従へば、人間も亦この花の如く、一度この世の生を辭すれば吾人は實在の大流に消失滅亡する者なり。然れども人の「自尊」は斯の如きをゆるさざるなり、吾人が今世を以て全く自己を終る者とせば、世にかくの如き失望はあらざるなり。されば凡神論が實際上に於ける結果は斯の如し。この結果を見ても、その議論の眞に非ることを知るべし。されど論者或は云はん、結果は議論の眞偽を確むる者に非ず、眞理は眞理自身に就て見ざる可らず。世に結果の如何に由りて判斷すべからざる者あるは事實なり。故に又凡神論を論する固より理論上よりせざる可らず。されば吾人は今至つて簡短に之を論述すべし。

(2) 先づ凡神論は前後矛盾し自家撞着す。即ち神あるを主唱し又之を拒む者なり。凡神論の神は無限なる者なり、然るにその無限なる者が實在を單に有限なる者に於てのみ有すといふは、無限はそれ自身の實在を有せずといふに等しからずや。如何とならば、無限は如何するも有限と同一たると能はざればなり。若し有限がその現實ロイヤルならばこれ決して本質的現實(實在)に非ずして、無限自由の實在は他に之なかる可らず。されば凡神論は無限なる者の存するを主唱すると同時に之を拒む自家撞着なり。又有限は如何にして無限と爲り得べきか。凡神論に由れば吾人は死によりて有限たる事を免るゝなり。然れども死の如きはこれ只所を變ずるのみ、境を異にするのみ。吾人有限の者は決して其の有限を超越して無限に入ると能はざるなり。然らば無限は何處にも無かるべき筈ならずや。

又凡神論の神は、常に絶えず特殊と個々とのうちに變化しつゝあり。是れ何の法則に由りて然るか。スピノザ曰く「神の必然法」なりと。嗚呼是れ何たる言ぞや。凡神論の普遍的實體は獨立的に特殊の者を産出するとあるなし、如何となればその實體は必然法によりて發動する者なるに、個々の形成は自由法則に基く者なればなり。されば凡神論はこの點に解釋を與へず。又凡神論は自然が意識を生じたりとするか、或は又意識が自然を生じたりとせざる可らず、二者その一に居らざる可らず、然るに意識は自覺的にして自然は自覺を有せず、如何にして一より他を生ずべきや。結果は原因より大ならず

とは論理の古き法則なり。自覚なき者と自覚ある者とは全然類を異にす、如何にして前者が後者を産出せんや。ヘイデルの説に依れば、凡神論の神は絶対思想なりとす。人間が絶対を知り之を思想するを以てなり。即ち神は彼自身を思想し知るなりとす。然れども如何にして吾人の神に就ての意識が神彼自身の自覚となり得べきや。若し人間の意識にして神の意識と相關する事なき者とせば、後者は人の意識よりも尙高き意識ならざる可らず、即ち世上の者を以て比すべからざる超人間的意識即ち人格的神ならざる可らず。

其他良心或は心情の點より神の人格的即ち個位パーソナリティを有する者なることを證し得ると雖、やゝ長論に係るの恐あるを以て一先づ茲に擱筆す。

五

生命の秘義と愛の本源

(排科學萬能主義)

予頃日近刊の『日本正教傳道誌』を閲讀したるに、その第一卷、第二編、第三章に於て故酒井神父に關する左の興味ある談話に接したり。曰く、

その後イオアン酒井は再び白洲に引き出され、この日は大馬、本間季明なる者、法官の席に着きイオアン酒井に向ひ……再度の審問を起せり、曰く「汝の信する神は何神なるや」と、イオアン酒井曰く「天地萬物の主宰なる唯一の神、即ちこれを造物主と稱す」云々と、述べて眞神の存在と三位一體の神の事を詳述せり。この時法官は「その神はいかなる所に在るや」と問へり、イオアン酒井は「天に在り」と答へたるに、法官は「その神の天に在る事を見得るか」と問へり、イオアン酒井は「見る事を得る」と答へたるに、法官更に「我等の目に見えざるは如何」と反問せり、イオアン酒井の曰く、「それは貴官等が眞神を信せざるが故なり」と答へたり。此時、本間大馬微笑して曰

「然らば予等もハリストス教の門に入り唯一の神を信すれば見ゆるといふの意なるか」と、イエ
アン酒井は然りと答へたり云々(同書第一巻、二百十三、四頁。)

ハリストス教の信者にして、この問答を讀まば、該法官の無智淺見なるに驚くべし。即ち彼は見ゆる物の外何をも信せざるの主義なり。『我等の目に見えざるに如何』との疑問は起らざるを得ざるなり。然れども強ちこの法官の愚を嘲笑する勿れ、滔々たる世間の不信仰者、懷疑者は多くこの類のみ。この如き味者は、必ずしも今日の日本にあるのみに非ず。歐洲に於ても、是が好個の代表者あり。ラ、プラヌ(La Place)の言に云ふ、『我が天に於て我は一の神の在ますをも見ず』と。又ラランド(Lalande)は記して云ふ、『我は六十年の間天を通觀したれども、彼(神)を見たる事、決してあるなし。』と、斯の如きは、前法官と好一對の思想家といふべし。

思ふに今や少しく思想智識の何たるを知りし者は、誰か斯る愚昧の言を爲さんや。見ると能はざるが故に信せずとの主義はあまりに幼稚なり、あまりに單純なり。乃ち教育ある者のいふを耻づる所なり。然れどもこれに類似する主義を有する者は世間その人に乏しからず、否多くの青年、多くの所謂學者なる者、所謂科學的頭腦を有する者、所謂算數的思想を有する者、一言以ていはゞ世の俗人のエラシとし貴しとする所の人々に之あるは、憫笑の至りなり。然らば前法官類似の主義は如何なる者なるか

といふに、確證なきの故に信せず、或は論理の法に合はざるが故に信せず、即ち科學的に非ざるが故に信せずといふ主義是なり。この主義は、前法官や、偉大なる思想家ラプラスや英傑なる觀察者ラ
ンド等諸先生の抱持せらるゝ主義よりもよほ、高尚深遠なるが如しと雖、吾人は之を以て前者に類似する主義なりとなさざるを得ざるは、聊か氣の毒に思ふ所なり。

『前者は單純なる稚心より見ると能はざるが故に信せずといふ愚見なり。然るに之に反して後者は科學的證明なきを以て信せずといふ頗る文明的確論に非ずや、何を以て二者を類似せりといふや』是れ恐らくは後者の主義を持つる人の胸中に起る疑問なるべし。吾人は之に答へて左の如く言はん。科學は固より文明の産物にして、その理論は精確にして誤謬なからんには、吾人は之に服従せざる可らず。然れども宇宙の廣大無邊なる組織は、人類の少弱なる頭腦より出でたる科學のみにては満足に之を説明する事能はず、抑も科學は宇宙に於ける種々なる現象、形體、事實を材料として之を分類組成するのみにして、その本質本體の如何を問ふ者に非ざるなり。即ち第二段の説明にして、第一段の原理を支配する者に非ざるなり。第一段の學は即ち是を或は哲學、或は真正の宗教に於て求めざる可らず。譬へば物理學は物質の運動、法則等に就て説明するも、物の本體、或は物質の本源等に就ては何等の説明をも與へざるが如し。然らば則ち科學なる者は宇宙全體を説明する者に非ずして、僅にその一部を

説明する者たるや明なり。然るにこの一部説明者を拉し來りて以て全體の説明を強いんとするは甚だ不當の處置なると猶五管を以て神を見ん欲するが如し。是れ吾人が前者と後者と相類似せりとするの理由なり。即ち再言すれば、前者は可見的物質の外何者をも信せず、後者は科學的知識の外何者をも信せず、前者は不可見的物件のあるを知らず、後者は超科學的(即ち信者の所謂神靈的)知識のあるを知らざるなり。前者は物質萬能主義にして後者は科學萬能主義なり、共に是れ一部を以て全體を律せんと欲する愚昧の偏見たるのみ。吾人が二者を類似せりといふ豈に不慮ならんや。

科學が如何に宇宙全體を説明するに足らざるかは至りて明確なる事なれども二十世紀には二十世紀のラブラスあるを以て、聊か一二の例を取りて言はんには、第一に「生命の秘義」は科學の到底説明する能はざる所なり。生命の秘義とは、生命は何處より來りしや、如何にして發生せしやとの問題なり。今科學の所説によれば、我が地球は、始め白熱したるガスの集合たる火球なりしが、其後その表面冷却して遂に地表を造り茲に生物は發生せりとす、實に容易の解釋なりといふべし。然りと雖、吾人の解すべからざる點は、その生命の何處より來りしかにあり。近世の科學者彼自身も生命は生命より出でざる可らざるを認定せり。乃ち二三大家の説を引用せんに博士ハクスレイは「吾人が現今の知識を以ては、生物と無生物との間を連結する鎖を發見する能はず。」と云ひ博學なるサー、ウィリアム、ト

ムスは「死物はその前に生物の感化なくんば生物となる能はず。これ正確なる科學の救ゆる所にして動かす可らざると猶重力の法則の如し。予は科學的信仰の條件として、生物は只生物より出づ決して他より出でしにあらざるの説を執らんとす。」と云ひ、ドクトルタンダムもその論文中に生命は生命より出でし者にして、決して他より出でし者に非らざる事を詳言せり。日耳曼の大哲學者カントは「我に生命と物質を與へよ、然らば予は世界の形成を説明すべし、されど物質のみにては、予は毛蟲の説明をも爲すと能はず。」との言を常に口にせり。夫れ斯の如く生命は生命より出で來らざる可らざるに、科學は之に科學的説明を與ふると能はざるなり。科學萬能主義は、科學的説明なくんば何事も信せずとならば、自個の生命をも信せず乎。前記のトムスは昔て一の臆説を出して云はく、元始生命は他の行星より來りし者なりと、即ち行星運行の際に地球に接近し、此時他行星より生命は墜落せりといふにあり。然れども是れ固より執るに足らざる臆説にして、忽ち科學の排斥する所となりたり。今假にトムスの説に一步をゆづりて、生命は他の行星より來りたりとするか、是れ生命の起源を説明したるに非ず、唯之を一步遠ざけしのみ、其不可思議なる事依然たり。それ生命は生命より來る、加之も他に由て造られざる永遠無窮の一大生命より來る、微弱なる科學何ぞ斯る大眞理を説明し得んや。又更に一例を擧げんに、メルウソンの進化説は十九世紀の一大學説として多くの人心より信用を博し、

殊に我國の一部の人々は之を以て無上の寶典を尊崇し、その信心中々堅固なる者あり。中には之を以て基督教攻撃の好武器なりとの心得違をなし、片腹いたくも得々と辯じたつるもあれど、吾人は進化説のみにて宇宙を解釋し盡したりする者に非ず、吾人基督教徒のみに非ず、苟も深く科學を研め、また純理の一斑を窺ひし者は、誰がダルウヰンの進化説を以て宇宙の解釋となす者あらんや。唯無智旨味の輩にして始めて之を爲すのみ。吾人の見を以てすれば、ダルウヰン輩の科學者は、造化の跡につきて自己の臆説を述べしのみ、固よりその本源を講ずる者にあらず、即ち科學の特有なる第二段の説明なり。然るにこの説明を拉し來りて、その本源にまで及ばんとす、其無智憫笑の外なきなり。

吾人は今少しく詳かにこの事につきて言はんことを欲す。神の大なる智慧は、その造物に於て見るとを得るなり。吾人は宇宙の事々物々を見て、宇宙は偶然の進化の結果に非ずして、一大意志より出でたる統一ある受造物なることを確信する者なり。譬へは例を微少なる昆蟲類にとりて見んか。それ昆蟲類の如きは人の注意に價せざる者なれども、詳かに之が状態を見れば、その形状の種々なるに關せず、又その體の大小に係らず驚くべき組織の一致を發見すべし。蜻蛉の長身、また之に反したる蝴蝶の異種類なる瓢蟲^{てんとうむし}、及び蛾、また至小なる蚤の如き昆蟲と雖、皆共に同一性質を有し、その體は二十の元始的部分より組成せらるゝなり。同一形状の特質は、甲殼類の動物の全類を通じて成熟したり。(甲殼類の

動物とは、蟹、海蝦、シヤコ等をいふ) 凡そこの此き現象は、造物を通じて到る所にあり、宇宙には一見萬物雜然として存在するが如きも、靜に之を考察すれば、整然たる秩序組織のあるあり。然るに是れ偶然の進化にして敢て一の絕對意志の發顯して然るに非ずと爲すことを得る乎。自然の管内に偶然の進化を爲したる宇宙にして、斯の如き統一あるは奇怪なり。進化論の外何事をも知らざるは、實に盲昧の徒なりと云はざる可らず。

ダルウヰンの説は科學の常狀として事實の説明を爲すに過ぎざるものなり。昆蟲、鳥類、四足獸等の諸動物に『生存の競争』の爲にその周圍に適する如く處すといふが如きは、即ち彼等がしか處するの事實を示すのみにして、その力の本源を説明するにあらざるなり。何が故に「タルミガン」(松雞の類)は己に勉むる事なくして、冬にはその羽毛雪白となり、また秋には其の往來する土地の色に如く雜色の斑點を有するに至る乎。該鳥の羽毛の變化は即ち生存競争の爲に必要ななりといふは、自明の理のみ、是が説明には非らざるなり。又彼の中性の蜜蜂を見よ、該蜂はその類中の多數を占むる者にして、その性に於て未だ完全ならざるものなり。然れども若し蜂社會に於てその『女王』の死し或は他に移さるゝ事ある時には、彼等はこの中性の卵子の一個を取りて、『王居』を造りて茲に之を置き、他の蜂の食物と異なる一種の食物を以て之を養ふなり。而してこの選ばれたる者は遂にその性を變じて『女王』とな

り、その體も大きく、その力も強く、全く、異種の蜂となる。此の如きは是れ「自然の淘汰」「適者の生存」「生存の競争」等の平凡なる言語を以て説明し得べき事なる乎。吾人はその然るを信せざるなり。蜜蜂の有する此の如き本能のうちにも、神の大なる智慧と愛との顯はるゝを見るべきなり。ドクトル、カルペンターは「自然と人」と題する書中に云へるあり、「生存する「適者」の爲には、彼等とその適者たらしむる所の體の構造なかる可らず。」「(四二六頁)と。ダルウツンはこの秘義を解釋せざるなり。否凡そ科學なるものは此の如き高尚なる點にまで進入するの權利なきものなり。夫れ全能なる造物者は、その「愛」を宇宙の萬物に顯はし玉ひたるなれば、その「愛」を見るときは、何事にも本然の解釋を附する事能はざるなり。

科學萬能主義は五官萬能主義の進化したる者なり、然れども是れ最後の適者にはあらず。真理の生存競争に於て敗北せざる可らざる運命を有する者なり。吾人は科學に心酔せる人々に勸告するに、宇宙は科學以外の真理にあらざれば解釋する能はざるとを以てせんとす。宇宙は片々たる科學の理論に由りて成立せるに非ず、宇宙は組織したる一の實體にして、整然たる秩序あり、亂れざる統一あり。今至誠公平にして之を觀察熟考せば、誰か宇宙に於て神の聲を聞かざる。不信、懷疑、不徳は人性の本然を害して、真理を見るの明を暗ます者なり。神は我等の眼に見えざるは如何との問ひを起したる

前記法官の愚を笑ふ勿れ、科學に依て神の存在を説明する能はざるは如何との問ひ發する者の愚と何れぞや。前記法官は可視的物質以外に不可視的のものあるを知らざりしなり。科學萬能論者は、科學的理論の外に、文豪カーライルの所謂「論理が圖解或は式を以て説き能はざる活事件」のあるを知らざるなり。二者共に盲なるに於ては一なり。

六

排基督教の諸説

第一

基督教を排斥するは日本の特有なりと思へるは大なる誤なり。否現今我日本にて基督教を排斥せる諸説は比較的淺薄なる者なり。古來より神學、哲學、科學等の上より基督教を排斥したる學者少なからざるなり。而してその歸する所の要點は、基督教は有神の信仰にして、之を排斥する者は多く無神説或は懷疑説なりとす。ギョーテはその『Westöstlichen Divan』に於て「歴史に於ての最も特殊にして最も深遠なる主旨は信仰と不信仰との衝突なり、他は皆之に附屬せるのみ」と云へり。この語はよく諸學者の引用する句なるが。我が基督教に關する思想界に於ても實に然るなり。乃ち予は古來よりの排基督教の諸説を記述して讀者の參考に供せんとす。

始め基督教の世に來るや、是れ世界に對する一の新らしき見解なりしなり。其第一の目的は、基督の十字架、神と和睦すると、耶穌基督に於ける神の恩寵、悔改、救贖、永生を知らするにありたり。基督は固く救贖の教なり。然れども此救贖なるとは、世界に對する成る一の見解に基く者にして其見解や嶄新なる者なりしなり。固より斯の如き見解の來るまでには、人々の智識や、學者の哲理、人間の良心等にて其の道を備へありしには相違なしと雖、その來りし見解の本質は全く嶄新なる者なりしなり。基督教の最も基礎と爲す所の真理、即ち神の一なると、人類の一なるとの説の如きすら當時の世人を驚かしたるなり、これ全く新らしき觀念なりしを以てなり。況んや神は我等の父にして、その大なる智慧と愛とを以て天地萬物を造り、人類には特別の恩寵を與へ、之を保護し、その罪惡に趨くや之を救はんが爲めにその獨生子を降し、之を十字架に釘したる事、人類は皆天父上帝の子にして内外の國人を問はず皆兄弟なると、人間は永生を有する者にして、神の國は地上より永遠に繼續する者なると等の教理に至りては、當時の異教の學者等は夢にだも知らざる所なりき。これ全く嶄新なる者なりしを以てなり。教會の古聖アハナシー師は、異教人に與ふる書『Contra Gentes』に於て「學者哲學者のうち誰かよくその聽者の智識の程度を我が信者中の平凡なる者が實行しつつある真理にすら進ましむることを能する者あらんや」(同章十一章)と云はれしは、よく此間の消息を知るに足る言なり。基督教の真理は此の如く當時は嶄新壯嚴なる者なりしが、今や世人の慣るゝ所となりて多くの人は之に注意せざるなり。然れども是れ決して基督教の價值を左右する者に非ず、基督の教は依然として壯嚴なる

光輝を放ちつゝあるなり。唯世俗の人は、其の美になれて注意せざるのみ。猶ほ始めて太陽を見し人はその燦爛たる光輝に驚くと雖、常に之を見慣れたる人は少しも之を怪まざるのみならず之に意を注がざるなり。基督教に於けるも亦斯の如し。此の如きは俗世界に於て凡ての大真理が受くべき運命なりしなり。當時基督教は、斯の如き地位を有して、異教の哲學宗教を壓倒して次第に盛大になりたり。然れども此間固より排基督教的思想なかりしには非ず、然らばその排基督教的思想は如何なる者なりしかといふに、ユーデヤ教のものと異教的の者との二ありて、共に主基督の人物に就きて非難攻撃したるものなりき。即ち前者は基督の神性を認めずして、基督を以て唯だ一の預言者なりとなし、後者は歴史上の確實なる事實を以て單に理想なりと附會したり。この外異教的思想の教會内に侵入して基督教の形式の下に顯はれたるものもありしが、基督教は次第に進歩し中世紀に至りて大に繁榮を來したり。

中世紀は基督教が外部の盛大を極めし時代なり。歐洲の諸強國は皆斯教に服し、帝王の尊嚴も法皇の下に伏せざる可らず、寺院、修道院、宗教學校は至る所に建立せられ、文學、美術、詩歌皆之に關せざる者はなく、道理は信仰の下婢にして哲學は神學の下女なりしなり。中世紀の一大學者ホマ、アクリナスの神學上の大著『Summa』に於て古哲アリストートルやプラトンは哀れにも基督教の眞理を辯證

する爲に引きまはされたり。實に此の世紀は萬事基督教によりて支配せられたるなり。然れども異教の思想はやがて再び顯現し來り、加之も其勢や甚だ強かりき。

中世紀の末葉に於て所謂『文藝復興』なる事件あり、以太利を根據として全歐洲を風靡したり。即ちこれ古典の研究より起りし者にして古代の文學美術及び異教的思想の復活せし者なり。これ固より決して惡しき事に非ずと雖、唯徒に古代の美術文學に心配するの餘り、尊貴なる基督教的精神までを忘却するに至りしは、その弊風なりといふ可し。文藝復興後、その美術文學は大に發達進歩して燦然人目を眩する者ありしも、徳義の一點に至りては大に退歩したりと稱せざる可らず。ミランダラのピカス(Picus)伯は記していふ、『哲學は眞理を尋求す、神學は之を發見す、宗教は之を所有す。』と。これ恐らくは彼自身の歴史なるべしと雖、此の如きは實に異例にして、多くは古代の文藝美術に淫して基督教的精神を没却したりしは事實なり。

後ルーテル、メランクトン等の所謂宗教改革者起りてより、茲に種々の異説、即ち正統なる基督教に反對せる諸説の端を開き、而して極端なる唯物論に迄及びたり。今吾人はその重なる者を左に記述すべし。

(1)『ソシニニアニズム』(Socinianism)。この異端説はイタリ人ファウスタス、ソシナスによりて唱道せ

られしを以てこの名あるなり。シシナスは三位一體説に對して異見を有したるを以て正統基督教に反せしなり。一千五百七十四年彼はミランを去りてセルマン、ポーラン等に行き所謂「ユニタリアン」(三位一體斥説)なる者の中心となれり、而して「ソシニアン」協會なる者を組織し、ポーランド及びトランスシルバニヤを根據とし西歐にその勢力を扶植したりき。今該主義の概略を擧げんに「ソシニアンニズム」は全く天啓及び超自然の事を排するに非ず、唯三位一體につきて基督の神性を拒み、永遠の刑罰を排し、又原罪を斥けたり。然れども處女マリアの教理の如きは之を信じたり、又基督の普通の人間に非らざる事を説き、人間は彼を以て徳義上の理想とし、以て罪惡の境を逃がると、及び基督は全く預言者の職、司祭の職を盡したる者なれども、その十字架に釘せられしは、唯彼の教理の堅固にせんが爲にして、決して救贖の爲に非ずとなり。之を要するに、「ソシニアンニズム」は超自然要素と唯理の見解とを合一せし者たるなり。

(2)英國自然神教 英國に於ける十七世紀及十八世紀の自然神教は、前説よりも更に甚だしき排正統を爲したる者なり。該主義は既に確定したる基督教の代りに所謂自然宗教を置かんとしたる者なり。一千六百四十八年にハーバート公を始めとし、トランド、チンダル、ウールストン、ボリンブローク等相繼ぎたり。要するにその諸説は、基督教をして一般の道徳及び宗教上の諸主義に服従せしめんとし

たるなり。一、神の存在、二、神を崇拜するの義務、三、眞に神の爲めの徳行及び慈善、四、悔改及び罪を容るすとの義務、半ば現世半ば來世に於けるの賞罰、この五つの者は、ハーバート公の意見によれば、「純粹宗教の重なる基柱」なりと云へり。然るに茲に笑ふべきはハーバート公が「天啓より異なりたる者としての眞理云々」と題する書を完成したる時、之に題してこの書神の旨に違ふや、若し適はば特別な徴候を玉へといへる意味の語を附したり。それ神の基督に依て世に顯はれ玉ひしを信せざる人にして、何ぞハーバート公によりて顯はれたる神を信する者あらんや。蓋し公の如きは自ら知らざる者なりと云はざる可らず。

自然主義は唯これのみに止まらず、ますます極端に進み、聖書に於ける凡ての天啓を以て祭司或は預言者の發見に係る者とし、或は聖書中の人物の批評をなし、之を攻撃し、其他之に類する有ゆる疑問を提出せり。然れども英國に於ては、該主義の運動は久しく繼續せざりき。後メンヂェスト派の起るに従ひ大に舊に復する者ありたり。

以上の説は排基督教説なりと雖、尙ほ神、道徳、不死等の信仰あり。然るに佛蘭西に於ける懷疑不信の排基督教主義に至りては、實に妄狂を極めたり。吾人は左に佛蘭西、日耳曼等に於ける排基督教の諸説を述べんとす。

第二

啓人は前條に於て『ソシニーアニズム』と『英國自然神教』とに就きて、その一斑を述べたるが、この二説は共に基督教の天啓に就きて排斥したる者なり。然るにこの如き思想の傾向は、ますますその歩を進めて、佛國の思想界に至りて絶頂に達したり。

(3) 佛國無神説 十八世紀間に行はれたる佛國の排基督教説は、甚だ極端なる暴説怪論にして、耳を傾くるに足らざる者なり。實に當時の思想界は、人間の高貴を棄て、顧みざりし墮落せる境遇にありし者なり。淺薄なるエピクル主義に基礎を置きたる現世主義を主唱し、徳義、靈魂、上帝等、數世紀間の發達進歩に依りて人類が得たる形而上の思想を一朝にして排斥蹂躪し、自ら得々として凱歌を奏する様、恰も野獸の一群が都府を荒らすに異ならざりしなり。今その中の有名なる人士の二三を擧げてその一斑を推知せしめん。是等人士のうちかの有名なるルッソーの如きは、比較的温和なる論者なりき。ルッソーは宗教的感情を有し、神を崇敬し、基督教の崇高なる宗教にして、その經典の特ふ可きを信じたるが、憾むべしその性夢幻の如き妄想に沈溺する癖ありて、事理の正當なるを見ること能はず、偏見に走りて、實際の世と相去ること遠く、是を以て現に實在せる諸事をも之を排したり。一言以ていはルッソーの諸意見は、常識を缺きたるなり。然れども是れ敢て深く論及するに足らず。當

代の思想を代表したる一偉人は即ち文豪ヴォルテールなり。ヴォルテールは詞藻豊富なる天才の士にして、歴史家たり、哲學者たり、戯曲家たり、又詩人たり、理學者たり。フレデリック大王嘗て彼を稱して云ふ『たゞ一の神あり、又たゞ一のヴォルテールありと。嗚呼斯の如き一大天才も境遇はその思想を支配し、時流の俗論より脱する能はざりしは遺憾なりと云ふべし。ヴォルテール言を極めて基督教と教會とを嘲笑罵倒し、あまつさへ基督教を忌みきらひたり。彼は常に "craquez l'infame" なる語を口にし、基督教も、教會も久しからずして滅亡して跡なきに至るべしと信じ又之を公言したり。デデロー、ダレンバルト一輩の佛國百科字典は、當時有力なる著書の一として盛に無神懷疑の説をなし、淺薄なる理論を世に行はしめたり。獨國男爵ホルバックを中心として集りたる所謂大食者同人は、"Système de la Nature" (一七七〇年刊行)と題する唯物論の叢書を公にし、心の動搖せる世人の喝采を博したり。その書の教ふる所大抵左の如し。

『人は唯だ物質たるのみ、思想及び意志は頭腦の所産なり。神の信仰、靈魂存在を許容するは、物質と精神との二個の假相を誤認して二者異なれりとなすに過ぎず。人の自由は、死の止む可らざるが如くしかく小なる者なり。自愛及び利益は、行爲の唯一原理にして、人間社會は相互の利益を基礎として形成せらるゝ者なり。』云々。

始の排基督教説は、主基督の神性を排するにありしが、次第に進みて、今や一般の靈魂を拒絶するに至れり。抑も斯の如きは人間理性の所産にあらずして、輕浮なる時俗の潮流より來りし暴論たるに過ぎざるなり。吾人は以下日耳曼に於ける排基督教を一見せんと欲す。

(4)日耳曼唯理論 日耳曼に於ては、排基督教の運動は、急激ならずして徐々に来り、次第に成熟期に近づきたり。これ急激に來る者よりも尙危険なりとす。而して此國に於てはかの佛國に於けるよりも徳義心の存せしを以て實驗的精神は層一層之に抵抗したり。ヘルマン、ライマヌス (Herman Reimarus) はハムブルグの人なるが所謂 "Wolfenbützel Fragments" なる書の著者なり(此書はレンシングに由りて刊行せらる)その所説は、昔に聖書及び聖書の徳義に反對するのみならず、主基督の人物に就きても反駁の態度を取りたり。曰く、基督の計畫したる所は政事にあるなり、彼が十字架にありて、我が神、我が神、何ぞ我を捨て玉ふやと叫びしは、明にその失敗を告白して失望の嘆聲をもらしたるなり。然るに彼の弟子等は十二時間も経ざるうちに、彼の政事上の計畫を轉じて宗教上の者となし、基督を宗教上の『メシヤ』となしたるなりと。然れども斯の如きは、あまりに急激の議論なりしを以て多くの反對を蒙りたり。フレデリック第二世の時に際して佛國の不信仰説は朝野精神の間に傳播せしも一般の人は之を取らざりき。時代の精神は、基督教を極力排斥するに非ずして、唯夢幻の如き

空漠なる説をなすに過ぎざりしなり。ウオルフ學派の數學的論證の如きは、一時勢力を得たるも後直に衰へ、國民は基督教の信仰に更ふるに輕浮なる哲學論を以てし、從て教會の教理の如きもいたく制限せられたり。即ち宗教及び道徳は必用なりとなしたれども秘義は不要なりとなし、表面に現然として顯はるゝ所の者を真としたれども裏面にひそむ深遠なる真理に及ばざりき。斯の如きは即ち當時の時代精神なりしなり。メンデルソンは神の存在と、靈魂の不死とを論證せしが、時人は乃ちこの上に宗教を建立し、神學は時代の精神に従ひ、天啓と理性との調和一致に勉めたり。

然るにコンスベルグの哲學者カントはこの教理を破壊したり。彼はその著『純理批判』に於て、凡ての思想は、唯だ主觀的の者にして、神及び一般客觀的必然の理たる超感覺的の者を知ると能はず、是れ故に哲學を以て神を論證すると能はずと論じ、又他の一著『實理批判』に於て、良心及びその要求に於て一の徳義の必然法ありとなし、神、不死、賞罪等は良心の要求する所なりと論じ、之を基礎として徳義世界を建立したり。曰く、徳義律に従ふは何人にも絶對的の義務なり、『汝爲さざる可らず』といふ無上命令法は、常に權あらざるべからず、是れ人の徳義なりと。シルレル之を嘲つて曰く、『斯の如くんば徳義は即ち奴隸の徳義なり、自由の子の徳義に非ず』と。カントの議論の結果は、宗教は唯徳義を維持する爲にのみ必要なる者となりたり。然れどもカントは歴史上の基督を以て徳義の實現となし

人間は之を模範として、徳義の上達を計るべしと説きたり。

之を要するに唯理論は、人間の理性を基礎として基督教に抵抗する者にして、かのソッナスが之か端を開きてより斯の如く發達したり。而して永く教授間及び講壇の上に勢力を得たり。今更に之が論旨を一言すれば、一の神ありて世界を造り、之をその法則に従て運轉せしめ、自己は再び之に關せず、故に奇跡、預言、或は直接の啓示等はあるとなし、基督教は敢て天啓の教なるに非ず、又基督の斯の世に來りしは奇跡に非ず、基督は神人に非ず、普通の人にして、賢者たり、徳義の人たるのみとなすにあり。

『ソッシーアニズム』は基督に關しては、聊か超自然の分子を容せしが、唯理論は全く之を排斥したり然れども尙一の人格的神、徳義上の自由、及び靈魂の不死等を信する者なり。然るにこの三者をも共に破壊し去らんとする者あり、他ならず、凡神論是なり。

(5) 凡神論 唯理論につきて凡神論の出づるは止むを得ざる勢なり。凡神論に於ては、神の人格を排し、たゞ之を世界内部の生命實在となし、物心の二界は一の實在より發願したる二方面に過ぎずとなすに至れり。かくの如き理論は凡ての宗教を亡ぼす者なり。凡ての徳義を滅却する者なり、如何となれば人格的神にあらずんば、之に對する信仰、希望祈禱ある可らざるべく、又凡ての現象は、一の絶

對より必然的に發願したりとせば、自由意志の如き者ある可らざるを以てなり。(凡神論につきては前文『人格的神に就きて』を參看せよ。)

(6) 唯物論 唯物論も唯理論に基づける他の一方面の發達なり。フェエルバフは思想の變遷を告白して曰く、『神は予が最初の觀念なりき。道理は予が第二の觀念なりき。人は予が第三の觀念にして且つ最後の觀念なり。』と。この語に於て彼は簡短に且つ明確に自己思想の推移を叙せるなり。然れども彼の所謂『人』とは、經驗的、感覺的の實在たるに過ぎざるなり。彼の哲學は人類學中にあるのみ。曰く、凡ての宗教は自ら欺くなり即ち人心の迷想なり。神の觀念は畢竟するに人の觀念たるに過ぎず。換言すれば人に似たる實在の他に之あるを誤想したるなり。されば人が人に就て考ふるは取りも直さず神に就て考ふるなり、故に『人はおのれの像によりて神を造りたり』と。この格言の上に彼はその哲學を建立し精神を排し物質にあらゆる力を賦與したり。嗚呼是れその知識なりき。排基督教の説は、是に至りて完成したりと云ふべし、之より下に進むと能はざればなり。

今吾人は本編を終るに際して、佛國の史家ギゾーの言を引用して、之が結論とせん。曰く、『當代に於て基督教に對して攻撃を加ふる議論は、その性質及び計畫につきはいて、種々の相異なる點あるべけれど、通じて以て一なる發途點あり、他なし人類及び世界の運命に關する超自然的のものを

排斥するとは是なり、基督教及び他の諸宗教に於ける超自然の要素を斥け、又教理に於けるが如く、その歴史にある所の超自然をも排するにあり。』(L'Église et la Société Chrétiennes en 1861, P. 13.) 是れ一言にしてその要點を明示する語なり。我基督教は人格的一神の觀念を諸真理の基礎とする者なり他の諸説は、この根本原理につきて相異なる見解を有し、従て種々相反する結果を來すに至るなり即ち自然神教は神を超越的のものとし、凡神論は之を世界の内部にある者とし、唯物論は全く之を無き者と説くなり。文豪セキスピヤの戯曲中に言ふあり。

There are more things heaven and earth, Horatio,

Than are dreamt of in your philosophy.

(ホラチヲよ天地間には汝が哲學にて夢みる者よりも更に多くの事物ありとの意也——「ハム

レット」)

吾人は異教の諸哲人、諸哲學者に告ぐるに又この語を以てする而已。

七

靈魂の起原に關する諸説

一 先在説 (Præexistenzlehre = Preexistence.)

靈魂の起原に關する理論は、基督教に於ける罪の教理に關して密接なる關係を有する者なるを以て、一の重要な問題たり。吾人は、今この問題に對して、歴史的の觀察をなし、諸説の一斑を述べんとするなり。

靈魂の起原に關する古代教會の學者の意見は概して左の三種に分つ事を得べし。

- (1) 先在説
- (2) 直造説 (Creatianismus = Creationism.)
- (3) 繁殖説 (Generatianismus = Traducianism.)

先在説とは、全人類の靈魂は創造の始めに於て一時に造られたる者なりといふにあり。その所謂創造の始めとは、單にこの世界の創造をいふにあらずして、諸世界の始めをいふ者にして、凡そ有限の諸

靈は、物質の創造せられたる以前に一時に靈の全體を造られたる者なり、智的宇宙は、感覺的宇宙に先だつて存じ、從て諸人の靈魂はアダムの創造せられし以前より存せし者なり。さればアダムの肉體を受けざる以前に既に『前アダム』は存せしなり。人は始め肉體を有せずして天使の如き靈的存在者なりしが、神律に違反し、遂にその刑罰として、肉體を有し、この世に下るに至りたり。この現世は恰も一の感化院の如き者にして、人の目的とする所は、再び前の靈的狀態に歸するにあり。人の肉體は物質上の普通の法則に従ひて生ずる者にして、これ毫も人の本質にはあらざるなり。この世のアダムは肉體を有せしと雖、『前アダム』に於ては、全く智的靈物なりしなり。是れ即ち靈魂先存説の概要なり。

殊にこの理論を主唱したるはオリゲンなりとす。該理論に類似するは、ピタゴラスとプラトンの哲學にして、前者が轉生 (*metempsychosis* = *metempsychosis*) 即ち一の體より他の體に靈魂の轉じうつることを説き、また後者が人の内部觀念は、前世に於ける高尚なる生活の記憶なり、人に眞、善、美の觀念あるは、前世に於てこの者の實存したるを今世にはたゞ一の觀念として記憶に存するものなりとする説に相類するなり。然れどもオリゲンはこの議論を證明するに聖書を引用して、以て解決を求めたり。彼は『創世紀』第三章に記載しある元祖陷罪の記事を以て一の比喻として之を解釋したり。即ちこの比喻

は、有限の靈が高處より低處に墮落したることを暗示したる者なりとせり。その故如何といふに、『アダム』なる語は、ニウレイの國語にては、^{メテモルネ}一の類語にして、歴史上の一個人を指示するに非ずして、種屬を表明代示するなり、『蛇』とは惡魔を代表し、その『死』とは一時の死をいふに非ずして永遠の死を言ふなり、肉體の死の如きは、永遠の死の表號なるのみ、地堂を追放せられしは、前世の幸福を奪はれし者にして、所謂『皮衣』とは墮落したる靈が肉體を受けしことをいふなり。オリゲンは聖書を解決するに、かくの如き法を用ひ之を文字通りには解せざりしなり。彼は深く異教の哲學の感化を受けし人なれば、かくの論を唱ふるも異むに足らざるなり。即ちプラトンの『饗宴』(Symposium) 中のカロンとピニアの神話の如きは、モイセイの墮落談と同一徹の解釋を施すべしなり。(Origenes: De Princip. IV. i. 16; Contra Celsum, IV. XXXIX; 及び Thomassin: Origenes, 191, 192; Schubert: Geschichte der Seele, P. 657. 參看)

オリゲンは『ロマ書』第八章の廿二節の『凡の受造物は今に至るまで共に歎き、共に苦む』といふ句を引用し、これ靈の高尚なる處より下界に下りたることを證する語なりといへり。また天使の靈の墮落を論じたる節に、左の如く言ひたることあり、曰く「……これ故に造物主たる神は最も卑劣狀態 (congrua humilibus locis) に適する肉體を造り、彼等の爲め可見界を造出し、且つ主護神使を送り、墮落者に對し

て注意教訓せしめ玉ふなり。』(De Principiis, III. V.)

オリゲンはまたロマ書九章の十一節の邊を引用して人の靈魂の先在を證言したり。曰く「いまだ生れざるイアコフとイサフに一の不義あらざりしとせば、神がイアコフを選びしは、彼が前生の效に依り (precedentis vitae meritis) なるなり」云々 (De Princip. II. IX. 並にロマ九の十一參看)

オリゲンは又靈魂先在の説を證明ふるに、マトヘイ福音の第二十章にある葡萄園とその工人との比喩を引用したり。以爲らく第一に備はれしはアダム及び其の時代の人々にして、第三時に備はれしはノイ及びその子孫なり、アブラハム及びその子孫は第六時に備はれたる者にして、モイセイ及び子孫は第九時に備はれたる者なり。若し夫れ基督の時代及び其後の人々に至りては、即ち十一時に備はれし者なり。而して彼等は終日空しく立てる者なりと。オリゲン曰く、「これ故に、若し靈魂にして肉體の前に造られずして、これを共に (aestivation) 繁殖する者とせば如何して基督降生以後に生れしものが、その出來事の以前に空しく立つとを得べきや。」云々。

靈魂先在の説は、オリゲンを以て始り、又オリゲンを以て終りたるの觀あり。彼の死後往々その説を執る者なきにしもあらざりしが、彼の生前に於ては、その説に同意せし者、唯アレキサンドリヤ派あるのみ。アレキサンドリヤのキリル及びエメサのチミシウスの如きは、靈魂先在の説を信せしと雖、

前世に於ける墮落の説に同意せざりき。概してこの理論は非難攻撃さるゝと多く、第四世紀の末葉に至りて全く廢絶したり。イエロニムは「諸靈魂が神によりて古くより創造せられ、之を庫中にたくはへ置かし」といふことを以て恐るる信仰 (Sultra persuasio) なりと公言し (Hieronymus: Ep. IXXVIII, Ad Marcellinum.) ロラストリウスは、神が造物を見て之れを皆善なりと爲せしことを基礎として、前生に於ける墮落の説を排斥し、且つ肉體にして墮落の刑罰として與へられたる者とせば、肉體の善惡は、罪の程度に依らざる可らず。然らば惡魔は人體よりも尙一層めしき肉體を有せざる可らざるに、然らざるは何ぞやと論究したり。(Philastrus: Hareses, XCIX.)

靈魂先在の理論は、人類の起原に關して最も極端なる個人主義なることは、最も明瞭なることなりとす。該理論は如何なる點より見るも種屬の結合と一致とを、否拒する者なり。若し個人の靈魂にして世界創造の以前に、一の異なりたる命令の下に造られたるものにして、物質世界に先だつて存在することせば、一の靈魂は、他の靈魂と天然の或は屬類的關係あることなく、全く靈魂は單一なる者とならざる可らず。さればこの理論に従へば、單一なる個人主義は、全歴史を貫流するなり。靈は獨りにして法に背き、その刑罰として獨り肉體を受け、また遂にその肉體を脱して救贖せらるゝとせば、一の種屬として、即ち普通の人性として造られたりとの觀念は、これと兩立せざるなり。肉體の中に前世に於て墮落し

たる靈がやどり、その肉體なる者は、單に一時のものとなせば、肉體なる者は、人の眞個の一部に非らざるに至るべし。

抑もオリゲンの生れし處は、當時最も繁華を極めたる、アレキサンドリヤにして、其受けし教育は、希臘の哲學と基督教の教理とを混合するノスタク主義なりき、彼は基督教徒の家に生れ、おのれ亦一身を基督教の爲に貢献せんと欲し、熱心に従ひしを以て、議論往々狹隘に失するが如き傾きなきにしも非ずと雖、親しくその著書を見るものは、また彼の學識の當時に冠たりしを知るに難からざるべし。彼は紀元後、百八十五年乃至二百五十四年頃の人なり。〔本篇は神學博士シツド氏の基督教々理史(第二卷)を基礎としその他二三の書を參考して草せし者なり〕

二 直造説 (Creianismus = Creationism.)

次に直造説とは、人が生るゝ時に際して、神は直接に無より (de nihilo) 一の新らしき靈魂を造るとを主唱する所の理論を稱して然かいふなり。尤も直造説と雖、人體は直造せらるるとはいはず、人の肉體はアダムのうちに造り込まれて、以て増殖すとなせり。

直造説は、古代の教會に於ては、先在説よりも尙多くの歡迎を受けたり。この種の論者は、主基督がイオアン福音の第五章の十七節に「我が父は今に至るまで爲し、我も亦爲す」との語を引證して、

この「爲す」なる語は、單に攝理をいふに非ずして、亦創造をも意味すとなせり。彼等は又詩篇の第三十三篇の十五節に、「イエゴフはすべて彼等の心を造り……」とあるを引き、又撒加利亞書の第十二章の一の「イエゴフ即ち……人のうちの靈魂を造る者……」とあるを證明の語となしたり。

概していへば、直造説は東方教會の産出にかゝる理論たり、然れども西方の教會に於ても之が賛成者多かりしなり。イエロニムは神は、生命の日々の造成者 (quotidie fabricatur animas) なりと論じ、上記の聖書の語句を引用したり。又彼は直造説は未だ西方教會の主教等に多くの賛成を得ずと雖、これ眞の教會の教理 (ecclesiasticum est) なることを宣唱したりき。然れども彼は又ある點に於ては、オウガムチンが „De origine animae” に於て靈魂の罪の事を論じたるに賛成したり。(Hieronymus: Epist. LX XXIII, LXXIX.) ピクタウイウム (Pictavius) のヒラリーは西教會に於ける直造説賛成者中の傑出たる者なり。彼はその詩篇 (Ps. 139) を論じたる論文に於て、人の靈魂は、神の力の秘密にして知る可らざる作用により、日々に (quotidie) 造られあることを説きたり。直造説は、一の錯雜せる理論たるや明なり。即ち人の靈魂に對しては、神は絶へず特殊の創造を爲すとし、また人の肉體に對して、一の單なる創造を爲すと論結するなり。換言すれば、アダムの後の各個人の靈魂は神の直接の創造にかゝりて、繁殖するには非ず。然るにその肉體に至りては、繁殖する者にして、直接の創造には非ずと爲す。

かくの如くんば、後世の人は、その靈よりも前に、その體を造られあるなり。抑もこの意見は半ば先在説に類し、また半ば繁殖説に似たる者といふべし、即ち靈魂の個々に造らるゝ所は、オリジンの先在説に類し、また人の肉體の一致、即ち種屬結合の觀念に於ては後段説く所の繁殖説と致せ一にせり。

三 繁殖説 (Generatianismus = Traducianism)

繁殖説とは、人の靈魂及び肉體は共に繁殖する者なりと説く所の理論をいふなり。この説に於ては、創世紀一章の二十七節の人間創造の記事は、人性或は種屬を創造したることを表明する者にして、決して單なる個人を造りしことをいふに非ずとなす、即ち人類を無より (de nihilo) 造りたる業は、全く第六日を以て終りたる者にして、その第六日以來は、造物主はその創造力を演せざるなり、彼は第七日より休み。今も尙ほやすみつゝ(即ち新に創造せず)あるなり。この單なる作用によりて全人類は、その靈魂も、その肉體も共に最初の一對の人のうちに、又彼と共に造られたる者にして、彼より繁殖して、後世多くの子孫雲仍を生じたるなり。是れ繁殖説の大意なり。

繁殖説に従へば、創造なる事は生産とは全く別事たるなり。創造とは無より人類の本質を造出したる義にして、生産は創造の結果たるに過ぎず、即ち生産は存在せる人の本質より變化し來るなり、種或

は類の個化 (individualization) なりとす。されば人類は始めその造者の徳義上の像と肖とによりて造られたるも、また生れながら罪のある事を知るべし。何となれば人は創造後罪を犯し、またその罪を犯したるは生産前なればなり。

靈魂の起原に關する此種の議論は、最初テルトリアンによりて明に發表せられたり、その以來勢力を得て西方教會に於ける確説となりたり、然るに東方教會の神學者は、前にも述べし如く、寧ろ直造説を依持したりき。繁殖説の聖書に於ける根據は、ロマ書第五章(十二より十六)に於ける「アダムと原罪との事、コリント前書の第十五章(二十二)の「アダムに在りて皆死するが如く……」、エフェソ書第二章(三節)の「本性に由り怒の子たりき」、エウレイ書第七章(十)の「蓋メルヒセデクがアウラムに遇ひし時、彼は尙其祖の身に在りたり」。詩篇五十章の七に「視よ、我は不法に於て生まれ、我が母は罪に於て我を生めり」、創世紀第五章の三に「アダム……その像に循ひ己に象りて子を生子」等の語句にあり、テルトリアンは其著「De Anima」中に論じて曰く、「人の靈魂は、恰も樹木の萌芽の如し、アダムなる親木より子孫のうちに引き出さる (deducta) るなり」(C. 27)

繁殖説は、北アフリカ及び西歐諸國の教會に多く根據を占めたり、これ教會のとする所の罪に對する見解と能く符合する者あればなり。イエロニムは彼の時代に於てはこの理論は西方教會の大部分 (III.)

Xima pura occidentalinum) を与めたることを論證し、大レオ (Leo Magnus) は、『カトリカの信仰は靈魂に竝に肉體は共に母胎に於て形成する者なることを固く諸人に教ゆる者なり』と云ひたり。東方の教會に於ては、ニッサのグレゴリー、シナイトのアハナシイの如きは、この説に傾きたる人なりき。

オウガスチンは古代に於ける有名達識の神學者なるが、靈魂の起原に關しては、確定せる意見を發表せざりき。彼はその早き時筆にせし著作に於ては、靈魂先在説を不問に附せしが、後には之を斷然排斥したり。然れども彼は直造説と繁殖説のいづれを取りしか判然せず、彼は繁殖説を主唱したるナルトリアンを想記せしと雖、若しこの説を取らば、靈魂を以て一の物質的のものとせざる可らざるの嫌ひありと恐れ、また同時に、この説は原罪の教理によき解釋を與ふることを知れり。直造説の立ち難きは原罪を説明し能はざるにあり。彼はこの二説のうちいづれを取りしか判明せず、彼は、神は一切の者を同時に創造せりと説きしより見れば、その意寧ろ繁殖説に傾きし者の如し、アウガスチン曰く、『我は曾て知らざりき、今も猶ほ知らず。後世に出でし靈魂は、初生の人より傳はり來りし者なりや或は又各人の靈魂は、個別に神より直造せらるゝ者なりや否やを知らず』と彼は遂に確説を立てざりき。

四 中世及び近世紀の理論

中世紀に於ては、直造説は、他説を排して勝を制せしが如き狀ありて、却て繁殖説は學者の執らざる所となりたり、今その理由は如何といふに、第一に、繁殖説を執るに於ては、勢ひ靈魂を以て物質の如く見るの嫌ひあり、且つ永世不死といふ觀念と相反する傾向あること、次に中世紀の學者の多くはオウガスチン一流の人性學を執らずして、寧ろ希臘人性學の説に従ひしか、該人性學は、オウガスチンの人性學よりも繁殖説に對して扶助を與ふると少きものなるを以てなり。

然るに宗教改革の時に際して、アウガスチンの人性學は復興し繁殖説もまた行はるゝに至りたり。抑もアウガスチンは直造、繁殖の二説に對して確然たる定見を表明せざりしかば、改革徒の或は直造説を取り、或は繁殖説に傾く者あるは、又怪むに足らざるなり、ルーテル徒と、カルヴィン徒との相異なる點は、この議論に於ても見るとを得るなり、即ルーテルの徒は、多く繁殖説を取れり、只カリファクス (Calixtus) なる人のみは、*De animae creatura* なる書に於て、直造説を賛成せり。然るにカルヴィン一派の學者は、一般に直造説を主唱したりき。

我が教會にては固より繁殖説を取れり、人の靈魂は肉體と共に成る、その如何にして肉と靈と相接すやは知る可らずと雖、元祖が神より造られて、その肉體が繁殖するが如く、靈魂も亦繁殖して地に滿る至れり。

八

死及び未來

凡そ宇宙間に生あるもの、誰か死を免ることを得べき。生物はいづれも皆死するなり。その地上にあるも、河海にあるも、或は大氣中にあるも、死を免れざるに於ては一なり。抑この死に由りて、萬物常に新にして、幾多の種屬各々その新鮮を味ふことを得、造化の攝理豈にまた奇ならずや。若し夫れ生ありて死なくんば、限りある地球上の食物は、無数の生物を養ふと能はざるべく且つ限りある面積は限りなき生物を容るゝと能はざるべし。

今夫れ死なくんば、生あるべからず。吾人が今あるが如き状態にて永續せば、兩親なかるべく、小兒もなかるべく、血族なかるべく、親戚もなかるべく、青年もなかるべく、全世界唯老人の集合ならんのみ。而して人間は、終りなく、趣なき生活に倦厭し、同一無爲の感に苦まざらんを欲するも能はざるなり。されば古代の哲學者も、死を以て造化の最も仁慈なる賜物 *Interminera naturae* と稱したり。曰く、『我等は此空しき世界に於て望める眼を閉つ、死は人類の有する生得の權なり』。又英哲

ペーコンの言にいふ、『死の恐は、造化に對する貢としては、餘りに輕少なり。生ある如く死あるは當然のみ、かの小兒に於ては、生も死の如く苦痛なるべし』。

人類よりも劣等なる諸動物は、死に就きての知識または恐懼あるとなし。造化の攝理は、その仁慈によりて、彼等の眼より死を除き玉ひたるなり。唯人類に至りては然らず、人類は生あるうちより死の來ることを確知す。是れ獨り人類のみ有する觀念なり、即ち人類は死を知る動物なり。既に人類は斯の如き特性を有すると共に、こゝに亦一の屬性あり、未來の存在を信ずると即ちこれなり。諸動物の眼より死を除きたるは、造化の仁慈なりと雖も、人類の眼より之を除かば、同じく仁慈の旨に適合する歟、否却りて然らざるなり。今夫れ人類が死あるを知らざるによりて、幾何の利益あるかを計算せば吾人はその悉無なるを見るなり。之に反し、人類が死のあることを知るより來る利益は淺少ならず。是れ造化が諸動物に死のあることを示さずして、獨り人類にのみ示したる所以なり。唯何時、如何にして死するかの一事のみは明示せられず、これ亦故なきにあらず。若し人類にして、生ある時、自己が幾月の後、或は幾年の後、その父母、妻子、朋友等と死別するを得るものとせば如何。嗚呼、かくの如く將に來らんとする災害苦痛を預め嘗むるものとせば、人生の苦悶果して幾何ぞや。意志の剛健にして、體力の勇壯なるものと雖も、誰かこの苦悶に堪え得べけんや。且つ夫れ斯の如き前

知預想は、或は人類をして極悪非道に走らしむるべく、その知己友人の死を前知するに於ては尙一層の悪事を働くに至らしむべきを保せず。幸にして人類は之を知らず、過去に明にして鏡の如く、未來は暗くして漆の如し、造化の智慧夫れ注なる哉。

死に對する思想は、概して二種あり、一はエピキユリアン風の思想、即ち無宗教的の觀察、他は宗教的の觀察是なり。前者に由れば、死とは人の滅亡なり、皆無となるなり。後者に從へば、死とは人の滅亡にあらずして、他界に去るとなりとす。而してこの華麗なる後者の觀察は、萬世に渡りて、諸國民の有する所なるとは、宗教史に徴して明なり。抑も未來の存在するとは、人の理性によりて確然之を決定すること能はず。單に之れを觀察する時は、未來は必存するが如く思はるゝと雖も、是れ確然の事にあらずして、蓋然の事なり。即ち可能的 Possibility なり。未來の問題たる、眞面目に人生を觀する者の爲には、至りて重要にして且つ有益なりと雖も、現今の科學は、之を證明するの智識を有せず、科學の進歩も亦遅々たりといふべし。世或は科學の智識にて證明し能はざるとは、一切信せざるものあり、豈愚蒙の甚だしきにあらずや。微少なる人類の智識は、廣大なる造化の全體を解するに足らず。然るに斯の如き小智識を以て、唯一の尺度として造化の妙工を視、その尺度以外のものを虚として信せざるは、恰も盲者が光の存在を信せざると一般のみ、思慮あるものゝ爲すべきことにあらざるなり。

されば吾人は、現今の科學が、未來の存在するにつきて證するなしと雖も、之によりて吾人の信仰を動かすに足らざるなり。決して未來の存在を疑ふ勿れ、吾人の感覺にふれざる存在、或は世界は、現に我が世界の一場所を占むるも付るべからず、否、場所といはず、場所とは物質的にして且つ下劣なる造物に屬する偶然のものなればなり。生理學者の説によれば、生命とは物質的機關の結合の結果なりといふ。然れども吾人生命といへる現象を觀察する時には、斯の如き淺薄なる論を信ずると能はず。今假りに一步を譲り、唯物論者の説によるも、尙且つ未來の存在を信するに足る理あり、ロツクによれば、自己不變 Personal identity は意識に基くとせり。而してその意識なるものは、物質に屬するものならば、神或は宇宙の絶體は、その意志によりて、この意識を物質の一部より他の一部に移すことを得るにあらずや。

未來の存在は、蓋然、可能のこととして信するを得べし。決して理に背きたるにあらざるなり。されば諸國民、少くとも正當なる社會を組織したる諸國民は、昔よりこの觀念を有し、現今も之を有す。而して過去を以て將來を推せば、諸國民は永遠に之を有すべきなり。一派の哲學者は、之を排斥したりと雖、その議論は、唯一時人を動かすのみにして、永く人心を支配するに足らず。譬へ政府の力こそ雖も、人間不歸の觀念を人類より奪ふと能はず。嘗て佛蘭西の革命政府は、Père la Patrie 共同墓地

に、「死は永遠の眠りなり」と刻せしも、唯人心を動かしたるのみにして、彼等をして之を確信せしむると能はざりき。試に思へ、如何なる人が未來の存在するを排斥する歟。婦人は之れを排斥せず、未開の民は之を排斥せず、思想健全にして、意旨活潑なる人は之を排斥せず、又苦難の人は之を排斥せざるのみならず、益々之を信認するに至る。唯之を排斥する人は、偏頗なる理論を有するものと不健全なる思想に沐するもののみなり。世の事物の理を考究し、科學の外に所信なき智者達者と雖も、之を排斥するに能はず、寧ろ疑を入るのみ。人類が生涯の経験によりて見れば、いづれも未來の存在を期するものゝ如し、ジョン・ステュワード、ミルすら、その晩年に至りて來世のたのしみものなるを語りたり。一友、ウォルテールに書を送りて、その未來の恐怖より全く免れしことを語りしに、このフアルチーの老哲學者は、「予は貴君を祝す、然れども予は、さほごまでにあらず」即ちなほ恐るゝ所ありしなり」といひき。一は利學の大家、一は無神論者にして、その言ふ所斯の如し。

未來の存在するとは、神の正義より見るも、その必存を期し得べし。吾人は、神は正義なるものにして善を賞し、惡を罰するものなるを信す。而して賞罰は必ずしも現世に於て全くせられず、時に善人衰へ、惡人盛ゆるとあり。故に神の正義にして果して眞ならば、斯の如き不調和は、必ずや來世に於て調和せられざるべからず。即ち來世に於ては善は賞せられ、惡は罰せらるべきなり。これを以て、

善人の爲には來世は喜ぶべき所として迎へられ、惡人の爲には恐るべき所として退けらる。見よ、内心疚しきとなき人は、死を見る歸するが如しと雖も、之に反し積惡の人は、其死を恐るゝと甚しきにあらずや。よしや未來につきて明確なる觀念を有せざる人にもせよ、死に對してかくの如き感想あるは、吾人が日常の經驗に徴して明なりとす。

サー・トーマス・ブロンは、其著 "Religio Medici" 中に記していふ「予は神に謝す、生命あるために精神を勞し、或は死を見て怖れ慄くが如きとなきを。然れども、予は死を恐れざるは、古への墓地發掘者が、骸骨或は聖不朽體を見て平然たるが如きと同一にあらず。乃ち予は眞の死なるものを解する能はず。是れ予が死を恐れざる所以にして、偶々死なるものゝ極所を考ふる時に於ては、人をして却りて勇氣を増さしむ所あるべし。況んや信仰確き基督教徒に於てをや。この故に祖先の過誤を怒る勿れ、又彼等と同一の運命を蒙るを憂る勿れ。死とは呼吸の止み、四大の分散するのみ、内部の靈魂のために何の苦もある。若し予にして、死に對して、斯の如き中正なる見解のなかりせば、予は死を以て人事中の最も悲痛すべきものとせん。希望を熄すべき他界(即ち未來)なからんには、空しき浮世の事々物々は、一時も予をして生を保たしめざるべし。惡魔にして予は死せざるべしとの信仰を予の心に起さしめなば、予は甚だいやしきものとなるべし。予はこの生を保護すと雖も、然も予が最良の思

慮冥想は、時として死を望むとあり。予は死を嫌ふものを賞すと雖も、之を恐るゝものを厚く敬すると能はず。故に死するを辭せざる兵士の如きは、予の深く敬愛する所なり。蓋し異教人にとりては、生を愛するの理自らあり、然れども基督教徒の死を見て周章するが如きは、予の解する能はざる所なり。」と、以上は書中の一節を義譯したるものなり。彼の有名なるアヂソン氏は、永く病床に呻吟せし後、醫師が其助からざるを告ぐるや、氏は書を以て一少年を招きたり、少年來りて曰く、「貴下よ、貴下は予を招きたり、思ふに遺言を託せんとのことならん、予は最も神聖に之を保つべし」。此時氏は「如何に基督教徒が安然として死するかを見よ」との言を残して安らかに他界に去りたりき。また善良なるマスキュラムが臨終の時、如何に平安靜肅なりしは、左の詩によりて見るとを得、曰く、

Nil superest vitae, frigus pnceordia capti;

Sed tu, Christe, mihi, vita parentis, ades.

Quid trepidas Anima, ad sedes abitura quietis ?

En tibi ductor abest Angelus ille tuus

Lingue domum bano miseram, nunc in sua fata ruentem;

Quam tibi sibi Dei dextra restituet.

Pecasti ? scio; sed Christus, credentibus in se,

Pecata expurgat sanguine cuncta suo.

Horribilis mors est ? fateor; sed proxima vita est,

Ad quam te Christi gratia certa vocat.

Praesto est de Satana peccato et morte triumphans,

Christus; ad buno igitur laeta alacrisque migma.

冷かなる死は、我心を襲ひ、我生命は去る

嗚呼基督よ、我が永遠の生命を近くに引けよ

我魂よ、汝は何故に我胸のうちに戦くか

天の使は、汝を平安に導かんとて來れり

喜樂せよ、土をもて造られたる朽つべき此家を

神は定めたる日に於て之を回復すべし

悟りしが、我は之を知る、迫らざるべし

基督はその血によりて汝を贖ひたればなり

されど尙衆人は死を怖るゝか

基督が死によりて生を呼ひしを考へよ

彼は、悪魔と罪と死とに勝てり

されば喜悅を以て汝の死せんとする呼吸を止めよ

吾人も亦以上二三の例の如き平安なる死を望まざらんや。死は生涯中一度は何人にも下るなり、志あるもの豈に思はざるべけんや。

死は全くの滅亡にして、未來なるものなしとせば、思ふに死ほど嫌ふべきものはあらず。死は唯現世を辭して、他界に去るものとすればこそ、悲哀中にも樂しき希望のあるなれ。試に死を以て永遠にして希望なき告別として考一考せよ。ア、如何に恐るべきぞ。如何に偏理無情の獨身者と雖、斯の如き恐怖に堪ゆべけんや。況んや妻子を有し、親族知己を有する人に於てをや。然れども造化は、吾人に此の如き堪ゆべからる恐怖を興へざるなり。

死及び未來の存するが爲めに、徳義上に益する所甚だ大なり。されば各立法者は、未來の信仰を以て、社會生存上に資する重要な教義となしたり。それ成文の律法は、有形發願の罪を罰するを得るのみ。無形秘密の罪に至りては、如何ともする能はざるものなり。唯それ徳義上の制裁ありて、之れを

防禦するのみ。而して死及未來に關する正當なる見解は、人の惡事を止むるに大なる力あるを以て、間接に社會の保安に資するあるは明なり。今個人に就きて見ても、死及び未來につきて正當なる見解を有する人は、生あるうちは徳義にすゝみ。死の來るときは安然として逝く之に反し、死を無とし、未來を虚とするが如き偏見に迷へる者は、偶々墮落の端を茲に發し、私慾に耽り公益を害し、遂に苦痛煩悶の間に死す。譬へ吾人は、死及び未來を論證すると、甚だ詳なる能はずと雖も、斯の如きは人生の實事にして、何人も之を否定せざる所なり。

人の死せんとするや、身體大に衰弱し、精神いたく疲勞し、理を推し、義を斷する力缺乏すと雖も、恐怖或は喜悅を感ずる力に至りては、平常と異なるなく、時としては平常よりも強きとあり。以て善人は宗教上の喜悅を得、惡人は罪惡上の恐怖を受く。若し未來の存せざるものとせば、この喜悅或は恐怖は、造化が徒に人間に與へたるものとせざるべからざるなり、造化豈に斯の如き徒事をなさんや終りに臨み、一言すべきは、動物もまた來世を悦ぶべきかとの一事なり。夫れ動物は、之につきて一の觀念を有せず、彼等は徳義感を有せず、彼等は未來を期して行ふが如き徳義を有せず。彼等は未來なくして其天性を満足せしめ得るものなり。彼等が死に對するは、人類が死を思ふが如きにあらず、又斯の如きを要せざるなり。或は曰く、諸動物も人類と同一なる諸機關を有す、然るに獨り人類のみ不死

の靈魂を有して、諸動物は之を有せざるは、解する能はざる所なりと。吾人は之に答へて言はん、神の業は多様にして、到底吾人有限の智識にて之を知り盡すと能はず。故に相類似したる如く見ゆるものも、其差異甚だしきとあり。單純なる論法もて何ぞ廣大なる宇宙を説得すべけんや。

九

柳文を讀む

第一

予久しく瀛西の思潮に漂遊して、研究以外には所謂漢籍を手にするに少なかりしが、頃者二壑の犯す所となり、病牀に呻吟する數日、病や、輕うしては無聊に堪えず、乃ち枕頭の柳文を抽いて獨り讀むとするの料とせり。予や年少家庭にありし頃柳子の文を讀みしとありと雖、其後東西に漂泊し、或は北、奥羽の野を経ては青嶺を山岨水涯の間に吊ひ、或は西、伏見鳥羽を過ぎては折戟を寒沙荒草の下に求め、風流の遊、豪飲の快、聊か世の憤々者流と途を異にし、心中の悶々を遣りしも、久しく古文を味ふの閑を得ざりしが、今や端なく病魔は之が良媒となりて柳子の文を讀むを得たり。予に取ては眞に舊友に再會したる感あり。嗚呼この友や、若し人ならば予は直に彼を拉し去て高樓杯を擧げて彼の健康を祝せん。然りと雖是れ文なり、則ち予も亦一氣揮灑この篇となる。讀者のこの文を讀むと否かは予が問ふ所にあらざる也。

柳文全部四十五卷、予はその半を讀了して病既に瘥えたり。予が論の往々全體に渡らざる所あるは之が爲め也。柳子厚は始め童子を以て奇名あり、唐の貞元九年に名進士と爲る、十有九年に材御史と爲り、二十有一年文章八尙書に稱首たるを以て禮部員外郎と爲る、この年疎僑にして檢少きを以て調りを経て邵州に收たり、又謫せられて永州に佐たり、居ること十年詔書徵して用ゐられず、遂に柳州の刺史となる、五歳にして召されて歸ることを得ず。病んで諱中に死す。夫れ柳子の境遇や實に憐む可き者あり。その文に哀傷の音ある豈に之が爲に非ずとせんや。古來天才に不遇多し、彼のチャタートンが「ア、我が心よ、吾は汝をうれり」と叫びて毒を仰ぎて死し、或はキーツが「行く水に名を書き止めたる」と歌ひて、異郷に客死したるが如き、豈に人生の慘事に非ずや。柳子亦斯の如き乎。そのまさに死せんとするや、友の劉禹錫に書を留めて曰く「我不幸卒以謫死以還艱累故人」と。ア、才人の才は遂に此世に用ゐらるゝ所なき乎。世は常に恐人のワイ／＼する所也。俗人のハチカヘル所也。所謂名士のカツガル、所也。ユゴー先生その著「レ、ミゼラブル」の中に曰く、「嗚呼痛恨なるは人間社會の進軍なる哉」と。歴史を閲し、或は世態を觀するに於て、吾輩は往々この種の感慨なき能はず。

文は古來韓柳を稱するとは何人も知る所なり。劉克莊が曰く、柳子厚才高し、他の文惟た韓、墨を對すべし、古律詩の精妙は韓も及ばざる也、當に世を擧て元和體と爲す、韓はなほ諧俗を免れず、而し

て柳子厚獨り能く一家の言を爲せり、豈に豪傑の士に非ず乎と。朱熹曰く、韓が文は議論正しく、規模大なり、然れども柳子厚が較や精密なるに如かず、韓は平易なる所有れば極めて平易、險奇なる所あれば極めて險奇、且つ他潮州に在し時、好く止住し得ること一年ならず、柳子は却て永州の力を得たり、柳が文は議論高古なれども但た醇正ならず、と。蓋し「唐以詩文取士、三百年中、能文者不啻千餘家、專其美者、獨韓柳二人而已」と云ひ、或は「子厚文、不如退之、退之詩、不如子厚」といふが如きは公平明白の意見なりといふ可き乎。

然れども、古來柳子の文を排する者亦少しとせず、彼等は、柳子の文が經旨義理に及べば則ち是非多く聖人に謬ふと云ひ、その然る所謂を問へば、凡そ皆道に根つかざるが故なりと例の腐儒の口吻をツツクリ出すなり。吾人として固より柳子の文を全然賛成するには非ずと雖、一の偏僻固陋なる形式や、頑冥蒙昧なる主義を唯一の秤準として、天馬空を馳るが如き偉大なる天才を輕々しく是非するは、吾人の最も好まざる所也。然り、名手の筆になれる神聖神の畫を見て、鶴の放尿するなりと妄言するが如き先生方の評論と同一筆法の論評は吾人の最も好まざる所也。聊も天才の士は、俗人凡骨の盲從頂禮する。The next の後を追ふ者に非ずして、自ら餘々の烟を胸中に藏し、時に感じ、境に際して The next を作る也。天と地、天才と俗人、その差實に萬里雷ならざるなり。俗人少しく謹慎して可也。俗

人のワイ／＼は天才の爲に少々うるさき者ぞかし。
 柳子の文、實に快筆也。景を叙し、情を舒べ、理を論ずる、皆神に入らざるはなし。殊にその人物を紀志して以て嘲罵を寄せ、或は山水を模寫して、胸中の抑鬱を舒ぶるや、峻潔精奇にして、眞に明珠夜光も管らざる也。是れ實に人をして三嘆せしむる底の文章なり。ア、柳子死すと雖、その文章は千古亡びざらん、柳子地下に安じて可ならん乎。

天才の士と雖、自己の境遇の大に文に發する者あるは、亦止むを得ざる次第なり。柳子の生涯たるや必ずしも飄蕭悲惨の生涯たるには非すと雖、輾轉不遇の一生たるを失はず、之を以て、彼が筆を取りて他の陸沈の生、鬱屈の境を叙するや、筆々聲あるの感なき能はず。左に載する數片の短句を見ても、その一端を窺ふを得べけんか。曰く、

▲邦思其窮、人戴惟父、善胡召災、仁胡羅咎、俾民伊估、而君不壽、燔燔貪凌、乃康乃茂、嗚呼哀哉、廩不餘食、藏無積帛、內厚族姻、外賙賓客、怕是懸懸遠茲易質、儻無凶服墓非舊陌、嗚呼哀哉、

(『唐故衡州刺史東平呂君誄』柳文卷の九)

▲風濕之風乎不可追、有志之大乎今安歸、呂君去我死乎吾誰依、(『呂侍御恭墓誌』柳文卷の十)

▲不嬰々於進取、不施々於驕抗、左絃右壺、樂以自放、雖老而客死、未嘗戚乎己、與夫拳々恐忤蒙諂負義、得之拘々榮不蓋愧、以終其身而不能止者、不猶優乎、(『故秘書郎姜君墓誌』柳文卷の十一)
 ▲嗚呼天乎、太夫人有子不令、而陷于大僇、徒播腐土、醫惡藥膳之不具、以速天禍、非天降之酷、將不幸而有惡子以及是也、又今無適主以葬、天地有窮、此冤無窮、(『先太夫河東縣大君歸附誌』柳文卷の十三)

▲窶窮微人多疾殃、炎暑熇蒸其下卑濕、非所以養也、診視無所問、藥石無所求、終嗣無所資、蒼黃叫呼、遂遭大罰、天乎神乎其忍是乎、而獨生者誰也、爲禍爲逆又頑狠而不得死、逾月逾時以至于今、靈車遠去而身獨止、玄堂暫開而目不見、孤囚窮繁臆逝心壞、蒼天蒼天、有如是邪、有如是邪、而猶言猶食者何如人邪、已矣已矣、窮天下之聲、無以舒其哀矣、盡天下之辭、無以傳其酷矣、刻之堅石、措之幽陰、終天而止矣、(同上、同文)

▲嗚呼痛哉、以夫人之柔順淑茂、宜延于上壽、端明惠君、宜齒于貴位、生知孝愛之本、宜承于餘慶、是三者皆虛其應、天可問乎、(『亡妻弘農楊氏誌』柳文卷十三)

斯の如きの句、實に枚擧に暇あらざる也。聊か天を怨むが如きの失なしとせずと雖、その境と、その人を見、而してこの文を讀まば、作者の心中亦察す可き而已。

柳子が従父弟宗直の事を記するうちに「讀書不廢、蚤夜以專、故得上氣氣膈服奔逆、每作害寢食難俯仰、時少間又執業以興呻痛咏言雜莫能知」と云へる一句なり。予は此の如く甚だしきには非すと雖、近年多少腦を痛め、往々病臥するの止むを得ざるとあり。思想を構ふるは身を害すると大なり。學術豈に容易の業ならんや。彼の俗惡なる人間等を見よ、彼等は飲食の慾と、男女の情との外に何事も爲さざる也。一足を擧げて放尿せざる所、唯だ人間の態を保つのみ。彼等は單なる消化管なり、往々糞尿の臭氣ある議論を爲して顧みざる亦宜なる哉。然りと雖、人生字を知るは愁の始めなり、吾人は江海の漁夫として生れざりしを嘆ずるもの數次、今この文を讀みて、感嘆轉々深厚なる者あり。

第二

柳子人の爲に墓誌碑銘を作ると少なからず。いづれも金玉の文字なるが、就中予は「岳州聖安寺無姓和尚碑」を讀みて大に感ずる所あり。文の始めに曰く、

「維某年月日、岳州大和尚終于聖安寺、凡爲僧若干年、若干年有名無姓、世莫知其闔里宗族、所設施者有問焉、而以告曰、性吾性也、其原無初其胃無終、承于釋師以系道本、吾無妊邪、法嗣云者我名也、實且無有名惡乎存、吾有名邪、性海吾鄉也、法界吾宇也、戒爲之類、惠爲之戶、以守則固、以

居則安、吾闔里不具乎、度門道品、其數無極、菩薩大士、其衆無涯、吾與之戚而不吾異也、吾宗族不大乎、其道可聞者如此而止、」(柳文卷の六)

大。和。尚。の。理。想。何。ぞ。夫。れ。高。妙。な。る。や、法。の。爲。め。に。身。を。獻。ぐ。る。者。常。に。こ。の。種。の。覺。悟。な。か。る。可。ら。ざ。る。也。我。が。教。會。に。於。て。も、修。士。が。敢。て。俗。名。を。稱。へ。ざ。る。は、心。身。を。神。と。教。會。と。に。獻。じ。た。る。を。以。て。の。故。な。り。か。の。俗。惡。に。し。て。野。卑。な。る。人。間。に。對。し。て。は、吾。人。斯。の。如。き。高。尚。美。妙。な。る。理。想。を。望。む。の。難。き。と。を。知。る。吾。人。世。に。彼。等。に。之。を。望。ま。ん。や。たゞ吾。人。を。し。て。彼。等。が。如。何。ば。か。り。俗。惡、野。卑、狡。猾、鐵。面。に。し。て、且。つ。馬。鹿。く。しく、ヅ。ウ。く。し。き。か。を。一。言。せ。し。め。よ。若。し。こ。の。言。に。し。て。多。少。彼。等。の。心(敢。て。良。心。と。は。云。は。ず)に。刺。激。を。與。ふ。る。と。も。あ。ら。ば、そ。は。望。外。の。幸。運。の。み。

俗人とは理想の峴なり。動物に近き人間なり。一切の行爲の動機を物質上の利益に置くにあり。高妙の理想は、彼等の爲には眞に他界の事なり。相關與せざる也。否々却て之を敵視する也、そはその現實の利益と相反するが爲に、或はその現實の利益が之が爲に減少せんとを恐るゝが爲に。要するに彼等は至りてケチな人間なり。

彼等がそのケチな根性は、種々の云爲言動に顯はるゝ也。諸方面に發露する也、猶糞尿の臭氣の四散するを防止するとは孔子と雖能はざるが如し。吾人は今その一方面に就て聊か語らんと欲する也。そは

他なし、爵位、黄金の事これ也。

俗人は黄金を唯一の目的として生活する屬也。俗人は爵位を無上に尊敬する類也。理想、人道、主義は彼等の爲には空吹く風の如し。侯爵、伯爵、子爵、男爵、隨分ウルサキ名稱ながらこれ彼等の爲には六字の唱名よりも、法華大鼓のボン／＼よりも有難く聞ゆるは亦世界七不思議の一に數へて可ならん乎。子爵、男爵などいへば、シヤクのうちにて安値なる者にして、猶ほ汽車にていへば第三等といふが如きにも抱らず、依然として崇拜者の絶えざるは、浮世の事は眞に哲理以外にありといひつべし。華族は自ら稱して云ふ我は皇室の藩屏なりと。然り、華族は皇室の藩屏なるに相違なかるべし、然れども所謂平民も亦皇室の至て固き藩屏に非ずや。誰か平民を皇室の藩屏に非ずといふ乎。吾人は華族も平民も共に皇室の藩屏なることを信ず、二者に於ては大した差なきを信する者なり。爵位は名稱に過ぎず。其實に於て藩屏たれば、共に同じく藩屏たるのみ。一を重じ、一を輕んするが如きとある可らず。平民はその實に於て大に貴きものあり。平民といふ名稱を耻づるが如きは、俗見の甚だしきものなり。不心得の至りなり。自己の勞働によりて身を支へ人を益す、豈に好個の市民に非ずや。然るに勞働の神聖なる所以を知らず、却て之を耻となして、早く遊食の徒とならんと欲し、或は虚名を得んと欲してモガクが如きは、豈に沙汰の限りに非ずや。

平民に要する所は、義務の人たるにあり、主義の人たるにあり。勞働の人たるにあり。この三者をよくせば、他に要する所なし、金泊彼等に何の要あらんや。虚名彼等に何の要あらんや。爵位彼等に何の要あらんや。平民の理想は、飽くまで平民の理想なり、爵位を以て之に代人可からざる也。

世には亦自己の家柄や僅小の財産を鼻にかける陋劣野卑なる人間あり。是又多くは徒食の徒にして、その生命は國家のためにも、人道の爲にも、公益の爲にも何の益する所なく、醉生夢死の一生を送るのみ、しかも自らは傲然として、そのミスボラシキ家柄や、僅小の財産を鼻にかけ敢て自ら高しとするが如きは、吾人の嘲笑を禁する能はざる所以也。

見よ、無姓和尙の理想何ぞそれ高きや、彼は、自らその閭里宗族を人に告げず、曰く、姓は吾が姓なり、又曰く。法劍といふは吾が名なり、又曰く。性海は吾が郷なり、法界は吾が字なりと。俗世の塵埃に染まず、光明の天界を心境に寓する和尙の言、實に金鐵の響あり。昔者、ハムボルトといふ學者、ホリヨークの山頂に筆を執りて記して曰く、生をドイツに受けたる世界の公民アレキサンドル、フホン、ハムボルトと。二者實に歸を一にす。人と生れては、その理想斯の如く高からざるべからざる也、區々たる人爵を羨望するは、俗人の俗情耳。

柳子のものしたる文に『河間傳』なる一篇あり、その記する所は一淫婦のことにして取るに足らざれども、文に致あり、貞淫を摹寫する兩截灼々として視るが如し。その文の意は、士のその守を終へざるを戒めたる也。然れども吾人はこの文を讀みて他に聯想する所なき能はず、他なし當今の婦人殊に所謂女學生なる者の腐敗、墮落、偽善、狹隘なるの一事これなり。吾人が聯想の要は、彼等のうちの或者も亦河間の如しといふにある也。

柳子記して曰く、

『河間淫婦人也、不欲言其姓、故以邑稱、始婦人居戚里有賢操、自未嫁固已惡群戚之亂荒、羞與爲類、獨深居爲翦製縷結、既嫁不及其舅、獨養姑謹甚、未嘗言門外事、又禮敬夫、賓友之、相與爲肺腑者、』

(柳文外集卷の二)

然り河間は實に甚だしき淫婦人なれども、始めより然かく惡しかりしに非ず、始めは世の常の婦人の如く至りてしほらしかりし女なり、蟲も殺さぬ女なりき。然るにこの女は後に遂にその夫を殺すに至りたり、人心の變化真に付る可からざる也。

當今の女學生のうちにも、亦河間の如きもの少なからざるべき乎。然り、その數至りて大ならん。然れども彼等にて始めより淫亂なるに非ず。始めよりハチカヘリに非る也。蝦茶袴を胸高に穿ちて、山

海の厚恩を蒙りし父母の膝下を辭し、落日蒼茫たる所、住みなれし郷關を後にしたる時や、彼等は實に可憐潔白の少女なりしならん。然り、身も心も清淨にして、希望の光は彼等の周圍に輝き、胸中の琴線は美妙の高音を奏せしならん。此時に當りて誰か將來の黒闇々たる墮落を夢まんにや。淫夫と相提へて走るの醜を想はんや。

河間はその始め斯の如く貞順なる女なりき。然るに一朝人の誘ふ所となるも、なほその徳を固持して曰く、『聞婦之道、以貞順靜專爲禮、若夫於車服釵首飾、族出謹闈、以飲食觀遊、非婦人宜也。』是れ實によき心がけ也、然るに河間は遂にその貞操を固持すると能はざりき。彼女は遂に密夫を有するに至れり。しかもその密夫の己の意に適するや、その夫を薄遇するのみならず、計て之を殺し、己の淫欲を逞ふするに至れり。柳子記して曰く、

『……河間大喜不爲服、開門召所與淫者、保遂爲荒淫、居一歲所淫者衰、益厭乃出之、召長安無賴男子、晨夜交於門、猶不慊、又爲酒壚西南隅、已居樓上微觀之、擊小門以女侍餌焉、凡來飲酒大鼻者、少且壯者、美顏色者、善爲酒戲者、皆上與合、且合且窺、恐失一男子也、猶日呻呼惜々以爲不足、積十餘年、病髓竭而死、自是雖戚里邪行者、聞河間之名、則掩鼻蹙額皆不欲道也。』(柳文外集卷の二)

斯の如きは淫行の甚だしきものにして、今や河間は既に尋常一様の婦人に非ずして純然たる色情狂なり吾人は當今の女學生中のある者が、この河間と同じき行ありと更々思はぬ也。されど滔々たる腐敗女學生中河間に類似する行ひを爲す者少なからざるは争ふ可らざる事實なるを奈何せんや。しかも彼等の偽善なるや。口には中々正義を唱へ、貞操を呼びものとし、貞操は死を以て之を守ると公言し、その言の未だ耳朶を去らざるうちに、早くも操を二三にし、又四五にし、ひたすら肉情の娛樂に耽り曖下宿屋の二階に多数のノラ息子を集め、カルタにラブにスキートエンブレサてはスキートハートの紛紜となり、髓端を病むといふにもあるまじけれど、或は病氣となり、借金となり、果ては田舎或は故郷に逃げ去り、遂に看護婦や産婆や小學校女教員などの連中に流れこみ、昔ゆかしき蝦茶式部となり、少時は眞面目にやれど、いつしか村の太郎作の息木助の甥などと私通し、再び三度浮名を流すが如きは、嗚呼何たる墮落不品行ぞや、たのみ難きは當今の墮落女學生なる哉。哀む可きは彼等の運命なる哉。

嗚呼斯の如き女學生、之を筆にするも嘔吐を催すの感あり、而も彼等の鐵面皮なるや、往々男子の罪を鳴らして、男子はその野心のために處女の運命を弄すとか、良心に恥づる行爲を敢てすとか勝手の議論を爲すことあり。處女、良心、貞操、この語の眞意義を彼等は解するを得る乎。勿論吾と雖この

如き男子なしといふにはあらざるも、彼等が自己の不品行、腐敗墮落を顧みず、ガタになき道德論を爲すは、是れ却て榮犬吠堯の痴態のみ。ア、嫌ふ可く、あはれむ可く、悲む可きは腐敗女學生なる哉。

十

施約瑟師の新清譯聖書に就て

前駐清國上海の主教施約瑟師(The Rt Rev. J. I. S. Schereschewsky D. D. S. F. D.)は多年、ハリストス教の新舊約聖書の支那譯に従事せられしが、今を去る數年前印刷發刊の爲めに我日本に來られ、今やその業終りて師が新清譯の聖書は今回出版せられたり。我が尊貴なるニコライ主教閣下も、主教セレフスキー師とは多年の交誼あり、刊行の事終るや、新に釘装せられたる美麗なる一本を閣下の許に送呈せられたり。予はわが主教閣下の書齋に於てその書を見るを得たり、未だ熟讀の榮を得ずと雖、その尤大なる書冊に接しては、セレフスキー師の多年の勞苦を深察せずんば非るなり。抑も聖書翻譯の業たる至難の事にして又至必の事なり。真に其人に非ずんばその業に當る可らず。我が主教閣下も聖書の翻譯を以て師が一方面の終生の事業と爲され、既に新約は業終りて世に刊行せられしは讀者諸君も知らるゝ所なるが、閣下は主神の特恩によりてその天壽を全うし、新舊全部の翻譯を完成せらるゝの日あるは、吾人三萬有餘の全國信者の確信する所也。期待する所也。切望する所也。

わが主教閣下の精力の偉大にして勤勉の無比なる、而も聖書翻譯には多年を要する者あり、以てその事業の重大にして困難なるを察す可き也。師は多年聖典の翻譯に従事して、備にその勞苦を嘗められしを以て、今回セレフスキー師の出版に對して同情の心を寄せらるゝ者頗ぶる多く、聖書授星の翌日閣下は親しくセレフスキー師をその旅館に訪ねられたり。共に絶東の異邦にありて、其國人に光明を與ふるを以て畢世の使命とせる二師が會談の如何なりしやは、不幸隨行の榮を得ざりしを以て、今之を知るを得ずと雖、その境同じきを以て、その談大に聞く可き者ありしや必せり。

セレフスキー師の清譯聖書は、予未だ之を熟讀せざるを以て之に評言を加ふると能はず、否、評者は予の外に別に之ある可ければ也。予は漢文を讀み得ると雖、清國のヌボータン、ランゲージを知らず、未だ此書をよく解するといふ可らざる也。加ふるにユウレイ或はグレナヤの古語に通せざる者に取りては、之を評論すると實に至難なり。故に予は今敢て之に予の管見に關する評言は加へざる也。若し彼の所謂漢學者一流の如く、やうく漢文の意義を彷彿するに過ぎずして、古語にも通せず、近世の歐洲語をも知らず、古めかしき字典を唯一の盾として、或は用字の適不適や、文脈の如何を是非するが如きは、螳螂の斧を擧げて龍車に向ふが如き痴態にして、唯一笑に附す可き耳。或は英、佛、獨、露等の内、僅に一語を解して、それを唯一の秤準とし、他人の翻譯を評論するが如き學者先生たちも又是れ鼻擧み

のみ。蓋し聖經の翻譯は、譯者の一大心勞にして、局外者の知る可らざる困難と勞苦とあり。其業を評するよろしく慎重の態度を取らざる可らず、輕卒にして妄想多き評言は之なきに若かざる可し。吾人は今本書に對して敢て評言を加へず、然れどもセレンスキ師が本書を譯するに際して如何に注意を傾注して、支那に於ける事情或は言語に就て切實なる觀察を下し、以て適當の譯字を採ひたるかの二三の例を師の自言に徴して之を明にすることを得べし。以下に譯する數節は、即ち師の自らいふ所なりとす。曰く、

「宗教上或は專用語に就ては、予は多少の變化を加へたり。diabolos, daimon, 或は daimonion など云へる原語に對しては掌院グリー師が福音書の譯に従ひ、魔なる字を用ひたり。英語に於ては單に devil なる語を使用すれども、是はグレンチャ語の四種の語に同様なる譯字を施したる者なり。予は一般に行はるゝ鬼なる字の使用を避けたり。これ幽靈或は死者の靈魂を示す者にして、daimon と同格には非るなり。『altar』には予は祭壇の字を附し、壇を用ひざりき。是れは必ずしも言語上通不遇より云ふに非ず、然れども壇なる語は異教徒の常に使用する語なり、斯の如きは出來得る限り避けざる可らず。

「Temple」に對しては、この語が單に聖所のみを示す時には殿の字を使用したり、然れどもこの語が前廊、諸室、會堂等其他一切の場所を含有して建物全體を示す場合には、予は堂或は聖堂と爲したり、是れ又掌院グリー師の例に倣ふものなり。殿なる語は單なる建物に對して用ひ、堂の字には種々の建物と含ましめ得るとは諸子も知る所の如し、予は實は堂の字を好まずと雖、この字が殿よりも尙適當なるを以て是又止むを得ざるのみ。

「grammateus, scribe」を予は經士と譯し、士子とは爲さず、如何となれば、scribe なる語が新約聖書に於て用ひらるゝ時には、後者よりも前者はよくその觀念を表明すればなり。蓋し scribe なる語は、單に文字の人を示すのみに非ずして、聖書を學得したる者、殊にモイセイの律法に通して、その傳統的注釋の保護者を表明する語なればなり。

「予は Gehenna を單に音譯したるのみ、佛教徒の稱する地獄なる詞は使用せず、唯之を分注として附せしのみ。予はまた Paradise なる語も支那には適當なる同格の字なきを以て等しく音譯したり、其他貨幣、尺寸、容積等に關する名詞は何れも音譯して、皆分注に於て比較を示し置きたり。」

以上の如きは、僅か二三の例にすぎざれども、師が心を用ひたるに至りて周到なるを證するに足るべし。その國語に同格の語なき時に之を音譯するが如きは、予の最も贊成する所なり。昔者佛教經典を支那に譯するや五種の不翻の如き規則もありたりき。我が國語の如きは、支那より傳來したる漢語を除けば、其語至りて僅少なり、之を以て何者を譯するにも多く漢語を使用せざるを得ずと雖、その漢語にし

て唯支那の古典に散在する者にして日常世人の耳には至りて縁遠き者や或は適當の語なくして強いて漢字を接合して新譯字を作るが如きは、その勢は多とすべきに似たれども、其效はさして大ならざる也。例へば哲學上の用語にても、或は category を範疇と譯し、或は absolute を絶待と翻するは今日一般に行はるゝ所にして、前者は「書經」(一)より、後者は「法華經」より取りたるなる可けれども、その文字を譯せし當時には、範疇、或は絶待なる語を見て誰か真にそのカテゴリーたり、アブソリュートたるを思はんや、是等は皆範疇のカテゴリーたり、絶待のアブソリュートたるの解釋を得て始めて解すべき耳。然らば則ち寧ろ一步をすゝめてその原語をそのまま使用するゝ若かさるなり。思ふに斯に如きは今日既に識者の相一致す可き所なる乎。昔者ゼスイット徒の我國に傳道するや、種々の宗教上の譯語を作りたるが、今日吾人の一見して噴飯に堪えざる者少しとせず、その二三を擧ぐれば、神父の事をデウス如來としたるが如き、「ヘンピム」を天狗としたるが如き是なり。今日斯の如き譯語を見れば、寧ろ滑稽に感ずる也、然れども當時は至りて眞面目なりしを思はずんば非ず、然るに音譯の者は、今日と雖なほ用ゐることを得るなり。即ち「イルマン」「パタレン」の如き是より。筆を執りて翻譯に従事する者、この間の消息を解せずんば遂に今人の古人を笑ふが如く、後人の笑を免かれざる可乎之を佛典の支那譯に於て見よ、若し佛典に於ける音譯を一切除去したらんには果して如何ぞや。佛典

に於ける音譯は、その語の意味を害せざるのみならず。支那の國語を豊富ならしめたり。以上の言は、予が此の文を記述するに際し、因に云ふ者なり、讀者幸に之を恕せよ。

書して茲に至れる時、會々横濱刊行の「ジャパン、ディーラー、メーメル」に接す、開いて之を讀むに「The Bible in chinese」なる一報あり、是れセレセフスキー師の支那譯聖書に關する記事にして、有益なる報道なり。乃ちその大半を譯載して讀者の一覽に供す。メーメルに曰く、

「主教セレセフスキーは今やその大業たる聖書の翻譯を終りたり。是れ疑ひもなく、支那譯聖書の完璧といふべし。昔者、ロマ、カトリカの宣教師等新約聖書の大部分を支那語に譯し、たゞ之を世に刊行せざりしとはいへ、新約集會の時に用ゐる爲に印行したる新約書の中に書札及び福音の大部分を挿入して之れを使用したり。十九世紀の始めに當りて、ドクトル、モリソンがロンドン傳道會社の命を受けて、支那に赴任せんとするや、支那語學の助けとなる書は、唯だ或る宣教師が譯したる福音書及びパウリンの書札の列記書と、ラテン支那對譯字典との二に過ぎざりき。而して前者は英國博物館に於て、後者は國立亞細亞協會に於て發見せられたる者なりき。斯くてモリソン博士は支那に留ると僅々三ヶ年にして使徒行傳の支那譯を公刊し、之に次ぎ二年を経てルカの福音書を、次に更に二年を経て千百十四年の始に當りて新約全部の支那譯を刊行したり。今より之を見れば、僅

々七ヶ年の間に支那語を學得し、其語を以て聖書の翻譯を行ふが如きは稍や無謀の行爲の如しと雖、前世紀の始めに當りては敬虔熱心なる人々ありて、比較的短時期に斯の如き大業を爲したる者少なからざりし。而してモリソン及びミン(Mission)の兩氏が其後一千八百十八年の終に支那公衆の前に聖書全部を供したる時には、彼の一千八百十四年に公にしたる新約聖書は、彼等が必要に迫られて支那國語の智識が進歩せし結果として以前公刊したる書に對して大なる變改を施せり。然れども始めてプロテスタントの宣教師に任せられたる Livingstone は此書も若し書札の一部分を取出して、原書と對照して字句をたゞらば、甚だ不適當の者ありて、之に説明的注釋の附せられずは、大に奇なる者あるよしを語りたるを Medhurst も證言せり。さて吾人は主教セレセフスキーが幾年の間この大事業に従事せしかを知らずと雖、世説の傳ふる所によれば、凡そ二十年間を要せしと云ふ、しかも師はこの間全くの跛者にして、直立すると能はざるのみならず、一室より他室に移つるにも他人の助けなくしては能はざりしといふ。されば師の不幸の生涯にありては、聖書翻譯の聖業の如きは唯一の慰藉なりしなるべき乎、斯くて師の聖書は、この稀れなる傳記によりて世にせられて世に提供せられたりしなり。」

是れその所載の大半なり、而してメーネル記者はその文の結尾に於て曰く、

「セレセフスキー師の翻譯はエウレイ及びグレチヤ語より爲されたる者にして、この書は疑ひもななく後世幾代の子孫に基礎の業として殘されたる者なり、その完成は當に師自身の爲にのみならず、米國エビスコパル教會の爲めにも、一般基督教信者の爲にも大に祝賀す可き業なり。因に云はんには本書は活字も大きく且つ明瞭にして、欄外には見出しをも附し印刷釘裝共に十分の上出来なり。」

と。吾人は今セレセフスキー師の新譯より數節を抜萃して、從來の舊約と對照して茲に掲げ、その文體の一斑を諸君に知らしむるも無益に非ずと信す。予は新約中よりその例を擧げて示さんとす。

▲舊譯

「爾聞古者有言、勿殺、凡殺者、必于於審判、然我語爾、凡無故怒其兄弟者、必于於審判、凡言其兄弟曰愚拙者、必于於公會、凡言其兄弟曰狂妄者、必于於地獄之火、故爾若携禮物於壇、在彼憶爾兄弟與爾有隙、則留爾禮物於壇前、而往先與兄弟相和、然後來獻爾禮物、誣爾者猶借爾於途間、急宜與之和、恐訟爾者付爾於士師、士師付爾於獄、而爾見投於獄、我誠告爾、爾毫釐未償、斷不得出彼也。」(馬太福音第五の二二より二六迄)

▲施約瑟師の新譯

「爾聞有諺古人之言曰、勿殺人、殺人者、當被審判、惟我告爾、無故而怨兄弟者、當被審判、言兄

弟爲鄙夫者、當解於公堂、言兄弟爲愚妄者、當擲於革狼拿之火、是以爾若獻禮物於祭臺、在彼爾健獲罪爾兄弟、則留禮物於臺前、先往與兄弟復和、然後可來獻爾禮物、有訟爾者、猶借爾於途間、亟當與之脩和、恐其解爾於刑官、刑官付爾於吏、而投於獄、我誠告爾、毫釐未償、斷不能出彼也、(同上)

此の一節や僅々數句に過ぎずと雖、新舊兩譯の大差あることを見るを得べし。セレセフスキー師の編譯が文に力ありて、至りて適切の譯なるとはいふ迄もなきながら、今兩譯の差を一目瞭然たらしむるが爲に、譯字の差異を左に列記すべし。

▲舊譯

- (1) 勿 殺
- (2) 凡 殺者
- (3) 然我語爾
- (4) 怒其兄弟者
- (5) 愚 拙
- (6) 公 會
- (7) 狂 妄

▲新譯

- (1) 勿殺人
- (2) 殺人者
- (3) 惟我告爾
- (4) 怨兄弟者
- (5) 鄙 夫(後文參看)
- (6) 公 堂
- (7) 愚 妄(後文參看)

- (8) 地 獄
- (9) 壇
- (10) 士 師
- (11) 隸

- (8) 革 狼 拿(前文及後文參看)
- (9) 祭 臺(前文參看)
- (10) 刑 官
- (11) 吏

予は今敢てこの新舊兩譯に對して批評を下す者に非ずと雖、なほ所載一二をいはば、第五の舊譯に愚拙とあるを新譯には鄙夫と改譯せり、思ふに是れ更に適當なり。何となれば、これはグレチヤの原書には RACA とありて、英、佛、獨、露等歐洲諸國の聖書にもその語をそのまゝ音譯せり。抑も「ラカー」なる語は、原とシリヤ語にして、始めてこの福音が「アラメヤ」語(Aramaic)にて書されし時に、福音の讀者にはこの語を了解するを得しなり。後直にグレチヤ語に翻譯せらるゝや、譯者もこの語を依然として保存せり、これこの語はグレチヤ語の讀者にも解せられしのみならず、グレチヤ語に適切の譯字なかりしを以て原語のまゝ移したる者なり。歐洲諸國の聖書が原譯そのまゝ「ラカー」を使用するの歴史は即ち是れなり。露譯聖書にはこの語を脚注には「フストイ、チエロウエーク」とあり、支那に譯するには、愚拙とするよりも、鄙夫とする方を更によしとす。次に第七の舊譯に狂妄とあるを新譯には愚妄とせり。こはグレチヤの原書には「Mops」とありて、英語にては「Ahoon Fool」の意

なり乃ち狂妄よりも愚妄の方をよしとす。第八の舊譯には地獄とあるを新譯にはセレフスキー師の主義の如く、之を華狼傘と音譯せり。而して分注に「卽生前作惡者死後受刑處有譯地獄下同」と記せり。第九の墳と祭臺とにつきては讀者よろしく前文の師の自言を參考せらるべし。

吾人は其他につきては多少言はんを欲する所なきにしも非ず、固とこの文は師の書の本誌の讀者諸君に紹介するにありて、予の批評を公にするの意にあらざるを以て、今は之にて筆を擱くべし。唯一言せんと欲するとは、「神」に對する師の譯字なり、師は之を「天主」と譯せり、思ふに神の字は普通異教の所謂神をも稱するを以て、師は之を使用するを避けられたるべきか。且つ他に於て從來の譯には「靈」とありたる語を「神」と改めたるを以て同字の「神」を天主に對しては用ゐざりしならん。善良なる用法なり。我が正教會譯には兩者共に神の字を用ゐ、而して後者には小圓點○を文字の一方に附して之を區別せり。是れ中井木苑磨先生の發案に依る、亦便利なる方法たるを失はず。

予少年の時、深く佛典に耽りしが、唐の釋道宣が「高僧傳」を讀み、彼の玄奘法師が、孤身印度に入りて經を求め、經を譯するの偉業を思ひては、私かにその人を敬慕せざるを得ざりき。玄奘法師の翻譯する所の佛典は、凡そ七十三部、一千三百三十卷なりき。若し夫れ彼が故國を出發して、

「徑往姑臧、漸至燉煌、路由天塞、囊羸弔影、前望悠然、但見平沙、絕無人徑、廻遶委命任羣前、展轉因循、達高昌境、高昌王遣鄯耶相迎、殊禮厚供、給從騎六十人、送至突厥葉護牙所、自高昌至於鐵門、凡經百十六國、南出斯門、地名都貨羅也、又前經國凡十三、至縛喝國、號爲小王舍羅、又東南行大雪山中亡百餘里、至梵衍國、每遭靈勝、躬事頂戴又東山行、至迦畢試國、又東七百里、至濫波國、即印度之北境矣、」

とあるを讀みては、その壯志と辛酸とを想はずんは非ず、前み望めば悠然として但た平沙を見、絶て入徑なき所、獨り杖を曳いては、誰かその心悲しまざる、たゞ慈悲圓滿なる佛陀の須彌なす功徳を心念に獻し、全身は信仰の活火にもゆるを以て、千辛萬苦に打勞ちし者ならざる可らず。

今や世界は開明し、東西交通の便、昔日の比に非ず、世界の一端端より他の極端に達する決して至難のものには非ず。然れども東西言語を異にし、「イヂナム」に差あるに、身を翻譯の聖業に獻け、個人にしてハリストス教の經典全部を譯したるは、實にその意志の堅固と功果の大なるに、吾人深く敬慕の情を注がざるを得ず。予は謹て茲に主教セレフスキー師の新清譯聖書を讀者諸君に紹介するの名譽を有する者なり。

十一

舊新約聖書と徳義

吾人若し舊新約聖書を通覽する時は、其の中に含有せらるゝ神の攝理及び徳義上のとに種々の差別あるを見るべし。即ち神の攝理に三の異なる時代あるを知るなり。第一は外部に特別の成法あるとなく、神の意旨は、直接に或は自然以上の者即ち天使の如き者によりて人々に傳へられたり。第二は、神が偉大なるモイセイに依りて、その律法を人民に告げたる時代なり、而してこの律法は、普く天下の人民の徳義に非ずして、撰民即ちエウレイ人の法律なりしなり。第三は、主耶蘇基督及びその聖使徒が天下に廣布したる救訓なり。是れ最も完全圓滿なる徳義の理想にして、天下の全人類が奉せざるべからざる者なり。

舊新約聖書の中には、共に神の意志(即ち徳義)を記述しあると疑ふべからず。而してこの二書が徳義として要求する所に二者相合はざる者あるは、是れ亦疑ふべからざるなり。然らば則ち前者は初歩の則にして、後者は吾人に必要なる徳義なると明なり。此二者の相異なる點を示さんが爲に、舊新の

二書より章句を引用するは、至りて容易なる事なるが、斯ることを爲さずとも、基督教が常に宣言する所に徴すれば、この教が舊約時代の律法と相異なると、炳焉として火を見るが如きのみ。

然れどもエウレイ人の律法と基督教の所説と相契合せざる一例として、愛の法律のところに於て述ぶべし。基督教は、愛の律法の應用を懸曠して、モイセイが許容せし所をも慎戒すべきことを命するなり。

即ち『近者』に對する義務に就きて言は、サマリヤ人の比喻は、明に之を示せり。(ルカ傳十章三十一節) 又山上の説教中にも之を明示す。曰く、『爾の隣を愛し其敵を憐むべし』と言へるとあるは、爾曹が聞きし所なり。

然れど我爾曹に告げん、爾曹の敵を愛し云々(マタイ傳五章四十三節)の「敵を憐むべし」と云へるとは、舊約時代に於ては、特に強ひらるゝとありたるなり。曰く、『アンモン人及びモアブ人は耶和華の會に入る可らず、彼等は十代までは何時までも耶和華の會に入るべからざるなり。是汝等が埃及より出て來りし時、彼等は、パンと水とを以て汝等を途に迎へず、メンポタミアのベトル人ベオルの子パラムを情ひて、汝を誑はせんと爲したればなり。(中略)汝一生いつまでも、彼等の爲に、平安をも又福祿をも求むべからず。』(申命記第二十三節)是れ基督が「爾の敵を愛せよ」と云ひ、「爾を惡む者に善を爲せ」又「人爾の右の頬を批たば又他の頬をも轉らして之に向けよ。』(マタイ傳五章三十九節)と云へる言と契合せざる者なり。『汝を知らざる國人と、汝の名を顧ばざる族とに汝の怒を樹きたまへ、彼等はイアコフを噬ひ、之をくら

を知らざる國人と、汝の名を顧ばざる族とに汝の怒を樹きたまへ、彼等はイアコフを噬ひ、之をくら

ひて滅し、其牧場を荒したればなり。』(エペソ書二章廿五節)と云へるは、主基督が之と同じ地位にありし時、其徒弟が、天より火を召ひ降して彼等を滅さんとする、可かと問ねしに答へたまひたる言と相契合せざるなり。(ルカ傳九章五節)『耶和華、之を顧み、之を問ひ討したまへ』(撒代志下廿二節)と云へるは、『主よ、此の罪を彼等に負はしむる勿れ。』(使徒行傳七章の六十節)と云へると相契合せざるなり。『我をして爾が彼等に仇を返すを見しめよ。』(エペソ書二章十二節)又『禍の日を彼等に來たらしめ滅亡を倍して之を滅し玉へ。』(同上十七章)と云へるは、『彼等を救し玉へ、其爲す所を知らざるが故なり。』(ルカ傳二十三章の三十四節)と云へると相契合せざるなり。同一なる觀察は、贅言、多妻、返報、及び姦淫、殺傷等の動機に關して施すを得るなり。而して舊約の律法と基督教の所説と相契合せざるを、新約記者は左の如く録せり。曰く、『それ律法は何事をも全うせし所なし、是故に前の法度はその在弱と益なきを以て廢せられ、更に愈れる善望を以て立てられたり。我儕この望に因りて、神に近づくことを得るなり。』(希伯來書七章の十八十九節)と。即ち法律は、不完全なるものにして、基督教の所説は、更に之より勝れる者たるや、言を俟たざる所なり。

斯の如く、舊約時代の徳義よりも、新約時代の徳義は進歩發達せし者なるが、茲に尙注意すべき一事は、神に對する觀念の相異なることなり。舊約時代に於ては、神はエウレイ人のみの神なるが如くに思ひ來りたるが、新約時代に於ては、主基督は、神は天下萬民の父なることを教へ、又その父の愛を發願して、萬民の救贖の爲に十字架上に死したり。是れ神が最後の所置として吾人に爲し玉ひたる仁慈なる大業にして、吾人は之に依りて神に接近し、彼を伏拜せずば、又如何なる方法もあるべからざるなり。

吾人基督教徒は、舊約時代の律法よりも、新約時代の愛の教訓の大に勝れる者あるを知ると雖、舊約の律法に由りて身を處せんとすると、往々是あるに非ずや。然らば、如何なる時に然かするかと云ふに、多くは自己の利害、或は自己の侮辱せられたる時に於て、舊約の律法を應用せんとするなり。基督教の徳義たるや、圓滿高尚なる理想にして、有徳の人と雖、完全に之が實行を期すると能はざるなり。されば、徳なく、識なき普通の人に於ては、利害の自己に關するとあるや、基督の教訓を忘れ、直進盲動して、利を自己に收め、害を人に蒙らすも顧みざるなり、この場合に於ては、彼は聊かも隣を愛せざるなり。況んやその敵を愛することをや。又人の自己に侮辱を加ふるとあるや、永く之を胸中に蓄へて忘れず、時期あるに際し、之を倍して返さんとする。この場合に於ては、彼は『主よ此の罪を彼等に負はしむる勿れ』と云へるが如き雅量なく、『爾が彼等に仇を返すを見しりよ』と云ふ鄙陋なる心となるなり。『彼等を救し玉へ、その爲す所を知らざるが故なり』といへる憫懷なく、『禍の日を彼等に來らしめ、滅亡を倍して之を滅し玉へ』といふ兇惡なる意志を有するに至るなり。斯の如きは人事

の常にして、吾人卑徳の人の免がる、能はざる所なり。嗚呼吾人は、身基督の教訓を聞き得る時代に生れたりと雖、心は未だ舊約時代を脱せざる者といふべし。

因に茲に一言せんに世には必要なことを疑問として喜べる人あり。彼等は常に無用の議論を爲して得々たる愚物なり。此舊新徳義の差異に就きても、彼等は一の疑義を掀起して曰く、若し神は完全なる者にして、又聖書は神の意志を記しある者とせば、何が故に徳義の要求古今その規を一にせざるか、何が故に「無限智識」(神の心を然るが云ふ也)は、一方に於て要求したる所を他方に於て亦要求せざるかと。吾人は之に答ふるに「吾人之を知らず」の一語を以てするの至りて輕便なるを知る也。是の答辭に接して、彼等は何事を言はんと欲するか。彼等は此如き疑問は、以て神の法を破るに足れりと思ふ乎。果して然りとせば、其愚實に及ぶ可らざるなり。吾人若し此理由を知らざるが故に、神の法の權能を疑ふ可しとせば、此種の疑問は續出して、際限なかるべし。曰く、無限に純潔なる「存在者」にして、何か故に世に惡の存するを容したる乎。曰く、全く仁慈なる「彼」が、何故に肉體上の苦痛の存するを容したる乎。曰く、何故に「彼」は元祖を罪に落したる乎。曰く、何故に「彼」は元祖の墮落後直ちに之を回復することを爲さざりし乎。曰く、何故に「救世主」は四千年後に出現したる乎。曰く、何故に「救世主」の宗教は、其當時に於て全世界、全人類に告知せられざりし乎。凡そ是等の問題は、「何が故に徳義の要求古今其

規を一にせざる乎」といふ問題と同じく、是が根本的解釋は、吾人の得て知る能はざる者なり。何となれば、是れ神の意志にして吾人の量り知る所に非らざればなり。若し夫れ斯の如き疑問を以て、其問題を否定せんには、その結果遂に無神論に至らざる可らず。而して神を信せず、或は神の啓示を信せざるは、是れ全く「信仰」その者を排したるに非ずして、一の信仰より他の信仰に轉じたるのみ。ア、世の不信仰者は、基督教徒の信仰を以て、荒唐無稽なりとして排撃すれども、自己の信仰の更に荒唐無稽なるを知らざるなり。吾人は無神論といふ信仰の至りて基礎なき者なることを常に嘲笑する者なり。

智識のみを以て宇宙を解釋するとは到底爲し難きとなり。文豪ギョーテの名作「フワウスト」籍中ワグネルの語に曰く、

智識の追求は倦退なる者にして

生命は如何に短きぞや、*Ars longa, Vita brevis!* (學術は長く一生は短し)

如何に胸も頭も過勞せられて

失望して無益に尋求より退縮するか

嗚呼如何に困難を以て

我等を智識の泉に導く道の尋ねらるゝか
而してその路の發見せられ

長途の半に至る前に、衰れなる難澁者なる哉、我等は死せざるべからず

然り、「智識の追求」は何處まで行くとも果てしなき者なり。而して學術は長く一生は短きのみならず、我等の爲には大なる此の世界は、神に比較すべからざる程小にして、その世界の一角に存在する人間の智識や理性にては、神實在者の全體を究知する能はざるは言ふまでもなく、その意志の千萬分の一も知るに難かるべし。蓋し神の政たるや廣大無邊、糾紛錯雜して、一見して著見明晰ならざるが故に人間の弱小なる頭腦を以て之を量定計測すると頗る難し。然るに感論を逞うする彼の一聲は、之を悉知せんとするなり。是れ自己を知らざるの愚なり。尤も神の意志も、吾人信仰と熱心とを以て之を講究するに於ては、その幾分は之を知るとを得べしと雖、その全體を知るとは、到底及ばざる企なり。吾人は最後に、露國詩人デルザヴンが神を讀したる詩中より、左の二段を引用して讀者に示さんとす是れよく吾人か言はんことを欲する所を言ひたるを以てなり。原詩は流麗にして壯嚴なる詩句なれど、予の譯文に至りて粗雜なり。されば唯意味を通ずるのみなり、詩調は之に於て見る可らず。

あゝ永久なる者、そが光榮ある存在は

一切の場所を占め一切の運動を導く

萬物を荒廢して飛べる時を通じて變せず

爾唯一の神！ 他に一の神はあなす

獨り爾のみにてその存在を充せる者なり

誰か爾を知り爾を探り得んや

萬物を包み、支へ、支配する者

吾等稱して神といふ而して此の外を知らず

その高妙なる追求の爲に哲學あり

大海の深さは量り得べし、沙土或は

太陽の光線は算へ得べし、されど神よ

爾を量る器はあらず、誰か得べき

爾が秘密に達することを、爾の光にて

理性はよしや輝くとも、益なかるべし

無限にして闇き爾が巧を逞はんには

かの過ぎ行く瞬間が永劫の中に消ゆるが如く

思想は高きに登らんとする前に既に消ゆるなり

不信仰なる者よ、無神論者よ、汝等は此の詩人の句を讀みて如何に感ずるか。思ふに汝等は、未だ知らざる外國語を耳にするが如く、この句より何の感情をも得ざる可し。これ實際ならん、盲者は色を知る理なければなり。

十二

異教の哲人セチカと聖使徒パウエル

我が基督教は天啓の宗教にして、他の異教諸宗とその類を異にし、上帝の事、道義の事等に於て大に俊秀する所あるは、信者諸子の能く知る所なり。然れども基督教外の教説、宗教とて、全然排斥すべき者に非ず。勿論是等の諸説、諸宗教に於て誤謬の見解、野蠻の徳義多々ありと雖、その中に亦真理の掬すべきものありて存す。例を至りて近きを取らば、所謂孔孟の學なるものは、吾人が之によりて全く人生の方針を完めんとするには、あまりに粗大に失するを以て、人に満足を與へずと雖、孔子の所謂『君子』なる理想は、如何に高潔なるか、又孟子が義氣に富み、共和的の雄大なる思想は、如何に人類を鼓吹したるかを思へば、吾人は彼等を異教の大哲人として尊崇の念を致し、その教義を記せる書も、亦愛讀に價するなり。又佛教の如きは、その教義、根本的に誤謬に陥れる者なれば、宗教としては、至りて價值なき者なりと雖、唯單に『諸惡莫作』の方面、即ち道德的の訓戒に至りては、頗る多方面にして、詳細なると、驚くばかりなり。

蓋人類は天父の所造にして、精神を「彼」より受く。性を破り、情を揉め「彼」と相去ると遠違なるに至りても、その一度受けし精神を全く荒廢し盡すと能はず。罪惡の淵に沈淪して混濁なる一生を送る者も、時に亦眞理の微光を認め、悔改の涙に咽ぶとなしとせず。蓋人間は理性ある動物なり。されば異教徒のうちにも、眞神の存在を信じ、眞理に近づき來る者少なからず。ピタコル、ソクラット、プラトン、エピクル、マルク、アウレリ、セチカ等は、その數例にして、これらの哲人は、闇黒なる異教徒の中にありて、眞理の微光を放ち、彼等の道を照したる者なり。彼等は聖使徒パウロが、所謂「心に銘されたる律法」〔羅馬書二章の十五〕によりて、人類を教化したるなり。

今吾人は、セチカの書を引用して、如何に異教の哲人が、眞理を追求したるかを讀者に示さんとす。

セチカの云ふ所、使徒パウロの書冊と類似する者あり、左れば茲にこの二者を相對照して掲ぐ。

一 神の内在

聖パウロ云、「爾曹は神の殿にして、神の靈なんぢらの中に在すことを知らざるか。」〔哥林多前書三の十六〕
「神は汝に近し、汝と共にあり、汝の中にあり。」とセチカはその友ルシターに送りたる書簡に於て記せり。この諸書簡は道義上の教訓を多く含有する者なり。「一の聖なる靈は我等の中に住す、我等の一切の善惡の觀察者にして且保護者なり……神なくして一の善人あるとなし。」

又云。(書簡七十三)人が諸神に行くことを汝は驚くか。神は人々に來れり、否、是よりも尙近し。「彼」は人々のうちに來れり。如何なる善心も、神なくして聖なる能はず。」

二 神の眼

「また物として神の前に顯はれざるはなし、我儕が係れるものの眼の前に、凡てのもの裸にて露る。」〔希伯來書四の十三〕「なんぢ祈る時は、嚴密なる室にいり、戸を閉ぢて、隱微に在す爾の父に祈れ、然らば隱微に察たまふ爾の父は、明顯に報いたまふべし。」〔馬太傳六の六〕

セチカはその著「天道論」に於て曰く、「良心を我等の中に閉づるも、何の益あるとなし、我等は明に神を欺くなり。」書簡八十三に曰く、「事物を人の前に隱蔽するも何の益あらんや、何事も神の前に隠す能はず。」「彼」は我等の心中に現存す、而して我等の中心の思想に入る。「同書簡に又云。「我儕は常に衆人の前にあるが如く生活せざる可らず、我儕は或る人がわが内心を洞觀し得ることを考ふるを要す。」

三 神は靈なり

聖パウロ云へり。「かく我儕は神の子なれば、其神を金銀または石など、人の工と巧とを以て造れる者と均しく意ふ可らず。」〔使徒行傳十の七の廿九〕

セチカ云。(書簡、卅一)。「一隅より天に登るとすら難し、是故に起きよ、而して神の價ある容に汝自

らをかたちづく。然れども汝は金銀を以て之を爲す能はず。神の像は斯の如き物質を以て容づくと能はず。』

四 神に效ふ事

『なんぢら愛せらるゝ兒女の如く神に效ふべし。』(以弗所書一の五)『此の如くして、(聖神に於ける正義、平和、喜悅)基督に事ふる者は、神の心に適ひ、また人に善とせらるゝなり。』(羅馬書十の四)

セチカ(書簡、九十五)『汝は幸なることを諸神に願ふか。徳を行へ。彼等を讃するには、彼等に效ふに足れり。』又曰、(書簡、一二四)『人をしてその善を謀らしめよ。この善とは何ぞや。俗事の上に超然として立ち、その欲望を制し、悔改したる潔白なる心、即ち神に效ふ者これなり。』

五 偽善は白き墓の如し

『噫なんぢら禍なる哉、偽善なる學者とハリセイの人よ、爾曹は白く塗りたる墓に似たり、外は美しく見ゆれども、内は骸骨と諸の汚穢にて充つ。』(馬太傳廿三の二十七)

セチカ曰く。『汝が幸福ならんと思へる所の人々を、その外部より非すして、隠蔽せらるゝ所を一觀せば、卑陋、下賤、凡庸なるを見るべし、恰も外部のみを飾りたる壁の如し。是れ決して確實にして眞正なる幸福に非ず、漆灰同様にして、薄きものなり。而して彼等が立ちてその快樂を味ふ間は、炫

耀して吾人を欺くと雖、一朝事あるに際しては、その本體を顯はさるゝことなく、外觀の美が如何に眞恐を蔽ひしかは瞭然たるべし。』

六 種蒔きの譬話

『沃壤に遺し種あり、實を結べると、或は百倍、あるひは六十倍、あるひは三十倍せり。』(馬太傳十の三の八)

セチカ云ふ(書簡、三八)『言葉は猶種の如し。たとひ小なりと雖、適當なる地を有する時は、その力を顯はして、小量より多量を得べし。道理(Reason)も亦斯の如し、……話されたる事は僅小なりと雖、若し心にしてよく之を受けなば則ち、力を得て發生すべし。』

七 人は皆罪人なり

『もし罪なしと言はば、是みづから欺けるにて、眞理我らにあるなし。』(約翰第一の二の八)

セチカその著『怒の論』(二の十四及二の二十七)に於て言へるあり。『若し我等にして萬事を正しく判せんと欲せば、左の一事を追求せざる可らず、曰く、我等の中に過失のなきもの一人もなし。……何人も自己の赦免すべきを發見せずとも、彼は之を證するに足る者あらば、自己の罪なきを主唱して、その良心を顯みず。』

八 貪吝

『財を慕ふは諸の悪事の根なり。』(提摩太前書 六章の十節) セチカ(其著『靈魂安靜論』八に於て)曰く、『富は……人間の苦勞の最大の源泉なり。』

『なんぢら世を過るに、食るをせせず、有るところを以て足れりとせよ。』(希伯來書 十三の五) 『それ衣食あらば、之をもて足れりとすべし。』(提摩太前 書六の八)

セチカ(書簡、一一四)曰く、『吾等若しその欲する所僅小ならば賢たるべし、若し人自己を計り、同時にその身體を量らば、自己の如何に小にして且つ短なるかを知るとを得べし。』又曰く、(書簡、一一〇)

『我等はポラインタ(Polenta) 食物の名)を有し、水を有す、ジュピタルと幸福を較べしめよ。』

『神を敬ひて足ることを知るは大なる利なり。』(提摩太前 書六の六)

セチカ曰く、(書簡、一一〇)『何すれど汝は警駭を以て駭る、か。是れ既に示されたり、現存する所の者は、所有のものならず……寧ろ汝の心をして眞の富に傾かしめ、小量を以て満足することを學べ。』

『富者の神の國に入るよりは、駱駝の針の孔を穿るは却て易し。』(馬太傳十 九の二四)

セチカ(書簡、二〇)曰く、『自己の周圍に散布する財貨を見て、心を止めず、人より開きて始めて自己の者なりと思ふは、高尚なる人のとなり、富を以て人に腐敗せしめられず、富中にありて貧にして猶且その貧に安んずる者は大なる人なり。』

九 仁愛の義務

『兄弟の愛を以て互に愛し云々。』(羅馬書 十二の十)

セチカ曰く、『怒の論』一の五)『人は互に助くる爲に生れたり。』

『汝自らの如く汝の隣を愛すべし。』(利未記十 四の十八)

セチカ(書簡、四十八)曰く、『汝その身の爲に生さんと欲せば、他人の爲に生きざる可らず。』『怒の論』

(三の四三)に曰く、『我等人の中にある時は、仁愛あらしめよ。我等をして危険と恐怖との原因なるが如き者たらざらしめよ。』

十 體の肢の事

『爾曹は基督の體にして亦おのゝその肢なり。』(哥林多前書 十二の二十七) 『各々基督に於て一體たれば、亦たがひに其肢たるなり。』(羅馬書 十二の五)

セチカ曰く(書簡、九五)『吾儕は破船者に手を與へ、迷へる者に道を示し、飢ゑたる者に食を與ふるとを教ふるか……我等は人間の義務に關する信仰を何を以て説明せんか、神事をも、人事をも含有する所の者一あり、曰く、我等は一の大なる體の肢なり、即ち是なり。』

十一 竊に善を爲すと

「なんぢ施濟をするとき、右の手の爲すことを左の手に知らずる勿れ。」(馬太傳 六の三)
セチカ(その著「恩恵論」二の十一)曰く、「施濟する所の者をして言なからしめよ……凡そ施濟に於て避くべきものは、傲慢より切なるはなし。」

十二 神の無差別善

「それ天の父は其日を善き者にも惡しき者にも照し、雨を義しき者にも義しからざる者にも降し給へり。」(馬太傳 五の四五)

セチカ(「恩恵論」二の一)曰く、「光を與ふるに足らざる人は多くありと雖、尙日は出づるなり。」同上七の三十一に曰く、「諸神は彼等を認めざる者にも恩を施し、彼等を感謝せざる者をも永く保護す……彼等はその恩恵を差別なく諸國民にそゞぐ……彼等は和かなる驟雨を地に注ぎ、風を以て海を動かし星宿の改新に由りて四期の別を生せしめ、和風の媒介に由りて冬夏をゆるらす。」

以上は、セチカの書より數ヶ條の類似を引證したるのみなり。その他斯の如き例によりて箇條を設けて、之を網羅せば、尙多くを得べきなり。セチカの如きは異教の人なりと雖、基督教の天國より遠かりたる人にはあらざりしなり。かの雄辨なるボスエトが「自然の基督教」と云へるもの、吾人之をセチ

カに於て見る。聖ベルナルド曰く、「人間に於ける神の像は、焼かれ得べしと雖、之を焼き盡すと能はず」と。吾人思ふに、セチカ亦神の像をその心中に有し、以て異教の哲人となり、徳義、眞理の光を衆に示したる者なり。

〔著者曰く、本篇引用する所の聖書は正教會譯に非ず、然れども印刷既に出來たるを以て之を改むるには多くの時間を要し且つ予今健康常ならず筆を執るにもものうし、依てそのまま、讀者之を諒せよ〕

本書の終に題す

顧みれば悲みや多し
人の世終に何する者ぞ

„Plus de repos pour mon coeur endolori,
J'ai perdu le bonheur et l'esperance”

處女に似たる悲み昨はありしを

今や荒沙に迷ふ旅人の思ひ

ウエルテルのリボン我になくとも

思ひをつらるペンはあり

夙に起き夜深に伏し

友とす東西の故人を

さはれ思はざらめや青春の昔

東京にて 山田 枯柳

9/34

明治卅六年十一月廿五日印刷
明治卅六年十二月二日發行

定價金參拾錢

著者 山田 豊彦

東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地

發行者 笹川 賢八

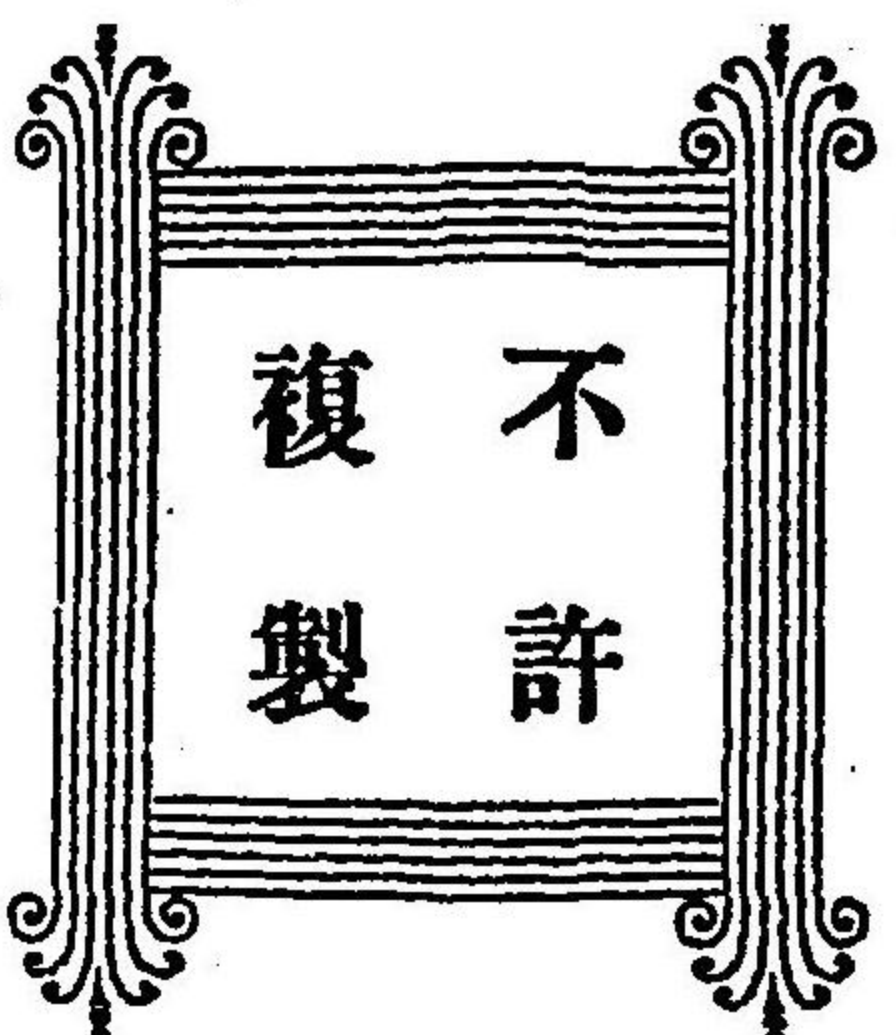
東京市本郷區湯島切通坂町五十一番地

印刷者 植原 儀直

東京市本郷區湯島切通坂町五十一番地

印刷所 建昇堂

〔電話下谷千三百六十番〕

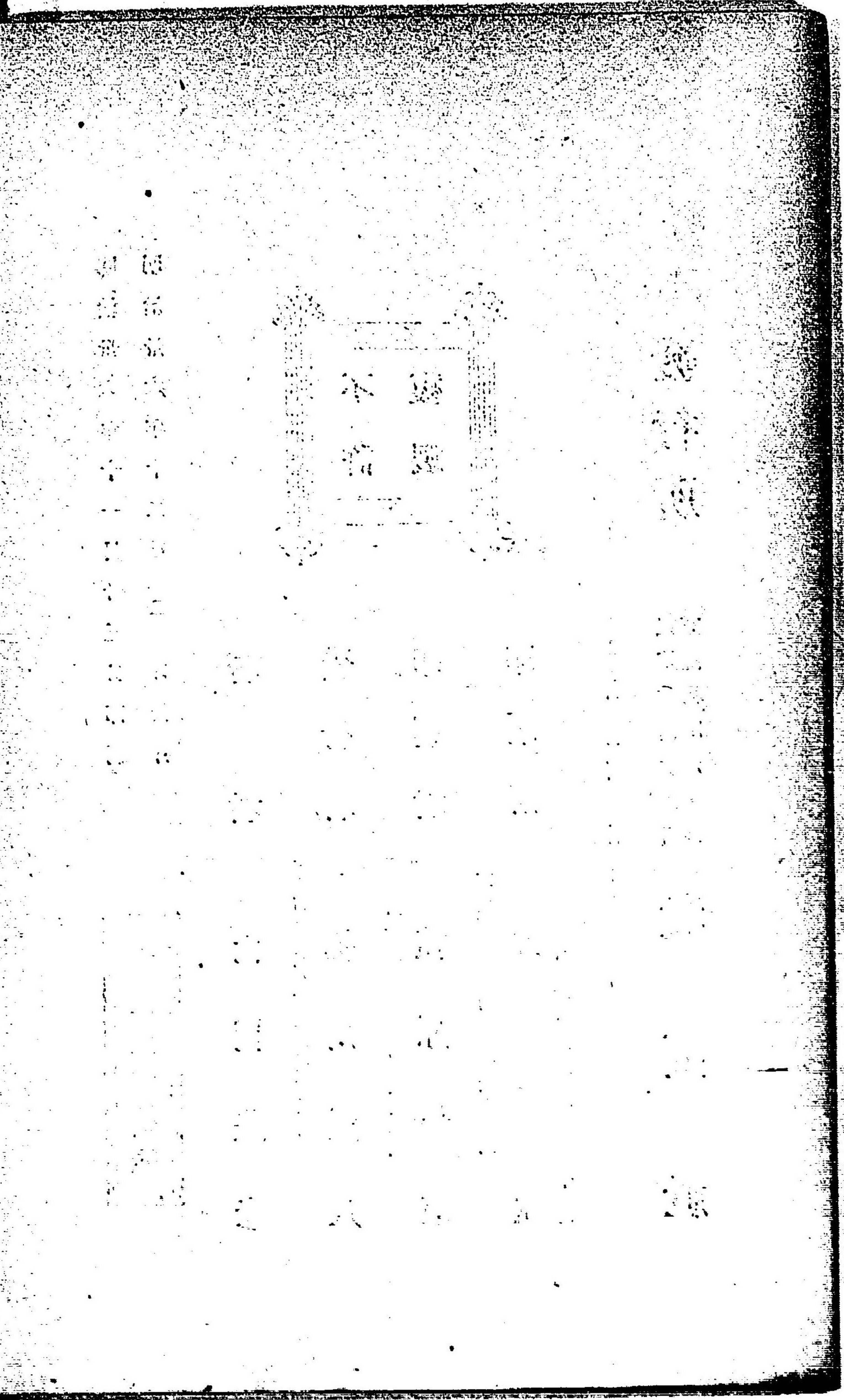
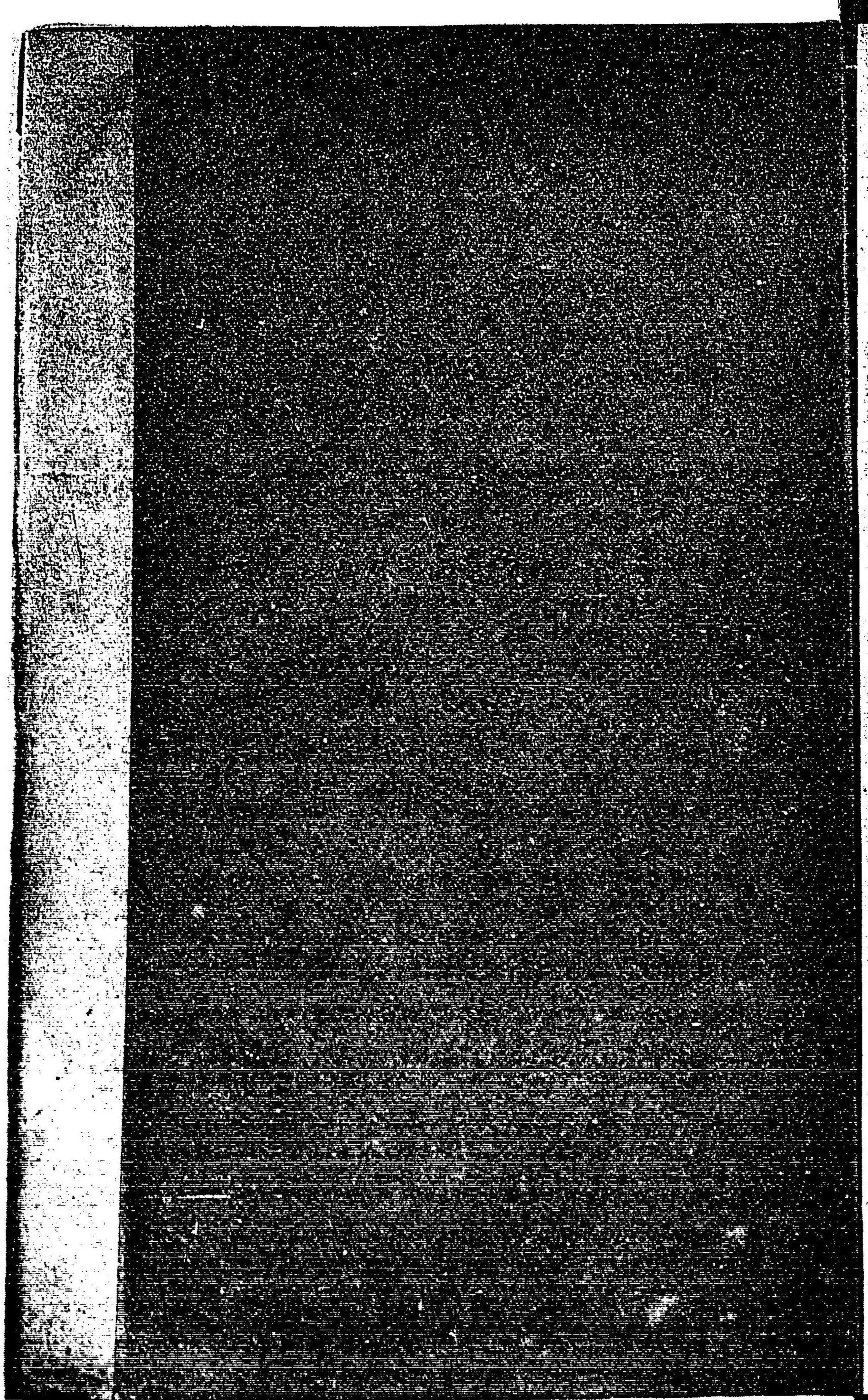


不許
複製

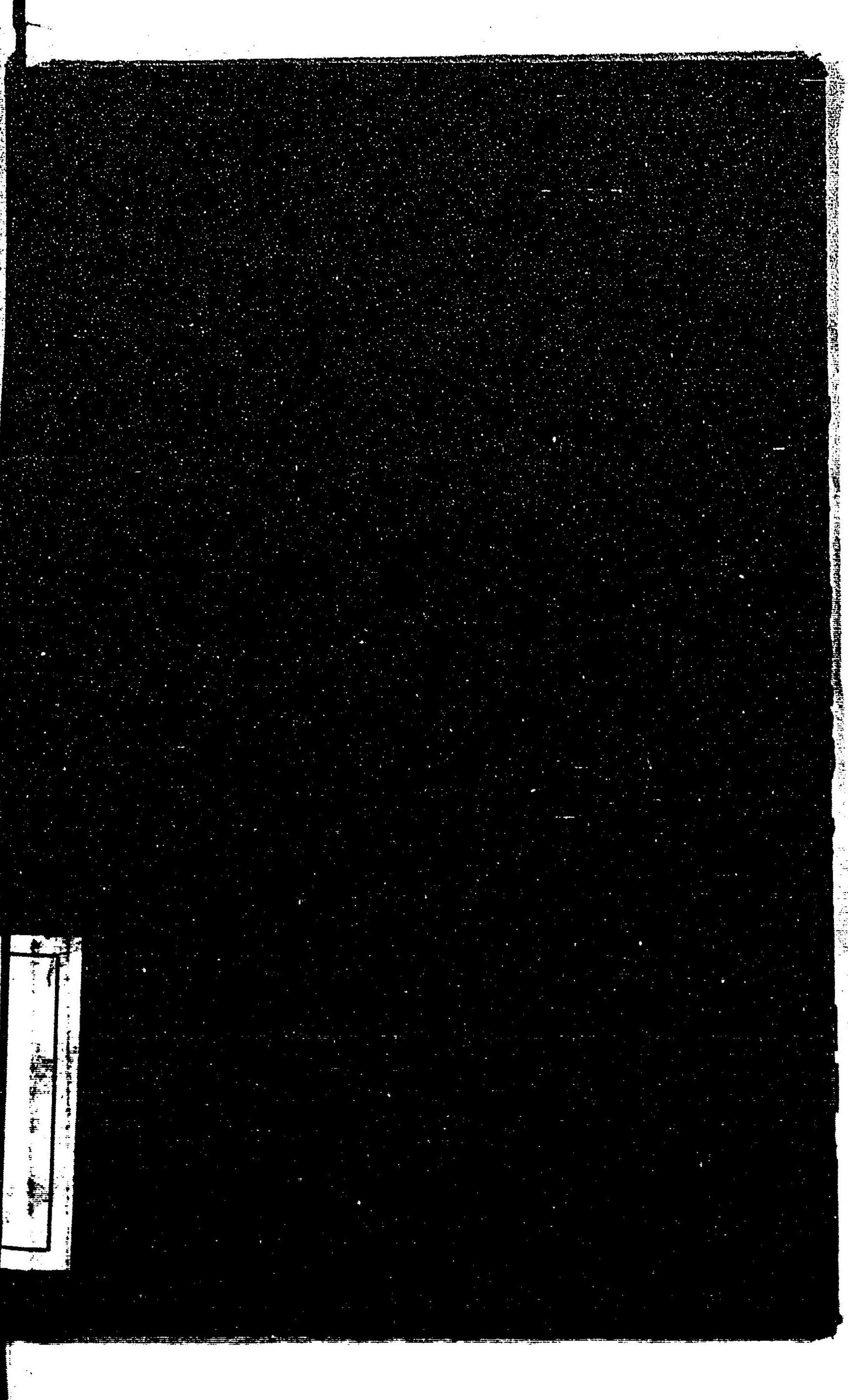
發行所

東京神田駿河臺
東紅梅町六番地

教要社



81
1002



020710-000-9

81-1002

宗教的批評的論文集

山田 豊彦(枯柳) / 著

M36

ABI-0530

